

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター 研究紀要 第1号

Bulletin of Archaeological Center

: Kochi Prefectural Culture Foundation Vol. 1

研究紀要

第 1 号

発刊にあたって

原 雅彦

周辺地域における土師器の様相
— 1. 南四国の古式土師器 —

廣田佳久

宿毛式, その特質

前田光雄

1994.3

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター

Bulletin of Archaeological Center

: Kochi Prefectural Culture Foundation Vol. 1

研究紀要

第 1 号

1994.3

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター

発刊にあたって

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターは平成3年に発足して以来、埋蔵文化財に係る多くの事業に着手してきました。

近年の考古学ブームは本県においてもみられ、遺跡の発掘調査は多くの衆目の的となっております。発掘調査成果は調査記録の報告書となって、多くの市民、研究者に活用され、本県の歴史研究、考古学研究に活かされております。

しかしながら、それ以上に発掘調査成果を深め、さらに本県の歴史、考古学研究を発展させるためには、今までの個別の調査記録を統合的に研究していくこともセンターの事業の一環として必要なことです。発掘調査、報告書作成等の日常業務の多忙の中、ややもすれば研究成果の発表は二の次になりがちですが、センター職員は行政に携わる一職員であると同時に、研究者としての一面も有しております。そうした職員の日頃の研究成果が今後の発掘調査、報告書作成に活かされるばかりではなく、今後の本県の歴史、考古学研究に供されることを願ってやみません。

この研究紀要の発刊にあたり、関係各機関から寄せられましたご協力等に対して、御礼を申し上げますとともに、さらにご指導の程をお願いする次第であります。

平成6年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
所長 原 雅彦

周辺地域における土師器の様相

— 1. 南四国の古式土師器 —

廣田佳久

-
- | | |
|------------|------------------|
| 1. はじめに | 4. 古式土師器の編年 |
| 2. 研究史抄 | 5. 古式土師器の特徴とその意味 |
| 3. 古式土師器資料 | 6. おわりに |
-

1. はじめに

南四国とは北を四国山地、南を太平洋に面した一見孤立した土地として見られがちな地域であり、現在の行政区分では高知県に当たる。元来文化変遷の渦中にあった地域からややもすると忘れられがちな、言わば周辺地域である。東西に細長く、四国山地に大きく阻まれ、他地域からの文化の伝播のルートは、遺跡の分布を見る限り、8世紀末に四国山地を越えて伊予へ出る北山越えの道が開かれるまで、阿波から室戸を回る東回りのルートと伊予を経由して宿毛、中村を通る西回りのルートが主たるものであったと推考される。このような地域の文化の様相を探るものとして今回は土師器を題材とし、まず、古式土師器を取り挙げた。特に時代の移り目にはこの地域の特徴が比較的良くでているものと推察されることもあり、延いては南四国と云う周辺地域として見られがちな地域の文化の様相の一端を垣間見れるものと考えてるのである。

南四国の土師器については、弥生土器や須恵器などに比べ、今までに取り上げられる機会も少なく、ましては俎上に上ることはほとんどなかったのではなかろうか。確かに今のところ弥生時代後期後半の遺跡数・遺物量などと比較すると極端に少なく、この要因を発掘の絶対量と

考えることも可能であろうが、今まで良好な資料に恵まれなかったことも事実である。そのようなこともあり、現在整理中のもの以外できるだけ多くの資料の掲載に努めた。また、標準遺跡として提唱されながら実測図が提示されなかったものなども取り挙げ、今後の検討にも共している。なお、ここで云う古式土師器とは、南四国で須恵器が出現する概ね5世紀後半までの時期の土師器をいう。

2. 研究史抄

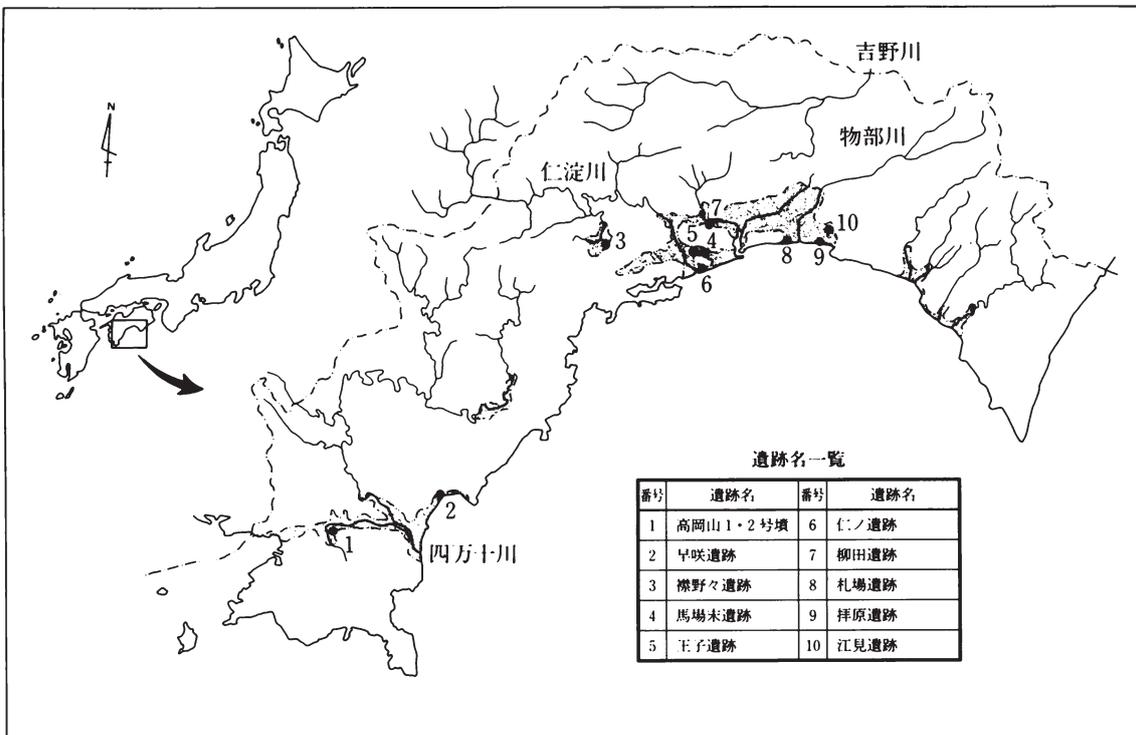
南四国の場合、岡本健児氏の一連の研究を抜きにしては語れないであろう。特に、弥生土器の研究については顕著であり、中でも今回のテーマに関連するものとして、昭和49年に行われた土佐山田町ひびのき遺跡¹⁾の調査において設定された「ヒビノキ式」があり、それには同氏の弥生土器から土師器にかけての編年観が提示されている。それ以外では、最近の同時期の遺跡の調査報告書の中で若干の意見を垣間見る程度である。以下、具体的にその内容をみてみよう。

南四国の土師器について初めて記されたのは岡本健児氏が昭和34年に著した『土佐の原始と古代の文化』であろう。そして、南四国の土師器の編年が最初に試みられたのは『高知県の考古学』一郷土考古学叢書2—(昭和41年)におい

てである。それによると、古墳時代の土師器を3様式に分類し、第I様式(上細工瀬式土器)、第II様式(前浜式土器)、第III様式(波川式土器)と仮称し、第IV様式には須恵器を伴うとしている。それを補足したのが『高知県史』一考古編一(昭和43年)である。様式を型式に換えてはいるが、編年観は同じであり、古墳時代の土師器を今度は3型式に区分し、古墳時代前期に1型式、中期に1型式、後期に1型式をそれぞれ設定している。その内古式土師器に該当するのが土師第I式と土師第II式であり、土師第III式の段階から須恵器が伴出する設定である。そして、弥生土器から土師器への変遷で重要になったのが先述のひびのき遺跡の調査であろう。それによって、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての編年案が提示されたのである。型式名ではヒビノキI~III式に当たり、ヒビノキI・II式が弥生土器、ヒビノキIII式(庄内式土器)が土師器に該当させている。ヒビノキIII式については

「…朝顔型に開いた二重口縁のしかも丸底の壺型土器をもつ。また甕型土器はヒビノキII式土器の時期から、とくに盛行してくる敲目跡が器面一面につけられ、しかも丸底である。壺型土器や高杯形土器のなかには、庄内式土器とまったく類似するものがある。…(中略)…西暦四世紀前半と考えてみたいところである。…」の記述がある。ただ、ヒビノキIII式とされる時期の住居跡にはヒビノキII式とみられる土器もみられ、実際発掘調査では伴出例も少なからずあり、個体同士で識別することは無理があるのではなかろうか。なお、この問題は後で詳述したい。

翌昭和50年には春野町馬場末遺跡³⁾の発掘が行われ、ヒビノキIII式に続くものとして馬場末式が提唱されている。タタキ目がなくなる時期のものとして捉えられているが、昭和51年に刊行された報告書では実測図は掲載されていない。つづいて岡本氏は「南四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古希記念古文



第1図 遺跡位置図

化論集』(昭和57年)の中で、ヒビノキⅢ式にふれ、「…筆者はすべてこれらを土師器として把握しているが、あえて第Ⅵ様式土器と呼称し、…」と記している。ヒビノキⅢ式が土師器であるなら敢えて第Ⅵ様式という言葉を使用する必要はないし、南四国のそれ以前の土器に対して様式論が展開されたこともなく、その意味については不明確ではあるが、都出比呂志氏の提唱する「第Ⅵ様式」⁴⁾とは明確に違うものであろう。なお、編年観については従前と変わっていない。

以後、弥生後期後半の土器の出土量の増加に伴ってヒビノキⅠ・Ⅱ式などの細分は試みられているが、古式土師器について特に俎上に上ることも少なく、春野町西分増井遺跡⁵⁾や拝原遺跡⁶⁾の報告書の中で岡本氏の編年観に則し将来古式土師器を4型式に区分する考えと大方町早咲遺跡⁷⁾の報告書の中で地域に根差した土師器の再編成の提言などがみられる程度で今日に至っている。

近年、少しずつではあるがヒビノキ式とは識別できる個体や布留式土器など搬入品の出土が散見できるようになって来ており、本稿ではそれらを型式分類することにより古式土師器の変

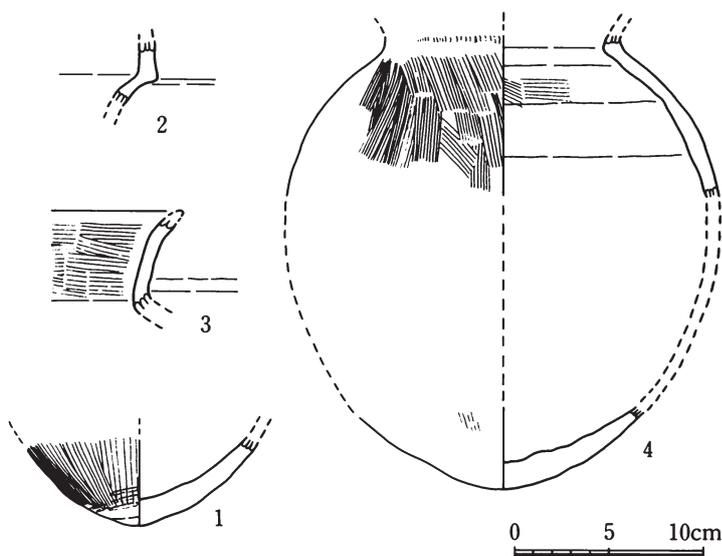
遷を追い、当時の様相を推察してみたい。

3. 古式土師器資料

ここに取り挙げた資料は、宿毛市高岡山1・2号墳⁸⁾出土の資料以外すべて集落遺跡や祭祀関連遺跡から出土した資料であり、古墳出土のものはこの2基に限られる。これは南四国に前期古墳が極めて少ないことに起因している。また、資料の中には対比する意味で同一の遺跡から出土した弥生時代終末期の土器や庄内系土器とみられる搬入品なども取り上げている。以下、西部の遺跡から順に紹介して行く。

(1) 高岡山1・2号墳⁹⁾

四万十川の支流中筋川の上流の宿毛市平田町戸内字高岡山に所在する県下では今のところ初現期の古墳である。古墳は中筋川右岸で北西に向かって延びる尾根上に位置し、1号墳は一辺約18mの方墳で4世紀後半の築造と考えられている。主体部は、長辺4.35m、短辺0.80mを測る一種の礫槨とみられ、底面(棺床)から勾玉1・管玉13・筒形銅器1・青銅製小棒1・鉄刀(短刀)1が出土している。土師器は、墳丘頂部の盛土層から1、墳丘北斜面の表土層下から2が出土している。2号墳は、1号墳の北西側に隣接しており一辺約18mの楕円状の円墳と報告されており、築造は1号墳よりやや遅れるが、4世紀後半の範疇にはいるものと考えられている。主体部は、長辺4.80m、短辺2.28mを測る粘土と礫による外被施設を有した一種の礫槨であったとみられ、床面から勾玉5・管玉14・小玉26・石釧1・内行花文明光鏡(舶載鏡)1、墳丘の盛土中から土師器片が17点出土している。この土師器片の内



第2図 高岡山1・2号墳出土資料

復元できたのが3である。墳丘からの出土ではないが、1号墳の南側で4の土師器が出土している。

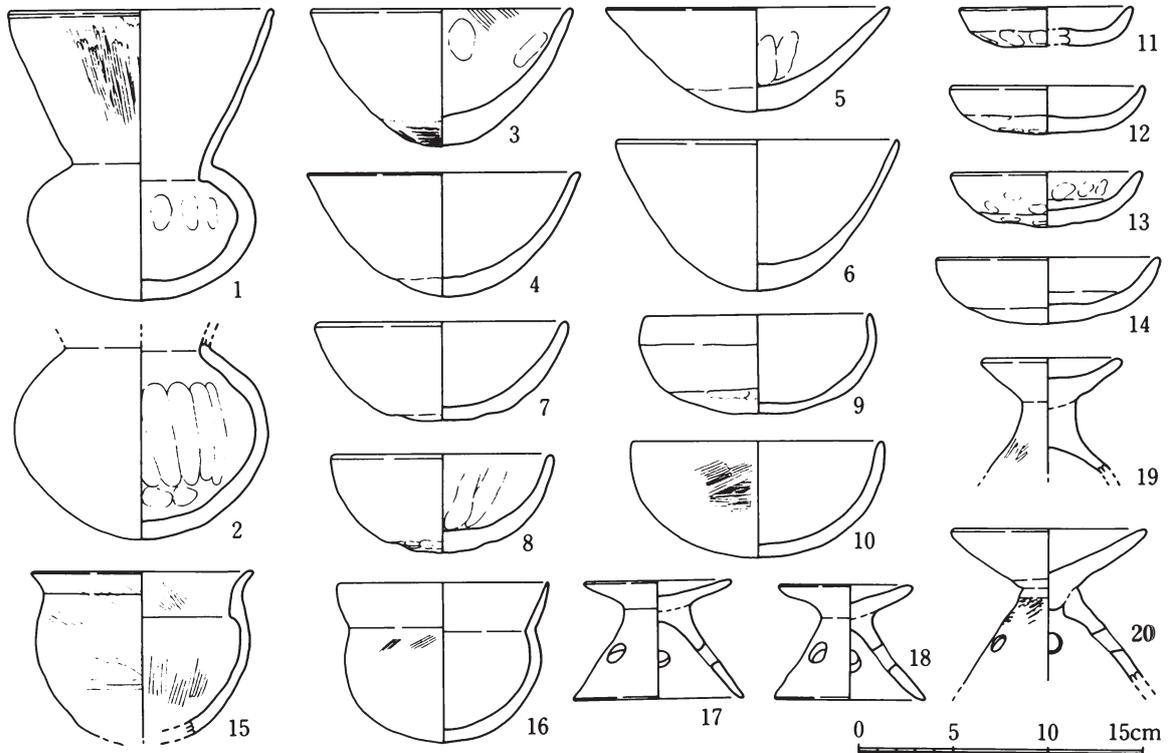
すべて壺であり、1はやや尖り気味の底部を有し、外面にはタテ方向のハケ調整が施されるが下方にタタキ目が僅かに残る。内面はナデ調整が施される。2は二重口縁の壺の破片とみられ、外面下部にはヘラ磨きの痕が残る。3は広口壺の口縁部とみられ、口縁部は上外方にのび、端部付近で外傾する。外面にはタテ方向、内面にはヨコ方向のハケ調整が施されている。4は肩部と底部の破片で、外面にはタテ方向のハケ調整が施されるがタタキ目は認められない。内面はハケ調整後ナデ調整を行ったものとみられる。また、内面には粘土紐の接合痕が残る。

(2) 早咲遺跡¹⁰⁾

幡多郡大方町入野に所在する弥生時代から古墳時代にかけての集落跡と祭祀跡に特徴付けられる遺跡で、特に5世紀後半～6世紀前半の祭

祀跡は注目される。遺跡は入野平野の東部を流れる加持川右岸の微高地の砂地に立地し、その範囲は東西約200m、南北約250mに及び、幡多郡では有数の遺跡に数えられる。古式土師器は住居跡を中心に約30点が出土している。

器種では、壺・鉢・小形器台が認められるが、良好な遺構の一括資料とはいいい難く、明瞭な甕の出土を欠く。壺は直口壺が2個体あり、1は断面楕円形をなす胴部に外上方へ比較的長くのびる口縁部が付く。口縁部外面にはハケ調整後にタテ方向のヘラ磨きが施される。2はほぼ球形をなす胴部を有するものである。内面には指ナデの痕が明瞭に残る。鉢には大きく5タイプが認められる。すなわち、椀状をなし底部が尖底となるもの(3～6)、ボタン状に成形の痕が残るもの(7・8)、丸底をなし体部が内湾して上がるもの(9・10)と皿状をなすもの(11～14)そして口縁部が球形をなす体部から屈曲するもの(15・16)である。小形器台はハの字形に開く



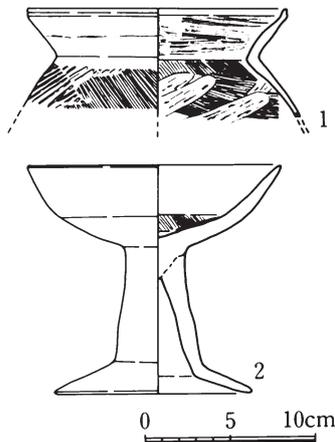
第3図 早咲遺跡出土資料

脚部に皿状の受け部を付けるもの(17・18)、中実の脚部に皿状の受け部を付けるもの(19)、中空の脚部に皿状の受け部を付けるもの(20)がみられる。この内3・4・7・10はST-4, 5・11~13・17・20はSX-8, 他は堆積層から出土している。

(3) 襟野々遺跡

佐川町永野に所在する遺跡であるが、調査は行われておらず、今回取り挙げた遺物も出土状況は全く不明である。また、現状は鉄道と町道となっており遺跡の性格は全く不明で、遺物で推測する以外にない。遺跡は春日川上流左岸の平野部に立地する。

出土した2点は共に搬入品とみられる。1は甕で、口縁部は胴部からくの字形に屈曲し、端部を上方につまみ上げている。胴部外面にはタタキの後にハケ調整を施し、口縁部内面にはヨコ方向のハケ調整、胴部内面にはハケ調整の後にヘラ削りを行っている。庄内式の甕とみられる。2は高杯で、杯部は緩やかな稜をもって斜め上方に上がり、脚部は、柱脚が比較的長く、



第4図 襟野々遺跡出土資料

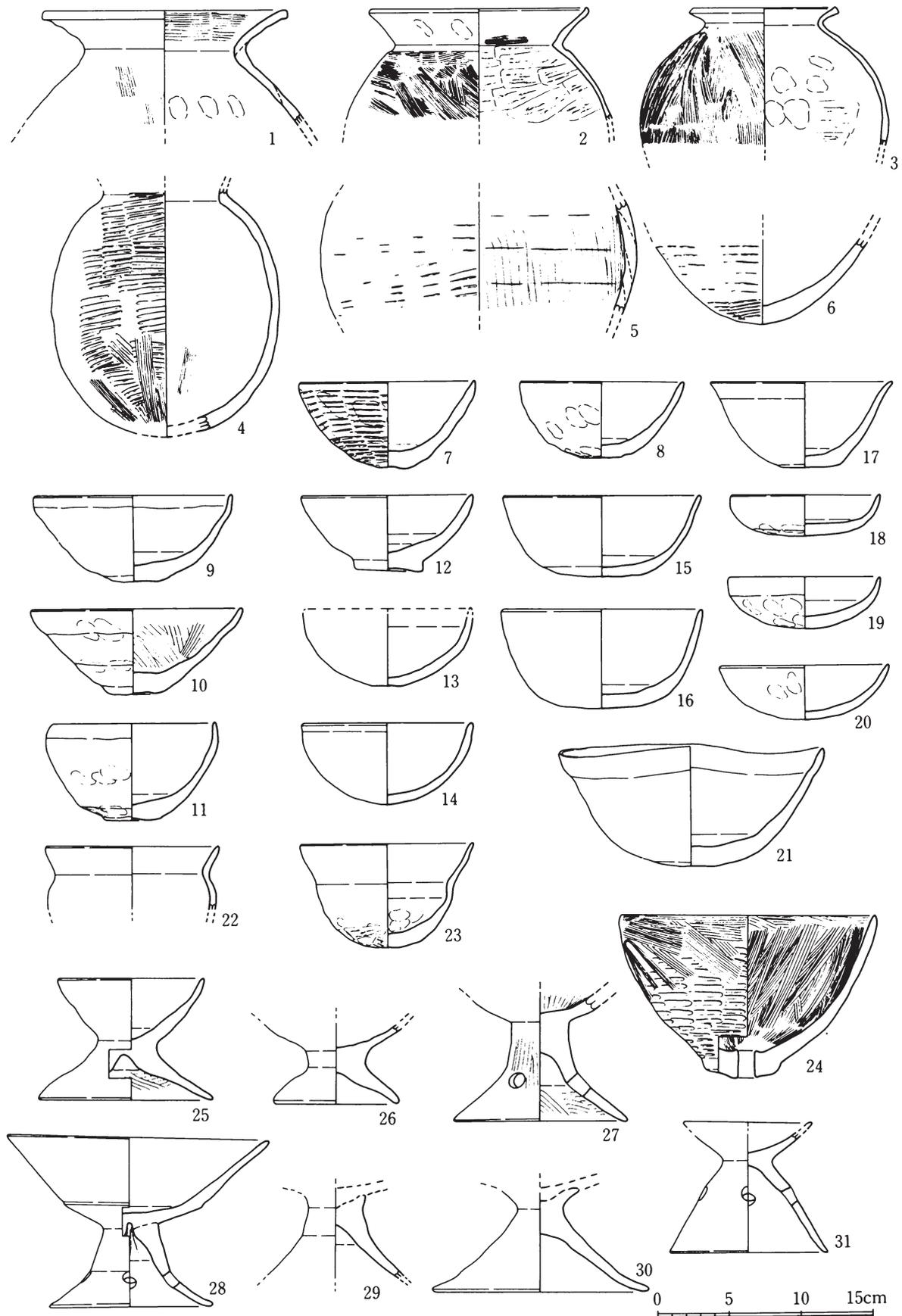
裾部が大きく開く。調整は不明瞭であるが、杯部内底面には放射線状にハケ調整を施す。时期的には1とほぼ同じものと考えられる。

(4) 馬場末遺跡¹¹⁾

吾川郡春野町のほぼ中央部、同町を東流する甲殿川から分岐して流れる新川川中流左岸の沖積平野に立地する遺跡である。馬場末式の標準遺跡である。遺物は明確な掘り方を持つ遺構か

ら出土したのではなく、1×2mの範囲に集中して検出されており、溝状遺構ではないかと報告されているが遺物の出土状況並びに土層断面図を見る限り祭祀的要素の強いものと考えられる。また、集中して出土しているが、型式差が看取され、弥生時代終末から古墳時代始めにかけて存続していたのではなからうか。

現状で確認できた器種は、甕6・鉢18・高杯6・器台1であり、早咲遺跡同様鉢の占める割合が圧倒的に高い。1は口縁部が肩部から大きく外反し、端部を下方に若干拡張している。口縁部外面はヨコナデ調整、内面はヨコ方向のハケ調整が施される。肩部外面はタテ方向のハケ調整、内面はナデ調整となっている。タタキ目は認められない。2は畿内河内系のものともみられ、口縁部はほぼ球形をなす胴部からくの字形に外傾し、端部を上方に幾分肥厚する。口縁部内面はヨコ方向のハケ調整の後外面と共にヨコナデ調整を加える。胴部外面はハケ調整、内面はヘラ削り調整がそれぞれ施される。3も搬入品とみられる個体で、口縁部はほぼ球形をなす胴部から短く外反し、端部を肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面はタテ方向のハケ調整、内面は中胴部にヘラ削りが認められる。東阿波型の甕の特徴に似る。4~6はタタキ目を有する在地の土器である。4は長胴形の胴部を有するもので、外面はタタキ目が残し、下胴部にはハケ調整がみられる。5も胴部の破片で、外面にはタタキ目、内面にはタテ方向のハケ調整が残る。6はやや尖り気味の底部で、外面にはタタキが施される。鉢は大きく6タイプ(A~Fタイプ)が認められる。Aタイプは椀状をなし、底部が平底またはボタン状に成形の痕が残るもので、外面にタタキ目が残るもの(7)、タタキを施さないもの(8~11)及び底部が高台状をなすもの(12)がある。Bタイプは椀



第5図 馬場末遺跡出土資料

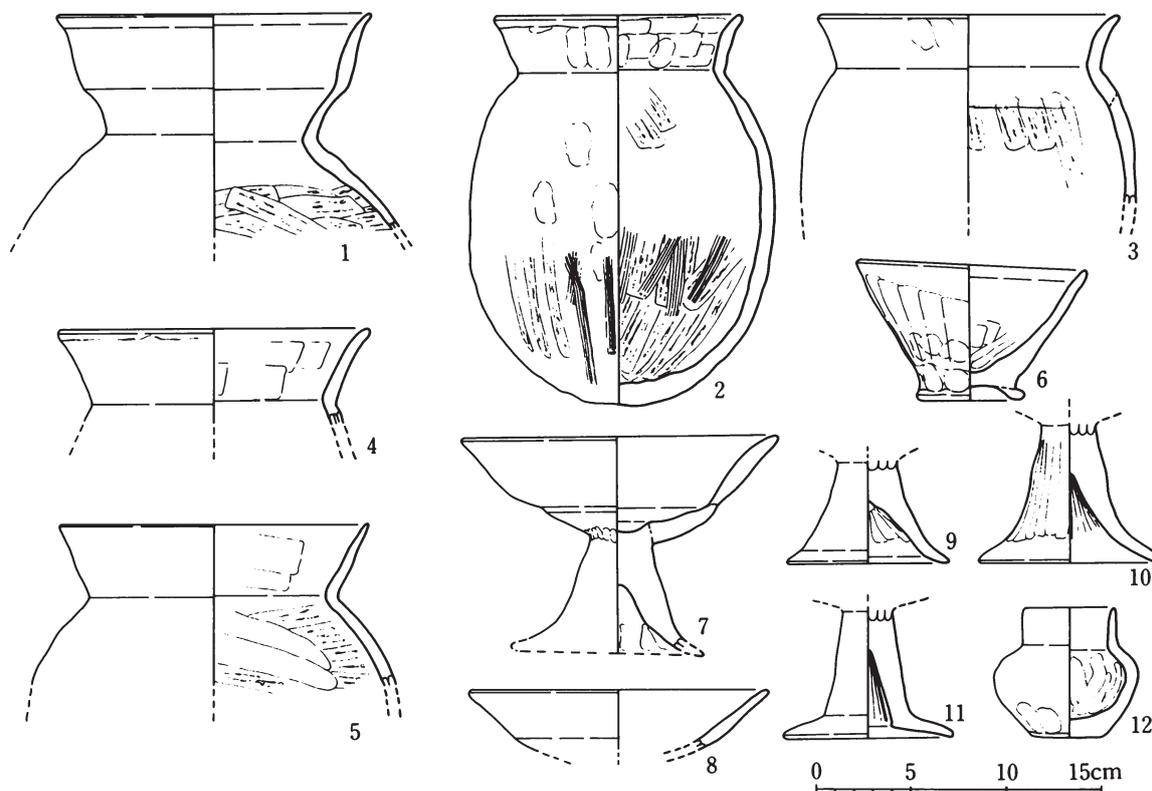
状をなし、底部が丸底を呈するもので口縁部が内湾するもの(13~16)と外反するもの(17)がある。Cタイプは皿状を呈するもの(18~20)である。Dタイプは口縁部が体部から屈曲するもの(21~23)で、23は所謂小形丸底土器で、口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はヘラ削りの後ナデ調整が加えられている。Eタイプは有孔鉢(24)で、高台状をなす底部に径約1.2cmの円孔を穿つ。調整は、外面ではタタキの後に口縁部のみハケ調整を加え、内面は口縁部のみヨコ方向で他はタテ方向のハケ調整が施される。Fタイプ(25・26)はBタイプの鉢にハの字形をなす脚台が付くものである。また、これら鉢の胎土には砂粒を少量しか含まない精良なもの(17~20・22・23・25・26)と砂粒を比較的多く含むもの(7~16・21・24)がある。高杯では中実の短い柱脚にハの字形に開く裾部が付くもの(27)、中空の柱脚にハの字形の裾部が付くもの(28)、脚部がほぼハの字形に開くもの(29・30)

が認められる。器台(31)は小さな皿状の杯部にハの字形に開く脚台が付くもので、脚部には円形のスカシ窓が四方に穿たれる。

(5) 王子遺跡¹²⁾

仁淀川左岸、吾川郡春野町の中央部西よりに位置する遺跡で、南にのびる尾根の山麓部の沖積平野に所在する。伊予川から分岐する高樋川が遺跡を丁度横断している。遺物は遺跡の縁辺部で検出された溝(SD-4)から2・6、P-4から12が出土し、他は包含層からの出土である。出土遺物の中には土製模造鏡もみられ、祭祀的要素が強い遺跡であると考えられている。

器種には、壺1・甕4・鉢1・高杯5・ミニチュア1が認められる。1は二重口縁をなす壺で、口縁部は肩部からくの字形に屈曲した後緩やかな稜を境に外反して立ち上がる。端部は細く仕上げられる。肩部内面にはヘラ削りがみられる。2は長胴形の甕で、口縁部は胴部から外傾してのび、端部でさらに外傾する。口縁部外



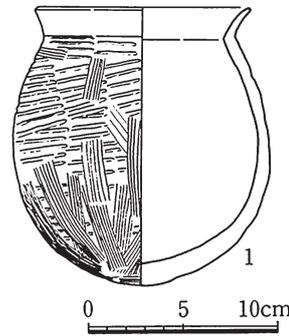
第6図 王子遺跡出土資料

面はナデ調整，内面はヨコ方向のヘラナデ調整が施される。胴部外面は部分的にタテ方向のヘラ削りとハケ調整，内面は下半を中心にヘラ削りと部分的なハケ調整が施される。3も長胴形の甕とみられる。口縁部は胴部から外傾してのび，端部でさらに外傾する。胴部内面には下から上へのヘラ削りがみられる。4も形態的にはほぼ同じものとみられるが，前二者に比べ口縁部が幾分長い。口縁部内面にはヨコ方向のヘラナデがみられる。5は球形に近い胴部を呈していたとみられる甕で，口縁部は胴部から外傾して外上方へ真直ぐのびる。端部は細く仕上げられる。口縁部内面にはヨコ方向のヘラナデがみられ，胴部内面にはヘラ削りの後部分的に指ナデが行われる。6は平らな底部に粘土紐を輪高台風に貼付したもので，口縁部は外上方を真直ぐ向く。体部外面には上から下へのヘラナデが施され，内面にも部分的にヘラナデがみられる。7は唯一全体が復元できる高杯で，杯部は稜を持って立ち上がり，口縁部でやや外反する。脚部は中実な柱脚にハの字形に短く開く裾部が付く。裾部内面にはヨコ方向のヘラナデがみられる。8は高杯の杯部で，緩やかな稜を持ち斜め上方へほぼ真直ぐのびる。9は高杯の脚台部で，柱脚は中実でハの字形に開き，裾部で短くさらに開く。内面にはヘラ状工具による放射線状の押圧が加えられている。10も高杯の脚台部で，柱脚は中実でやや開き気味に下り，裾部で外反する。外面にはタテ方向のヘラ磨きが施され，内面にはしぼり目が明瞭に残る。11も高杯の脚台部で，柱脚は中実でやや開き気味に下り，裾部で大きく屈曲する。柱脚内面にはしぼり目が残る。12は壺のミニチュア土器で，口縁部は肩の張った胴部から真上にのびる。底部は平らである。

(6) 仁ノ遺跡¹³⁾

仁淀川河口の左岸，大谷山から南にのびる尾根と高森山から南東にのびる尾根に挟まれた谷部に位置する遺跡である。遺跡の前面には土佐湾が開け，一種隔離された状況を呈す。遺物は包含層から弥生後期後半の土器が中心に出土している。今回取り挙げたのはやや新しい要素を有する土器である。

球形に近い胴部を有する甕(1)で，口縁部は胴部からくの字形をなし外傾する。口縁部内外



第7図 仁ノ遺跡出土資料

面はヨコナデ調整，胴部外面はタタキの後，下半に下から上へのハケ調整を加え，内面にはナデ調整が施される。

(7) 柳田遺跡¹⁴⁾

高知市の西部，鏡川と神田川に挟まれた自然堤防上に営まれた縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺跡である。当初弥生時代前期を中心とした遺跡であると考えられていたが，調査の結果，自然流路より弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての遺物が比較的多く出土したことからその時期を中心とする遺跡と考えられるようになってきている。また，その出土状況からして河畔で祭祀行為が行われていたのではないかと想定されている。

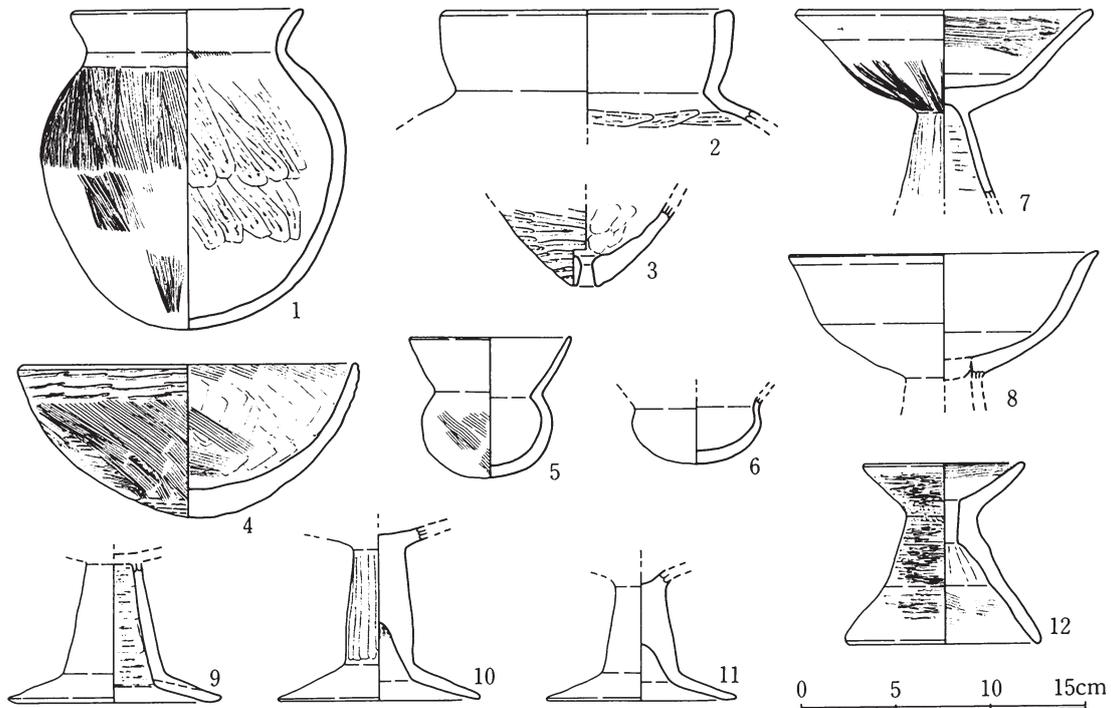
器種では，甕2・甑1・鉢1・小形丸底土器2・高杯5・小形器台1が認められる。1は，丸底で胴部が比較的球形に近い形態を呈するもので，口縁部は胴部から外反して短く立ち上がり，端部は丸く仕上げられる。口縁部内外面にはヨコナデ調整，胴部外面は3段にハケ目が残る，内面にはヘラ削りが施されている。2は胴

部が欠失する甕で、口縁部は胴部から屈曲して内湾気味に上がり、端部は内傾する平面を有する。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面はナデ調整、内面はヘラ削りが施される。3は甑で、尖った底部には円孔を穿ち、外面にはタタキ、内面にはナデ調整が施される。4は口径17.7cmと比較的大きな鉢で、口縁部は丸味のある底部から内湾気味に上がる。外面はタタキを施した後体部を中心にハケ調整、内面はヘラナデ調整の後部分的にハケ調整を施す。5・6は小形丸底土器で、5の口縁部は球形の体部から外上方へ内湾気味に上がり、端部は細く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はハケ調整、内面はナデ調整を施す。6は扁平な体部を有するもので、口縁部は欠損する。体部内外面にはナデ調整を施す。7～11は高杯である。7は、緩やかな稜をもって上がる杯部に中空の柱脚が付く。杯部外面下半に放射線状のハケ調整、内面にはハケ調整とナデ調整をそれぞれ施す。脚部外面にはタテ方向のヘラ磨き、内面

はヘラ削りが施される。8は比較的深い杯部を有するもので、稜はほとんどなく内湾気味に上がり、端部を細く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。9の脚台は中空の柱脚に大きく開く裾部が付く。柱脚内面にはヨコ方向のヘラ削りが施される。10の脚台は中実の柱脚にハの字形に開く裾部が付いたものである。柱脚外面にはタテ方向のヘラ磨きが施され、内面にはしほり目が一部に残る。11も形態的には10とほぼ同じであるが、器面が摩耗しているため調整は不明である。12は中空の小形器台で、皿状の杯部にハの字形に開く脚台が付く。外面全面に細かなヘラ磨きを施し、杯部内面にはヨコ方向のハケ調整、脚部上位にはしほり目、下位にはハケ調整後ナデ調整が施される。

(8) 札場遺跡¹⁵⁾

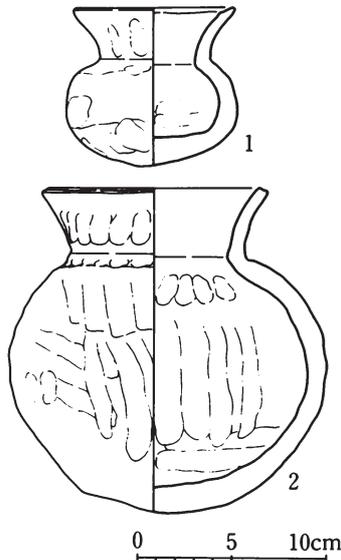
南国市の南端、十市の南に形成された砂丘上に位置し、前面に土佐湾を望むことができ、ここに取り挙げた遺物の発見により確認された遺



第8図 柳田遺跡出土資料

跡である。遺物は工事中に発見されたもので出土状況等は不明であるが、祭祀的要素の強いものではなかろうか。発見された遺物は壺が2点であった。

1は小形の壺で、口縁部はやや扁平な胴部から大きく外反してのび、端部を細く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整で、部分的に指頭圧痕と指ナデの痕が残る。2は器高17.4cmを度る壺で、口縁部は球形をなす胴



第9図 札場遺跡出土資料

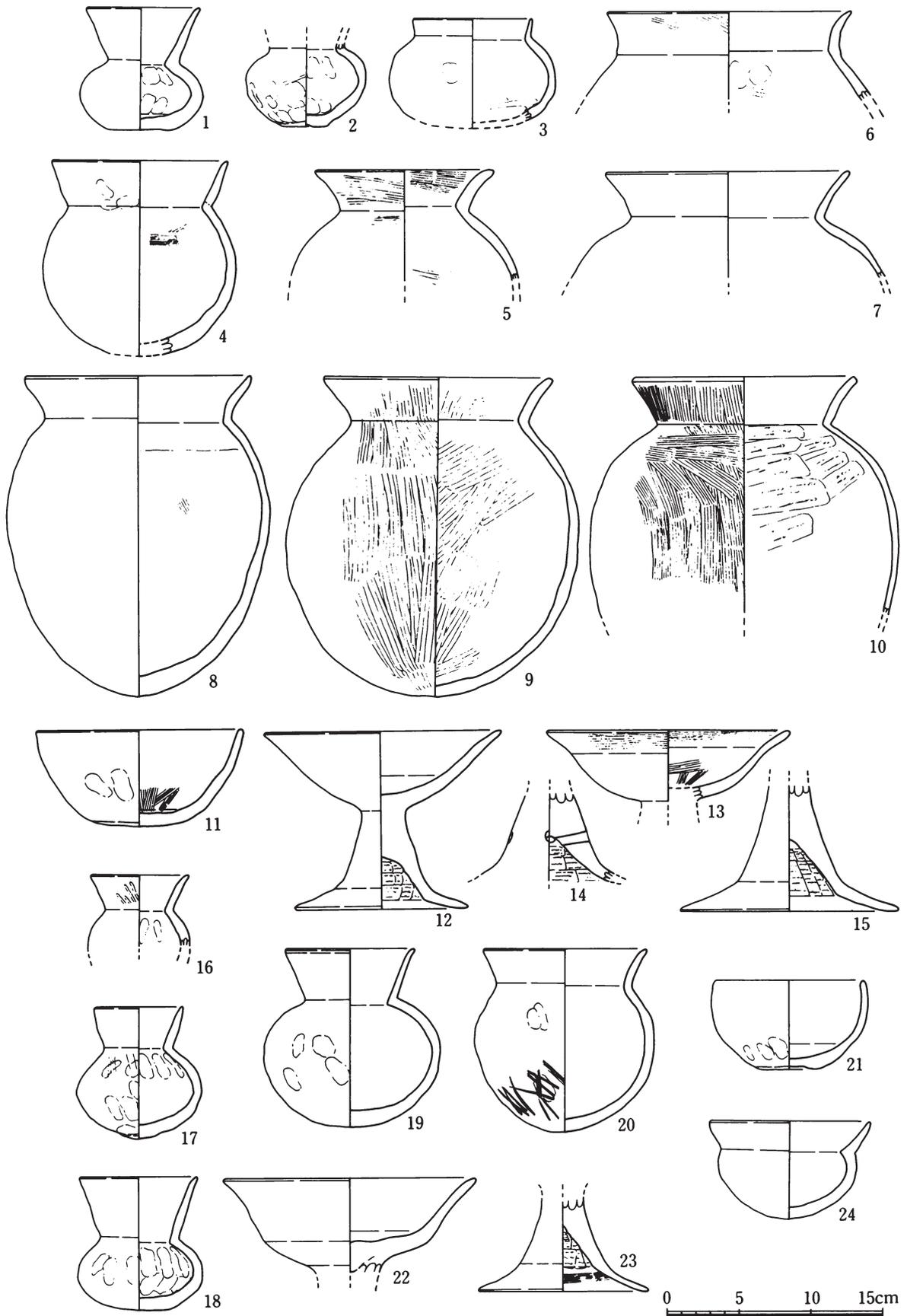
部から大きく外反して立ち上がり、端部は外傾する浅い凹面をなす。肩部外面にヘラナデの痕がみられる以外に器面には指頭圧痕と指ナデの痕が良く残る。

(9) 拝原¹⁶⁾遺跡

香美郡香我美町の南部、海岸線からやや入った香宗川の支流である山南川右岸の低位段丘上に立地する遺跡である。遺跡は、弥生時代前期から古墳時代、中世にかけての複合遺跡で、今回取り上げた古式土師器は住居跡S T-5(1~15)・6(16~23)及び溝S D-1(24)から出土している。S T-5の器種構成は壺3・甕7・鉢1・高杯4、S T-6の器種構成は壺4・甕1・鉢1・高杯2となっている。

1は、平底で扁平な胴部を有する小形の壺で、口縁部は斜め上方へ真直ぐ上がり端部を細く仕上げる。調整はナデ調整を中心とし、胴部内面には指頭圧痕が残る。2も小形の壺で口縁部は

欠失する。底部は上げ底風で比較的しっかりしており、胴部最大径は上位1/3に求めることができる。器面はナデ調整を主に施し、部分的に指頭圧痕が残る。3は短頸壺で、口縁部はやや扁平な胴部から屈曲し、外上方に短く立ち上がる。調整はナデ調整を主とし、胴部内面には指ナデの痕がみられる。4は器高が14cm不足と小形の甕で、胴部は球形をなし、口縁部は胴部からくの字形をなし外上方に立ち上がり端部を丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を主とし、胴部内面の一部にハケ目が残る。5は球形の胴部を有する甕で、口縁部は胴部からくの字形をなし、やや外反気味に上がり、端部は丸い。器面はハケ調整の後ナデ調整を加える。6は頸部の径が広い甕で、口縁部は短く外反して上がり、端部を細く仕上げる。器面には部分的にハケ目が残る。7は球形をなす胴部を有するとみられる甕で、口縁部は胴部からくの字形をなして外上方へ上がり、端部を丸く仕上げる。8は長胴の胴部を有する甕で、口縁部は胴部からくの字形をなしやや外反気味に上がり、端部を細く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整で部分的にハケ調整が施される。9は球形に近い胴部を有する甕で口縁部は胴部からくの字形をなしやや外反気味に上がり、端部を丸く仕上げる。器面内外面とも粗いハケ調整を施し、口縁部にはヨコナデ調整を加える。10はやや肩の張る胴部を有する甕で、口縁部は胴部からくの字形をなしやや外反気味に上がり、端部は外傾する平面を有する。口縁部外面はタテ方向のハケ調整、内面を中心にヨコナデ調整を施し、胴部外面はハケ調整、内面はヘラ削りが行われる。胎土、調整技法からして搬入品とみられる。11は丸味のある底部を有する鉢で、口縁部は内湾気味に上がり、端部は丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整、他



第10図 栺原遺跡出土資料

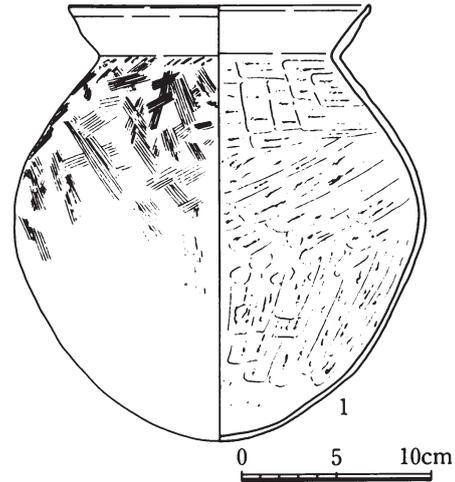
はナデ調整で、内底面にはハケ目が残る。12は高杯で、杯部は内湾気味に上がり、口縁部でやや外傾し、端部は丸く仕上げられる。脚部は中実の柱脚に大きくハの字形に開く裾部が付く。柱脚内面にはヨコ方向のヘラ削りが見られる。13も12とほぼ同じ杯部を有する高杯で、杯部は内湾気味に上がり、口縁部で外傾し、端部は丸い。口縁部はハケ調整の後ヨコナデ調整を加える。14は中実の柱脚を有する脚部で丸いスカシ穴を四方向に穿つ。内面にはヨコ方向のヘラ削りが施される。15も中実の柱脚を有する個体で、裾部で大きくハの字形に開く。柱脚の内面にはヨコ方向のヘラ削りが施される。16・17はほぼ同形態をなす小形の壺で、口縁部はほぼ球形に近い胴部からくの字形をなし外上方に上がり、端部を細く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整で部分的に指頭圧痕が残る。また、16の口縁部外面にはタタキ用の工具によるとみられる圧痕が残る。18は扁平な胴部を有する小形の壺で、口縁部は外上方に真直ぐ上がる。胴部内面を中心に指頭圧痕が残る。19は球形の胴部を有する壺で、口縁部は胴部から屈曲して外上方に上がる。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部内外面はナデ調整を施す。20は器高12.8cmと小形の甕で、ほぼ球形をなす胴部から外反して上がり、端部を丸く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他は主としてナデ調整を施す。21は上げ底の底部を有する鉢で、口縁部は内湾して上がり、端部を丸く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整がみられる。22は高杯の杯部で、緩やかな稜を持って上がり、口縁部は外反し、端部を丸く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。23は高杯の脚台部で、中実の柱脚に大きくハの字形に開く裾部が付く。柱脚内面にはヨコ方向のヘラ削り、裾部内面にはハケ調

整が残る。24は小形丸底土器で口縁部はやや扁平な胴部から大きく屈曲し、短く内湾気味に上がる。端部は細く仕上げられる。

(10) 江見遺跡

香美郡赤岡町の南端部、香宗川が西に大きく蛇行する河口部左岸に位置する。立地的には海岸部に形成された砂州上にあり、南国市の札場遺跡と類似する。今回取り挙げた遺物¹⁷⁾(1)は発掘調査によるものではないために、出土状況や伴出遺物については知ることができない。

畿内系の甕で、口縁部はほぼ球形をなす胴部からくの字形をなし、外上方に上がり、端部を外上方につまみ上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面は細かなハケ調整、内面はヘラ削りが施される。



第11図 江見遺跡出土資料

4. 古式土師器の編年

古式土師器の編年を行う上で重要になってくるのが土師器の開始をどの時期に持ってくるかであろう。中国・四国という比較的大きな地域でみた場合、高橋護氏はその決め手として「長大な竪穴式石室を付加された時期¹⁸⁾」として高松市岩清尾山の一角にある鶴尾神社4号墳出土の土器を挙げている。この時期の土器をもって土師器の開始時期とするなら庄内式土器は全体が

完全に土師器として扱われるようになるとの指摘もされている。一方、この地方は数地区に区分され、それぞれ固有の変遷を辿っているとの考えも示している。これらのことから本地方を見た場合、長大な竪穴式石室を有する古墳は発見されていないが、初現的な古墳として先述の高岡山1号墳を挙げることができるのではなかろうか。築造時期は副葬品から4世紀後半¹⁹⁾である可能性が強く、他の地域に比べると前期古墳の出現期は遅れるが、やはりその出現が弥生土器から土師器への移り変わりに大きく関わってくるものと考えた方が妥当ではなかろうか。そこでこの時期の土師器を本地方最初の土師器と位置付け、先の資料をみていくと、現状では古式土師器を大きく4型式に区分することが可能ではないかと考えられる。そして、ヒビノキI式以降甕を中心にみられるタタキ技法の採用とその変遷をみた場合、伴出する搬入された土器が生産地で土師器と位置付けられているものであろうとも、このヒビノキ式土器は型的にのみ限り同じタタキ目を有する土器には変わりなく、その過程で技術的な違いはなく、しかもタタキ技法が最も盛行する時期を境に、一線が引けるものではなかろう。搬入された土器の意味することは生産地と本地方との時間的な位置付けであって、そのまま同時代、同文化で推移していたとはいえない面もあるのではなかろうか。その一端として甕の内面に見られるヘラ削り技法を挙げることができよう。庄内式土器や布留式土器に見られる器壁を薄くする技法はヒビノキ式土器には見いだせない。少なからず搬入されたにも関わらずそれら土器の影響は丸底への指向を除いてほとんどみられず、言わば伝統技法に固執して土器を製作し続けているのである。このような現状を踏まえた上で以下型式分類を行ってみたい。

第I型式

高岡山1号墳出土のものを基準とし、馬場末遺跡や早咲遺跡から出土したものがこの型式の中心になる。器種では壺、甕、鉢、高杯、小形器台がみられ、鉢の占める割合が高い。この内甕Aは、型的には第V様式以来の伝統の延長にあるもので、弥生土器と表現した方が適切であるが、他の器形に比べ伝統的技法を遅くまで残すという意味で取り挙げた。換言すれば、一律に型式変化が現れたのではなく、最初は鉢を中心にみられ、甕のそれはやや遅れるものと考えることができよう。

壺

壺A 二重口縁の壺であるが、明確な資料を欠く。底部は丸底で、外面はハケ調整を主とするがタタキ目が僅かに残る。器面全面にタタキ目がみられるものはなくなる。(1・2)

壺B 広口壺で、口縁部が大きく外反するものと外上方に立ち上がった後外傾するものがみられる。胴部はほぼ球形をなし、底部もほぼ丸底になる。調整はハケ調整とナデ調整を主とし、内面のヘラ削りはみられない。(3)

甕

甕A 底部は丸底で、口縁部はほぼ球形をなす胴部からくの字形をなし、外傾してのびる。端部は丸く仕上げられる。口縁部はヨコナデ調整、胴部外面にはハケ調整を施すもタタキ目も残る。内面はナデ調整を主とし、ヘラ削り調整はみられない。第V様式の系統のもので弥生土器と呼称した方が適切と考えられる。(4)

甕B 畿内系のものとみられる搬入品である。口縁部は胴部からくの字形を呈し、外上方に上がり端部を上方に若干肥厚する。胴部外面はハケ調整、内面はヘラ削り調整を施す。(5)

甕C 阿波系のものとみられる搬入品である。球形を呈する胴部を有し、口縁部は胴部か

ら屈曲して短く立ち上がり、端部を肥厚する。口縁部外面はタテ方向のハケ調整、内面にはヘラ削りがみられる。(6)

鉢

鉢A 椀状をなし、底部が平底ないしボタン状に成形の痕が残るもので、器面にはタタキ目はほとんど見られなくなる。口縁部は概して内湾気味に上がる。(7)

鉢B 皿状をなすもので、弥生土器に比べ胎土が非常に精良である。調整はナデ調整を主とし、底部には指頭圧痕が残る。(8)

鉢C 口縁部が球形をなす体部から屈曲するものである。口縁部はヨコナデ調整、体部はナデ調整を主とし、部分的にハケ調整がみられる。(9)

鉢D 所謂小形丸底土器と云われるもので、やや扁平な体部から口縁部は外反して上がる。口縁部高は体部高よりも短い。口縁部はヨコナデ調整、体部もナデ調整を基調とする。(10)

鉢E 台付鉢で、鉢Aにハの字形に開く脚台が付く。調整はナデ調整を基調とし、脚台内面にハケ調整を施したのもみられる。胎土は非常に精良である。(11)

高杯

高杯A 脚部が中空なもので、やや開く柱脚にさらに開く裾部が付く。杯部は比較的深く、稜を持って上がる。脚部には円形のスカシ窓が四方に穿たれる。(12)

高杯B 柱脚部がないもので、脚部はハの字形に大きく開く。杯部を欠くが、稜を持って上がるものとみられる。(13)

高杯C 脚部が中実のもので、ほぼ直立する柱脚にハの字形に開く裾部が付く。脚部には円形のスカシ窓が三方に穿たれる。杯部は稜をもって立ち上がるものとみられる。器面はハケ調整を主とする。弥生土器と表現した方が適切な

ものである。(14)

器台

器台A 小形器台で、皿状の受部にハの字形に開く脚台が付く。脚台部には円形のスカシ窓が三方に穿たれる。弥生土器に比べ胎土が精良で砂粒をほとんど含まない。(15)

第II型式

柳田遺跡から出土のものを中心とする。器種には壺、甕、鉢、高杯、器台がみられる。この型式でも鉢の占める割合が高い。また、タタキ技法のものは見られなくなる。

壺

壺A 球形に近い胴部を有し、口縁部は外上方へ比較的長くのびる。口縁部外面にはタテ方向のヘラ磨きが一面に施される。胎土は精良である。(16)

甕

甕A 球形に近い胴部を有し、口縁部は胴部から外反して短く上がる。胴部外面はハケ調整が施され、内面はヘラ削りがみられる。なお、色調・胎土は異なるが、形態的に酷似する搬入品もみられる。(17)

甕B 畿内系とみられる搬入品で、口縁部は胴部から屈曲し、内湾して短く上がり、端部は内傾する平面を有する。口縁部はヨコナデ調整、胴部内面にはヘラ削りがみられる。(18)

鉢

鉢A 丸い底部を有するもので、口縁部は内湾気味に上がる。調整はナデ調整を主とし、部分的にハケ調整がみられる。(19)

鉢B 底部は丸底ではあるが、平らな感じを与えるもので、口縁部は内湾気味に外上方に上がる。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整がみられる。(20)

鉢C 高台状の底部を有するもので、口縁部は内湾気味に上がる。(21)

鉢D 所謂小形丸底土器で、体部は球形をなし、口縁部は胴部から屈曲して外上方に上がる。口縁部はヨコナデ調整、胴部外面はハケ調整、内面はナデ調整がみられる。(22)

高杯

高杯A 中空の脚部を有するもので、杯部は緩やかな稜を持って上がる。柱脚はややハの字形に開き、裾部で屈曲してラッパ状に開く。杯部外面には放射線状にハケ調整を施す個体もみられる。柱脚外面にはタテ方向のヘラ磨き、内面にはヨコ方向のヘラ削りがみられる。(23)

高杯B 脚部は中空とみられ、杯部が高杯A類に比べ深く、ほとんど稜を持たず緩やかに上がる。(24)

高杯C 中実の脚部を有するもので、ほぼ直立する柱脚に屈曲してハの字形に開く裾部が付く。柱脚外面にはタテ方向のヘラ磨きが施される。杯部は緩やかな稜を持って上がるものとみられる。(25)

器台

器台A 中空の小形器台である。受部は浅い皿状を呈し、脚台部はハの字形に開く。外面一面にヨコ方向の細かなヘラ磨きがみられる。(26)

第III型式

拝原遺跡から出土したものがこの型式の中心となる。器種には壺、甕、鉢、高杯がみられるが、前型式に比べ鉢の占める割合が低くなる。

壺

壺A 小形の壺で、丸味のある底部と上げ底風の底部を有するものがある。胴部は球形ないしはやや扁平な球形を呈し、口縁部は比較的長く、胴部から屈曲し外上方に立ち上がる。調整はナデ調整を主とする。(27)

壺B 中形の壺で、胴部は球形をなし、口縁部は比較的長く、胴部から屈曲して外上方に上

がる。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。(28)

壺C 小形の短頸壺である。胴部は扁平な球形を呈し、口縁部は胴部より屈曲して短く上がる。(29)

甕

甕A 小形の甕で、胴部はほぼ球形をなし、口縁部は外上方を向く。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を主とし、部分的にハケ調整がみられる。(30)

甕B 大形の甕で、甕Aとほぼ同形態を呈する。器面にはハケ調整が一面に施される。(31)

甕C 長胴形の甕で、口縁部は胴部からくの字形をなして外上方に上がる。口縁部はヨコナデ調整、他はハケ調整とナデ調整がみられる。(32)

甕D 形態的には甕Cに比較的良く似るが、胴部内面にヘラ削りが施される点が異なる。胎土、成形技法からみて搬入品であろう。(33)

鉢

鉢A 椀状を呈し、底部は比較的深く、丸味を有する。口縁部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整、他はハケ調整とナデ調整を施す。(34)

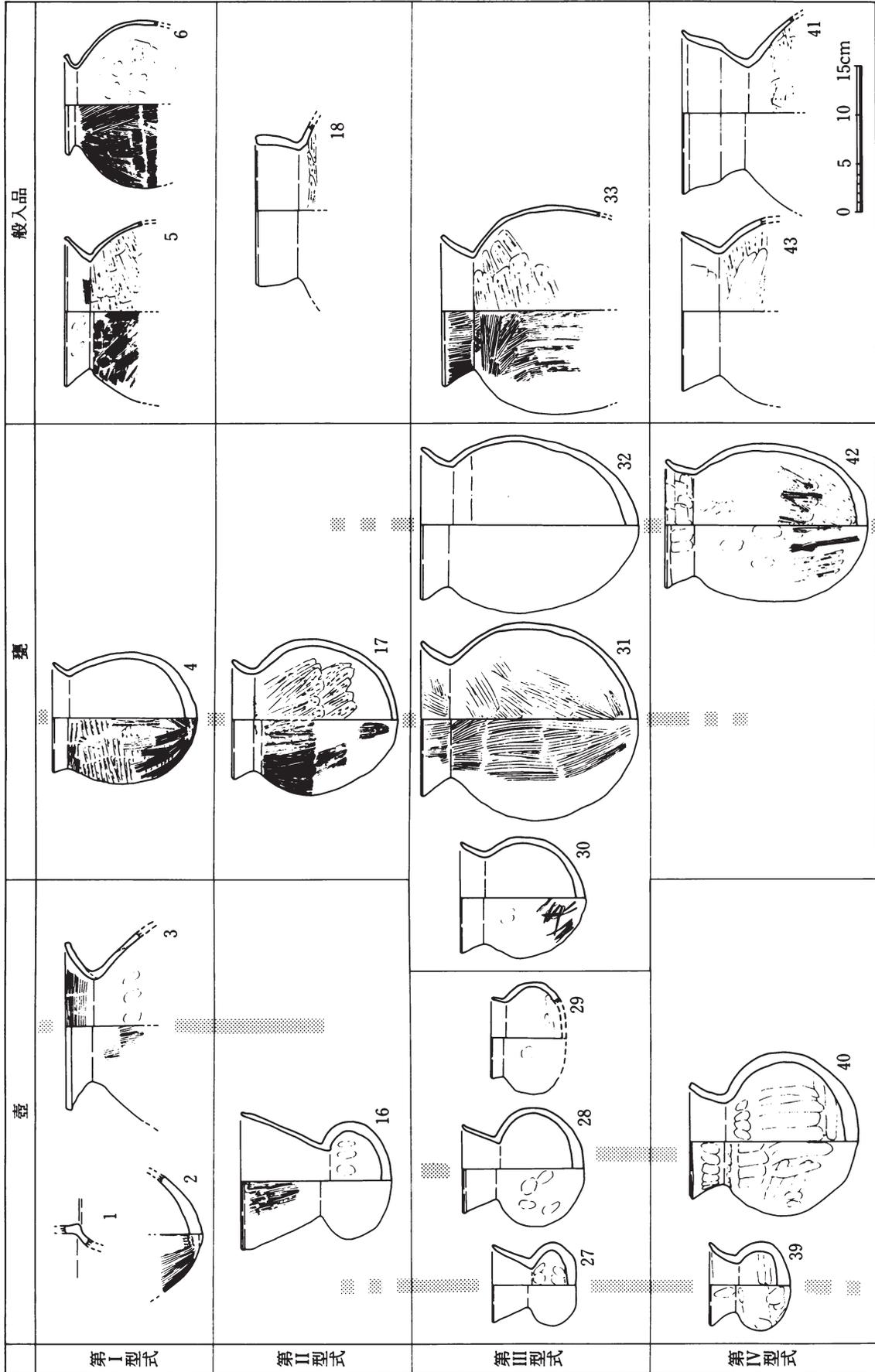
鉢B 上げ底の底部を有するもので、口縁部は内湾して上がり、端部は丸く仕上げられる。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。(35)

鉢C 底部は丸く、口縁部は体部から屈曲し、短く上がる。(36)

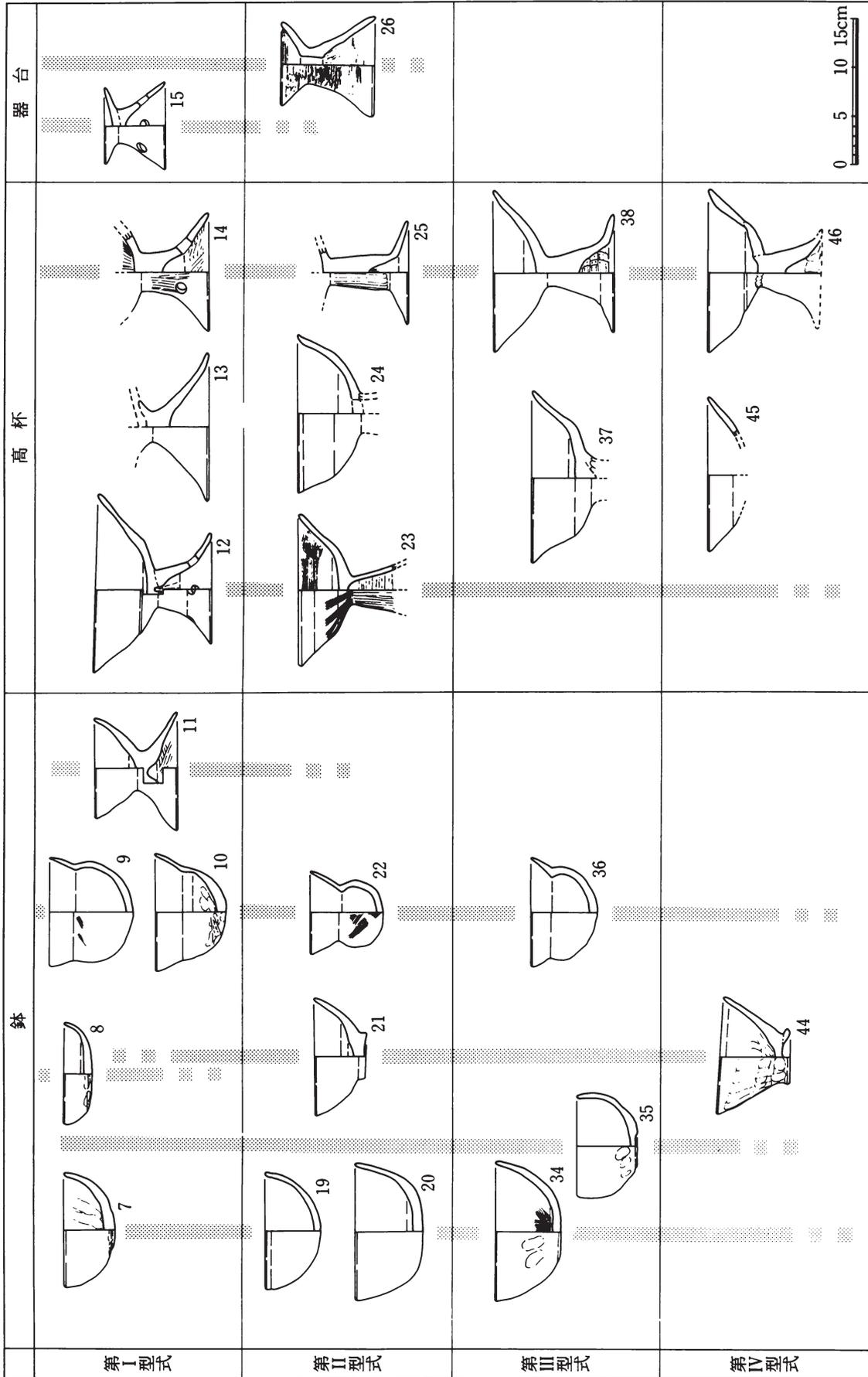
高杯

高杯A 杯部が稜を持って立ち上がるものである。(37)

高杯B 杯部は比較的浅く、体部は内湾気味に上がり、口縁部で外傾する。脚台は中実で、やや開き気味の柱脚に大きくラッパ状に開く裾



第12図 南四国の古式土師器編年試案(1) (S=1/6)



第13図 南四国の古式土師器編年試案(2) (S=1/6)

部が付く。柱脚内面にヘラ削りがみられる。(38)

第IV型式

王子遺跡から出土したものが中心となる。器種には壺、甕、鉢、高杯がみられる。

壺

壺A 小形の壺で、胴部は扁平な球形を呈し、口縁部は胴部から外反してのびる。口縁部はヨコナデ調整を施す。(39)

壺B 球形をなす胴部を有するもので、口縁部は胴部から外反し、端部は外傾する浅い凹面をなす。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整で器面には指頭圧痕と指ナデの痕が残る。(40)

壺C 搬入品の二重口縁壺である。口縁部は胴部からくの字形をなし、稜を持って上がる。胴部内面にはヘラ削りが施される。(41)

甕

甕A 長胴形の胴部を有するもので、口縁部は外上方にのび、途中から外傾し、端部は丸く仕上げられる。胴部内面には下半を中心にヘラ削りがみられる。(42)

甕B 甕A同様長胴形の胴部を有する搬入品とみられるもので、口縁部は外上方に真直ぐ上がり、端部を細く仕上げる。胴部内面にはヘラ削りがみられる。(43)

鉢

鉢A 輪高台風な底部をなすもので、口縁部は外上方にほぼ真直ぐ上がり、端部を丸く仕上げる。体部外面にはタテ方向のヘラナデ調整が施される。(44)

高杯

高杯A 杯部は比較的浅く、体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。脚部は高杯Bとほぼ同形態のものと考えられる。(45)

高杯B 杯部が稜を持って立ち上がるものである。脚部は中実で、柱脚はハの字形に開き裾部でさらに開く。(46)

5. 古式土師器の特徴とその意味

(1) 各型式の特徴

南四国の古式土師器を4型式に型式分類して各土器の特徴をみてきたが、ここでは各型式の特徴を考えてみたい。まず、本地方弥生時代終末段階には、香我美町稗地遺跡のST-5、南国市五軒屋敷遺跡のST-2などにみられるように庄内式土器の搬入が各遺跡数点の割合で認められ、少なからず交流のあったことが推察される。これら搬入品に伴出するのが従前ヒビノキIII式と呼ばれていた土器で、この土器から土師器と考えられ、ひびのき遺跡A-1住居跡出土土器を標準としていた。それらを土師器と考えた根拠として、「朝顔型に開いた二重口縁のしかも丸底の壺型土器を持つ。また甕形土器はヒビノキII式土器の時期から、とくに盛行してくる敲目痕が器面一面につけられ、しかも丸底である。壺形土器や高杯形土器のなかには、庄内式土器とまったく類似するものがある。」²⁰⁾を挙げている。この壺型土器は口縁部の形態などからすると庄内式期III~IV併行のもの²¹⁾と考えることができよう。庄内式土器を弥生土器とするか土師器とするかは見解が分かれるところであろうが、その時期の在地の土器は第V様式以来のタタキ目を持つ土器で、しかも最も盛行した時期であり、形式的には全く変わらないものである。一方、今回第I型式と設定したものに伴出するのは庄内式期Vから布留式期I・II²²⁾にかけてのものである。この段階になるとタタキ目の減少が見受けられ、特に伴出する小形三種の胎土は極めて精良で弥生土器のそれとは明らかに異なるもので、そこに少なからざる定型化された祭祀形態を垣間見ることができるのではなかろうか。そして、この段階に古墳が本地方に初めて築造され、墓前祭祀にこの型式の土器が使用される。正しくこの段階に画期を見いだすことが

できるのではなかろうか。ただし、甕などでは第V様式以来のタタキ目はみられ、伝統的手法を残すものと考えられる。そして、次の第II型式になって、第V様式以来のタタキ目はほとんど見られなくなり、甕の内面にヘラ削りを施したのも見受けられるようになる。しかし、なぜか本地方では、その手法は定着するまでには至らない。高杯では布留系の柱脚内面にヘラ削りを施すものがみられる一方、第V様式からの系統とみられる柱脚部が中実のもので内面にしぼり目が残るものも存在する。鉢は小形のものにはほぼ限定されるが、前型式同様バラエティーに富む。第III型式は拝原遺跡の住居跡からまともに出土している。鉢では小形丸底土器の系統を引き、口縁部と胴部がほぼ同じ高さになってくる。甕は球形の胴部をなすものが主体をなし、中に僅かではあるが長胴傾向のものも見受けられるようになり、以後古墳時代をともし本地方の基本形態となる。内面調整はハケ調整が主体であり、内面ヘラ削りを施す例は在地産のものではあまり見受けられない。高杯は、杯部が稜をもつものも残存するが、前型式以上に稜は緩くなる傾向がある。脚部は、柱脚部が中実でしかも柱脚と裾部が開くものも多く見受けられる一方、中空のものも存在する。これら柱脚の内面にはヘラ削りを施す特徴がある。ここには第V様式系統のものに布留系統のものが影響を与えたとみることができよう。鉢は減少し、口縁部が内湾する小形のものも僅かに存在する程度である。古式土師器最終段階である第IV型式は王子遺跡に代表される。壺は小形・中形とも球形の胴部に短く外傾する口縁部が付いた形態のものに限られる。甕は前型式でみられた胴部が球形をなすものは減り、長胴傾向のものが多くなり、内面にヘラ削りがみられる個体も見受けられるが、定着する調整技法とはならない

ようである。この段階で形態的にはほぼ定型化し、以後古墳時代を通じ大きな形態的变化は起こらない。鉢は減少傾向に有り、丸底で口縁部が大きく内湾するものになってくるとみられるが、平底で、高台状のものが付くものも僅かであるが残存する。高杯は前型式から形骸化するようで、杯部は比較的浅く、稜も緩くなる傾向にある。脚部は前型式に比べ低くなり、なだらかに下り裾部で開く。柱脚外面にはタテ方向のヘラ磨きが施される。中には裾部で大きく開くものも見受けられる。

(2) 古式土師器からみる南四国の特質

南四国の古式土師器の各型式特徴については先述のとおり、搬入された庄内式土器や布留式土器などの影響はあまり受けず、概して漸次的に変遷して行く。特に、甕にその様相が端的に現れる。一方、鉢は甕に比べ比較的の影響を敏感に受けたとみられ、器種もバラエティーに富みその変遷も甕のそれとはやや異なる。また、高杯は柳田遺跡でみられるような中空の柱脚部内面にヘラ削りを施した布留系のもので現れる一方で第V様式の系統をひく中実の緩やかに開く脚部で内面をヘラ削りするものも見受けられるようになる。このような変遷は四国の他地域ではみられず南四国独特のものと推察することができよう。このような特質は、時代の変化をダイレクトに受けることができなかつた地域あるいは時代の変容に影響力を持ち得なかつた地域に起こり易いものではなかろうか。中でも、畿内地方を中心とする地域が第V様式土器から庄内式土器さらに布留式土器へと変遷して行く中で、本地方は相変わらず伝統的第V様式の土器を作り続け、それをほぼ払拭するのは布留式期²⁴⁾II併行頃まで待たなければならない。これは時代の変遷にダイレクトに追従できない地域の様相と把握できるのではなかろうか。特に、時代

と時代の節目に象徴的に現れる現象として把握することができよう。これは土師器に限ったことではなく、7世紀の須恵器にも良く現れている。しかし、このような現象も8世紀以降律令体制に組み込まれることにより、文化の伝播もそれ以前と比べ遥かにスムーズになってくるようである。²⁵⁾

このような現象をもたらした要因とは如何なるものであろうか。他地域との交流において地理的に制約のある地域、閉鎖的な地理的条件にある地域に内在する自然条件が大きく関わってくるように思われる。土器にみられるように細かな変遷はあるにせよ同一型式のものを長く作り続けるという特質、換言すれば一度身につけた技術に新しい技術をなかなか加えようとはしないとも受けとられる。実際は、他地域からのインパクトがあまり大きくなかったのではなかろうか。ともかく、このような状況のなかで南四国という地域は先進地域よりやや遅れ、古墳時代にはいつて行くことになる。また、古墳時代になっても前期古墳の数は少なく、中期古墳はほとんど発見されていない状態で、南四国の古墳文化が開花するのは6世紀も中頃以降である。このような状態は地理的ファクターに大きく左右されるものと考えられ、文化を受け入れ育む土壌が出来上がるのには少なからず時間を要したものと考えられる。これが正しく南四国の地域性であり、ある意味での南四国の文化とも言い得るものかもしれない。

6. おわりに

今後土師器の変遷を追うことにより各時代の南四国の様相を垣間見れるのではないかと考え、手始めとしてまず、古式土師器の変遷を考えてみた。その結果、古式土師器でも須恵器でみられたとほぼ同じ状況を呈していることが判

明した。これはやはり南四国の地域性と考えた方が適切ではなかろうか。これ以降どのような状況²⁷⁾を呈するかは今後の研究によるところが大きいが、南四国の歴史的な位置付けについても考えてみたい。

南四国の古式土師器といっても、弥生時代後期後半の土器に比べると出土例が極めて少なく、編年資料に十分恵まれているわけではない。先述のように遺構出土のものが少なく、流路出土のものが目立ち、資料操作も行わなければならなかった。今後、資料の増加に伴って再検討しなければならないことも多々あろう。ただ、今回の出発が、同一型式の土器を伴出した搬入品によって総称を異にするのは型式学から云っても如何なものかという疑問であったことも事実である。

[註]

- 1) 岡本健児・廣田典夫 『高知県ひびのき遺跡』土佐山田町教育委員会 1977
- 2) 1) に同じ
- 3) 岡本健児・廣田典夫 『山根・石屋敷遺跡(付)馬場末遺跡』春野町教育委員会 1976
- 4) 都出比呂志 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号 1974
- 5) 出原恵三 『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会 1990
- 6) 出原恵三 『拝原遺跡』香我美町教育委員会 1993
- 7) 廣田佳久 『早咲遺跡』大方町教育委員会 1991
- 8) 山本哲也 『高岡山古墳群発掘調査報告書』高知県教育委員会1985の中で、第1号墳は円墳と報告されているが、調査を担当した山本氏によれば、方墳と考えた方が適切ではないかとのことであった。
- 9) 8) に同じ。1984年に行われた西南工業団地建設に伴う発掘調査

- 10) 7) に同じ。1989・1990年に行われた県道改良工事に伴う発掘調査
- 11) 3) に同じ。1974年に実施された第1次西分馬場末発掘の際に出土したものである。調査は遺跡の範囲を確認するために実施された。
- 12) 1991年に行われた国道改良工事に伴う発掘調査の際に出土した。遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。
- 13) 1992年に行われた圃場整備に伴う発掘調査の際に出土した。遺跡は弥生時代を中心とする。
- 14) 1992年に行われた大規模店舗建設に伴う発掘調査の際に出土した。遺跡は縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。
- 15) 1991年に工事中に発見されたもの。
- 16) 6) に同じ。
- 17) この遺物については当センター森田第2係長の実測図をもとにトレースした。なお、他の遺物については筆者の実測による。
- 18) 高橋 護「土師器の編年—中国・四国—」『古墳時代の研究』6. 土師器と須恵器 雄山閣 1991
- 19) 報告書では5世紀初頭から前半にかけて築造されたと記されているが、発掘を担当した山本哲也氏は高知県立歴史民俗資料館の講演会「土佐の古墳の諸問題」（1994年1月29日）で4世紀後半の築造との考えを述べている。
- 20) 1) に同じ。
- 21) 米田敏幸「土師器の編年—近畿—」『古墳時代の研究』6. 土師器と須恵器 雄山閣 1991
- 22) 21) に同じ。
- 23) 田中琢「布留式以前」『考古学研究』第12巻第2号 1965
- 24) 21) に同じ。
- 25) 「南四国の須恵器—周辺地域の須恵器の変遷—」として別稿を用意してある。
- 26) 廣田佳久「横穴式石室の地域性 高知県」『季刊考古学』第45号 雄山閣 1993
- 27) 25) に同じ。

【参考文献】

- 小林行雄 1935 「小型丸底土器小考」『考古学』第1号第6巻
- 岡本健児 1959 「土佐の原始と古代の文化」
- 岡本健児 1966 『高知県の考古学』—郷土考古学叢書— 吉川弘文館
- 岡本健児 1968 『高知県史』—考古編— 高知県
- 鈴木公雄 1969 「土器型式における時間の問題」『上代文化』第38輯 国学院大学考古学会
- 杉原荘介・大塚初重編 1971～1973 『土師式土器集成』1～4 東京堂出版
- 杉原荘介 1974 「弥生土器と土師式土器との境界」『駿台史学』第34号
- 置田雅昭 1974 「大和における古式土師器の実態」『古代文化』26-2
- 安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60号第2巻
- 研究報告をめぐる討議 1974 「古墳出現前夜の集団関係（都出比呂志）」『考古学研究』第21巻第1号
- 石野博信・関川尚功 1976 『纏向』榎原考古学研究所
- 酒井竜一 1977 「古墳造営労働者の出現と煮沸用甕」『考古学研究』第24巻第2号
- 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第25巻第4号
- 西 弘海 1979 「西日本の土師器」『世界陶磁全集2 日本古代』小学館
- 寺沢 薫 1980 「大和におけるいわゆる第五様式土器の細分と二・三の問題」『六条山遺跡』榎原考古学研究所
- 小山田宏一 1982 「布留式成立に関する覚書」『考古学と古代史』同志社大学
- 岡本健児 1982 「南四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』森貞次郎博士古希記念古文化論集発行会
- 下村 直 1983 「弥生土器・土師器編年の細分とその有効性」『史館』第14号
- 井上和人 1983 「『布留式』土器の再検討」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

- 下村公彦・角谷和男 1984 『五軒屋敷遺跡発掘調査報告書』高知県教育委員会
- 都出比呂志 1985 「石野博信『古墳文化出現期の研究』」『考古学研究』第32巻第3号
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』橿原考古学研究所(財)愛媛県埋蔵文化財センター 1986 『宮前川遺跡』
- 木下正史 1988 「奈良県『纏向』」『考古学雑誌』第64巻第1号
- 関川尚功 1988 「弥生土器から土師器へ」『季刊考古学』第24号 雄山閣
- 石野博信 1989 「奈良県纏向石塚古墳と纏向式土器の評価—木下正史氏の批判に答える—」『考古学雑誌』第64号第4巻
- 徳島県教育委員会 1990 『黒谷川郡頭遺跡V』
- 香川県教育委員会他 1990 「下川津遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII』
- 小出義治 1990 『土師器と祭祀』雄山閣
- 松田知彦 1993 『稗地遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 大久保徹也 1993 「讃岐地方における古墳時代初頭の土器」『研究紀要I』(財)香川県埋蔵文化財センター

宿毛式, その特質

前田光雄

-
- | | |
|-----------------|-----------|
| 1. はじめに | 6. 宿毛式の展開 |
| 2. 宿毛貝塚・宿毛式の研究史 | 7. 宿毛式の派生 |
| 3. 宿毛貝塚出土遺物の概観 | 8. まとめ |
| 4. 宿毛式の分類 | 9. おわりに |
| 5. 宿毛式の特質 | |
-

1. はじめに

四国の縄文時代後期前半に位置付けられる宿毛式は、古くから知られてはいるものの、しかし、その実態は3本沈線の磨消縄文帯の福田K II式に対して2本沈線の磨消縄文帯で西南四国を中心として、福田K II式の分布圏外に展開する土器群であるということが漠然と知られているだけであった。最近、同じ高知県中央部山間の吉野川流域で宿毛式に後続する松ノ木式が新たに設定され、その系統的な流れが解明されつつある(出原 1992・1993)。かつて宿毛式と同様に西南四国に展開する平城I式が宿毛式に後続すると考えられてきた。しかし、最近それに対する疑義も出ており(西脇 1990)、疑義に対する批判を平城I式から平城II式を経て片粕式に至る変遷過程から述べたが(前田 1993 b)、この小稿ではさらに平城I式、松ノ木式の成立段階にまで遡ってみたい。先に結論を言ってしまうと、宿毛式には福田K II式系統と宿毛式独自の両系統が含まれており、その福田K II式系統から平城I式、松ノ木式共に派生したと考えられる。平城I式は西南四国、東九州に比較的分布圏が限定され、四国・中国地方に分布する松ノ木式・布施式等の「縁帯文成立期」の土器群は

西南四国・東九州には余り及ばず、平城I式は西南四国・東九州に展開する縁帯文成立期土器群に並行する土器群と考えられる(玉田 1989)。立論の作業前提として、宿毛式の再分類・分析から宿毛式の特質を抽出し、平城I式と松ノ木式がどのように宿毛式から派生したかを検討してみたい。

2. 宿毛貝塚・宿毛式の研究史

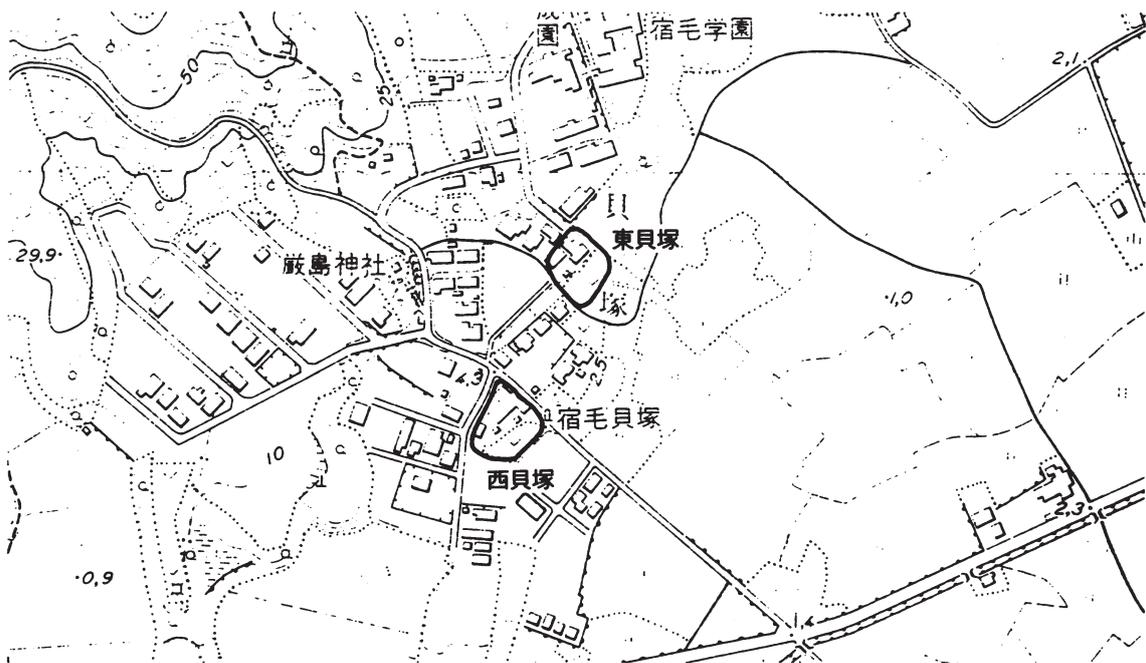
(1) 宿毛貝塚の研究史

宿毛貝塚の研究は高知県の考古学史そのものといえる面を持っている。宿毛貝塚の研究史は昭和24年(1949)の学術調査を境にして、以前と以降に大きく括ることができる。昭和24年の調査以前は遺物収集、民族論に終始するものが大半である。中には昭和11年(1936)の沢田秀穂の「宿毛貝塚の瞥見」のように、現代的な考古学的報告書のスタイルを取る秀逸なものも存在するものの、大半は科学的方法論に立脚したものではなかった。宿毛貝塚の研究史については、安岡源一の「宿毛貝塚研究発達史」(『宿毛貝塚』昭和26年)に昭和24年の調査以前の研究状況は詳述されているが、ここではもう一度宿毛貝塚研究の流れを把握しておきたい。

宿毛貝塚に関する最古の記述は「カイツカ拾代」,「カイツカ上小田入壺反拾代」と中世の天正年間の長宗我部地検帳「宿毛貝塚村」の部に記載されているのが初出である。これは地検帳であり,考古学的研究とは無関係であるものの,当時の人々にも貝の散布は奇異に捉えられたものと考えられる。貝塚が考古学的視点で捉えられるには明治の寺石正路にまで待たなければならない。寺石正路は明治元年生まれで大学予備門を病気の為に中途退学し,高知に帰郷している。当時,言うまでもなくE・S・モースが日本の近代考古学の発展に大いに貢献し,高知県出身の松浦佐用彦もモースの弟子として大森貝塚の調査を行い,考古学が近代的な学問として脱皮する時期に当たる。どのような契機で寺石正路が近代考古学に触れる機会があったのかは不明であるが,明治24年に宿毛貝塚と愛媛県御荘町の平城貝塚の両貝塚の新たな再発見を行い,「四国島貝塚ノ発見」(『東京人類学雑誌 67』明治24年)を発表している。「当年八月余ハ同国ニ於テニケ所同ジ隣リノ伊予国ニ於テケ所ノ

貝塚ヲ発見セリ孰レモ皆純然タル石器時代遺跡ナリ此ニ於テ従来石器時代人種ノ散布ニ関シテハ先ツ局外地ノ観アリシ四国島モ始メテ四国相連ナテ其版図ニ入り愈石器時代人種散布ノ一時海内ニ普ネカリシヲ證スルニ至レリ」と宿毛貝塚が石器時代のものであること,また出土遺物についても「石器ハ「フリント」ノ石鏃并同碎片アリ」,「土器ハ又縄紋土器ノ碎片ノミナリ」と宿毛貝塚出土土器が縄文土器であることを認識するなど,寺石正路の考古学に対する造詣の深さを窺い知ることができる。

大正時代には大野雲外の「四国九州先住民遺跡」(『東京人類学雑誌32-2』大正6年)が僅かにあるばかりで,大野雲外が明治34年に宿毛,平城貝塚を訪れた際の記述で,「宿毛貝塚から発見する,土器破片を比較してみるに,全く関東付近から出づる土器と類似してをるを觀れば,交通往来の結果でもあろうと思ふ」と,宿毛貝塚出土の縄文土器が関東の土器と類似していることを指摘しているものの,型式認識の持たれていない時代において「同民族でありしことをも



第1図 宿毛貝塚位置図

推定することが出来る」と民族論に結論付けることも無理のないことである。

昭和10年代になって杉山寿栄男, 沢田秀穂等の考古学的見地からの論述が観られるようになる。しかし, それらはまだ探訪記に近いものであったり, 極部分的な小発掘による論述であるため, 近年の学術調査, 行政発掘等には及ぶべきもないが, 中には興味深い所見を述べたもの幾篇が存在する。例えば, 先の杉山寿栄男のように「四国地方の土器の形式を窺ふには, 九州北端の土器を離して考へる事は出来ない—略—福山式の曲線又は宗像, 森, 明治村, 大隅, 横山, 揖宿地方に見られ, これ又平城, 宿毛にも見られる。直線式の出水式又は貝紋文のものは日向の綾村その他各地の縄紋土器に見られる如く, 九州の縄紋土器に含まれる各形式は一様ではなく而も同一形式が各地に散在して居る」(『四国先史土器論』『考古学6-9』昭和10年)と, 宿毛, 平城の両貝塚出土土器を九州と繋がりのあるものとみている。

また, 沢田秀穂は実際に自ら小規模発掘を試み, 現代の報告書に較べなら遜色のないスタイルで論文を発表している(『宿毛貝塚の瞥見』『土佐史談57』昭和11年)。その内容は貝層の堆積状況, 出土貝類の同定, 動物遺存体, 採集土器の拓本・実測・観察, 石器実測等の掲載を行うなど科学的見地からの論述となっており, 宿毛貝塚発見以来の到達点となっている。しかし, それ以外の論文には旧態依然たるものも見られ, 縄文=アイヌの発想に呪縛されたままのものもみられる(堀内和郎「幡多郡南部の先住民の遺品」『土佐史談69』昭和14年)。

全国的な視野からは三森定男が津雲A式土器の分布域に宿毛貝塚は含まれるとした(『先史時代の西部日本(下)』『人類学・先史学講座第2巻』昭和13年)。「加曾利E式に見られる縁帯文土器が

その文様が縮約されると, 渦文は同心円文或は円文を中心とする並行溝線に変わることは堀之内式に見得る所である。—略—分布は今の所津雲及び中津貝塚の他, 三備地方には明瞭ではないが, 九州東部斜面の森貝塚や四国の宿毛貝塚などに認められる」としている。宿毛貝塚出土土器が津雲A式に含まれるとしたこと, また津雲A式を関東の中期の加曾利E式に並行関係を求めていることは興味深い。

昭和20年の敗戦後, 歴史教育の見直し作業の中, 「従来の日本古代史の見方に対し再検討が叫ばれ, 伝承的分子の多分に含まれていて真実の歴史でない紀記は全然排斥され, それに代わるに科学的に基礎を置く考古学をもってし」(安岡源一・前掲), また盗掘等が絶えないため保存・研究の機運が起こり, 高知県教育委員会により宿毛貝塚の学術調査が昭和24年に実施されることになった。それは昭和26年の報告書『宿毛貝塚』(高知縣史跡名勝天然記念物調査報告第四集高知県教育委員会)として結実し, 全国でも行政としては2番目の早さであった。安岡源一は「宿毛貝塚研究発達史」で歴史的背景から始め, 宿毛貝塚のそれまでの調査及び研究史を, 酒詰仲男は「宿毛貝塚の自然遺物」で動物遺存体の同定を細かく行い, 貝類についても同定を行い, 貝の生息地から宿毛貝塚の旧地理的条件にまで論及した。岡本健児は「文化遺物」で出土土器を第1~3類にまで分類し, 津雲A式に比定するなど, それぞれが貴重な研究報告となっている。昭和26年の調査報告書を頂点として, それ以降, 宿毛貝塚に関する研究はほとんど見られなくなる。近年, 史跡整備等の事業は行われたものの, 研究そのものについては沈滞しているといわざるを得ない。

(2) 宿毛式の研究史

宿毛式の分類基準は昭和26年の報告書に於い

第1表 宿毛貝塚関連一覧表

年		事項
	天正年間	長宗我部地検帳。
1891	明治 24	【皆山集】64 松野尾章編 「延享年中調土佐国幡多郡神社帳」。
1901	34	寺石正路、縄文時代の宿毛貝塚発見。『東京人類学雑誌』67。 大野雲外、四国を旅行。平城貝塚、宿毛貝塚を訪れる。
1917	大正 6	大野雲外、「四国九州先住民遺跡」『東京人類学雑誌』32-2。1901年の記録。
1917	6	大野雲外、「伊予土佐の遺跡に就いて長山氏へ」『東京人類学雑誌』32-7。上記の論文についての長山源雄の問い合わせについての回答。
1935	昭和 10	杉山寿栄男、「四国土器遍路」『考古学』6-2。
1935	10	杉山寿栄男、「四国先史土器論」『考古学』6-9。
1936	11	中谷治宇二郎、「日本新石器文化の一考究—特に分布圏と文化圏について」『考古学』7-1・2。
1936	11	沢田秀穂、「宿毛貝塚の瞥見」『土佐史談』57。
1938	13	西村真次、「古代国府付近は土佐文化の中心」『高知新聞』『土佐史談』63。
1938	13	三森定男、「先史時代の西部日本（下）」『人類学・先史学講座第2巻』。
1939	14	堀内和郎、「幡多群南部の先住民の遺品」『土佐史談』69、『高知新聞』。
1949	24	安岡源一・岡本健児、学術調査を行う。
1951	26	松本豊寿、「史前に於ける文化外周の地域的構造について—特に南四国の場合—」『地理学評論』24-8。
1951	26	安岡源一・酒詰仲男・岡本健児、「宿毛貝塚」高知縣史跡名勝天然記念物調査報告第四集。
1957	32	国史跡となる。
1962	38	橋田庫欣、東貝塚の表採を継続的に続ける。電信柱工事中に人骨出土。
1966	41	岡本健児、「宿毛貝塚出土縄文式土器の再検討」『研究誌第5号』高知県立高知小津高等学校。
1977	52	橋田庫欣、「宿毛市史」。
1983	58	木村剛朗、「土佐の後期縄文文化」『高知の研究Ⅰ』清文堂。
1986	61	山本哲也・廣田佳久・下村公彦、「宿毛貝塚発掘調査報告書」高知県教育委員会。
1988	63	山本哲也、「史跡宿毛貝塚保存修理事業報告書」宿毛市教育委員会。

て、岡本健児により行われている。しかし、その時の発掘調査時に於いて、現在一般的に認識されている宿毛式に相当するものは比較的少なく、15年経った後に大部分が平城式に含まれるとし津雲A式を撤回し、岡本健児は『宿毛貝塚出土の縄文式土器の再検討』（『研究誌第5号』1966）に於いて、橋田庫欣によって昭和38年頃に新しく採集された土器群を吟味し、「福田K II式土器系統の土器が宿毛貝塚出土土器の主体となることが判明したが、とくに南四国の宿毛式土器とよびたいと思う」（岡本 1966）とし、第一

類から第五類までの分類を試みた。つまり、平城式を除いたものを一括して宿毛式としたものの、まだこの時点では型式細分にまで至っていない。その後、宿毛貝塚の研究は、今村啓爾の研究にみられるように宿毛式と福田K II式との先後関係についての土器型式論に主流が置かれることになる（「称名寺式の研究」『考古学雑誌』第63巻第1号・第2号』1977）。「中津II式は漸移的に変化して福田K II式へと変る。この移行的段階（又は福田K II式の初頭）ではまだ沈線を3本並行させることはほとんど行われず、中津II式

の文様構成を強く残している。このようなものは高知県宿毛貝塚, 岡山県黒土, 山口県月崎に見られる」(今村 1977)とし, 宿毛式は福田K II式より古く, また関東の称名寺II式に並行関係を求めている。

また広島県洗谷遺跡(小都 1976)で2本沈線磨消縄文帯の宿毛式系統と3本沈線の福田K II式系統が同時に出土することから, 「従来「宿毛式」と呼ばれてきたタイプの土器が, 三本沈線のいわゆる福田K II式と並存していたことが想定される」(田中・松永 1981)と編年的に両型式が並行関係にあるのではないかとの見解も既に存在していた。

一方では西南四国の縄文研究を精力的に進められている木村剛朗により, 宿毛I・II式の型式内細分の方向性が提示された(「土佐の後期縄文文化」『高知の研究I』1983)。宿毛式の中には新旧が存在するとし, 宿毛式はI, II式の型式細分の方向性が提起される。「下益野式(中津式)から宿毛式へと漸移的に変容を示すその移行的段階のものと瀬戸内の福田K II式と南九州の綾(A・B)式土器文化の影響を受けた時期の二つの様相が宿毛式の中には存在するのではないか」(木村 1983)と宿毛式の細分が提示された。しかし, ここで考えておかなければならないことは, 木村剛朗の宿毛式の型式細分設定に際し, 先の今村啓爾の論稿の影響が色濃く残っており, 2本沈線の磨消縄文帯から3本沈線の福田K II式に変遷するとの認識が強く, 全般的に2本沈線の宿毛式が古いと見做されていた。それは犬飼徹夫の「小松川式」の設定(犬飼 1985)についても同様のことが言え, 縁帯文成立期の土器群が認識されていない時期に於いては致し方ない状況だったとも言える。木村が宿毛I式としたものの中には, 宿毛式の範疇で捉え切れないものも含まれているようであり, 宿毛I・

II式については, 後の項で述べるように松ノ木式(出原 1991)との絡みで再考を要するようである。それ以外に宿毛式に関する纏まった研究論文はなく, 木村の細分案に対する吟味・検討もなく今日に至っている。ただ, 福田K II式との絡みで, 宿毛式が僅かに取り上げられ, 3本沈線の磨消縄文帯が福田K II式, 2本沈線の磨消縄文帯が宿毛式との漠然とした型式差, 地域差が研究者間で認識され続けてきた。

断片的に宿毛式を取り上げたものとして, 足立克己は山陰石見地方の縄文後期の研究の中から, 「三本沈線の福田K II式と二本沈線の宿毛タイプの土器はやはり併行関係にある」とし, 2本沈線の宿毛タイプも福田K II式の範疇で捉えようとしている(足立 1987)。また, 玉田芳英もやはり3本沈線と2本沈線の磨消縄文は並行関係にあり, 地域差と見ており, 広島県の福山からそれより以西には福田K II式の新段階では2本沈線が地域差として残るとする(玉田 1989)。また田中・松永の両氏と同様に2本沈線と3本沈線を併用する洗谷遺跡の例から澤下孝信も福田K II式と宿毛式が並行関係にあると考えている(澤下 1991)。最近では千葉豊が福田K II式を新たに3段階に分け, 「宿毛式には口縁部文様帯が口縁部直下を占める古い1群と口縁部文様帯の一部が口唇上に上昇した新しい1群の二者が認められる。これは, 宿毛式と福田K 2式が相似的な変化をしていることを示している。よって宿毛式は玉田芳英によって新たに設定された福田K 2式にほぼ併行する型式であると理解している」(千葉 1992)とし, 具体的に宿毛式のどの土器を指しているのか判然としないものの, 筆者の理解する所では, 千葉は福田K II式の第1段階及び第2段階に木村編年の宿毛I及びII式がそれぞれ並行関係にあるものと把握しているらしい。つまり, 編年的には宿毛

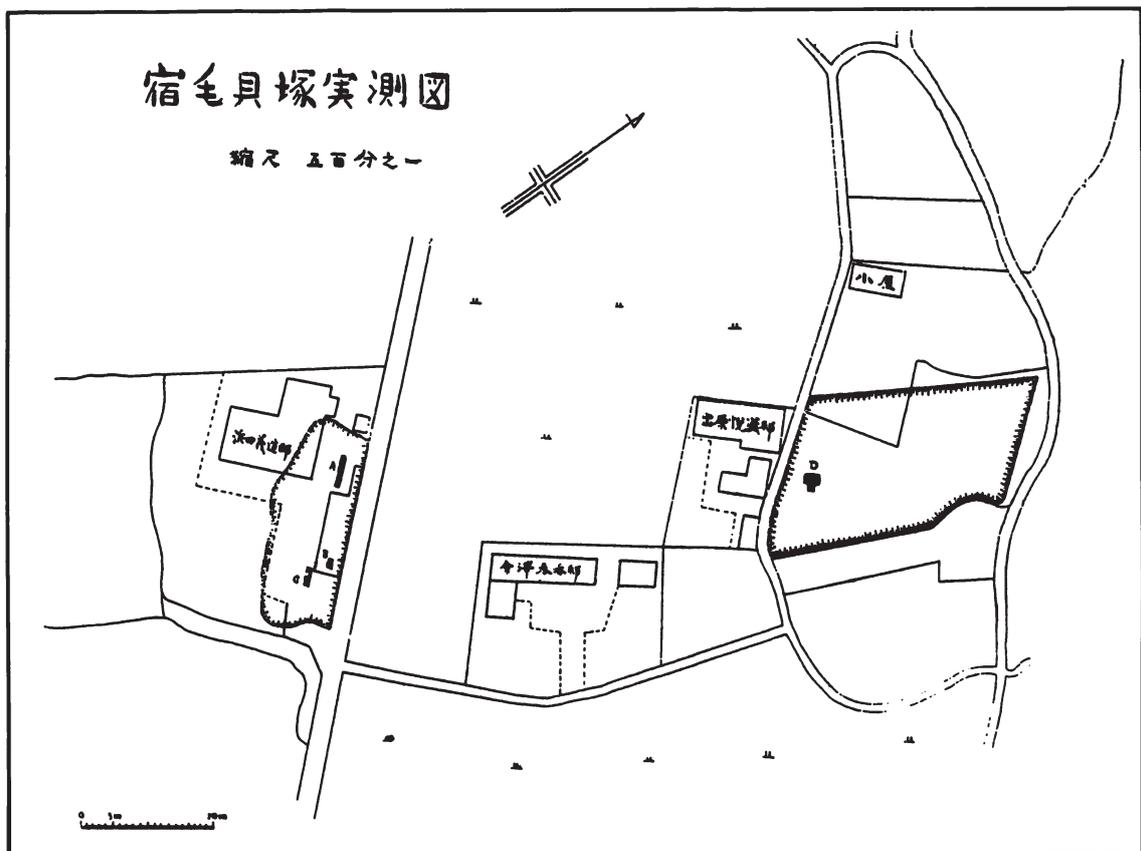
式は福田K II式と並行関係にあるものの、千葉の細分案の福田K II式の古段階及び新段階の古相に並行関係を求め、宿毛式の2細分を支持するものと考えられる。また南四国の後期の展開を述べた出原恵三も千葉の福田K II式の細分案に倣って、南四国出土の宿毛式を福田K II式に並行関係を求めている(出原 1993)。

3. 宿毛貝塚出土遺物の概観

宿毛貝塚は高知県下に於いて数少ない貝塚の一つであることから、県下の縄文文化を理解する上で貴重な遺跡であることは言うまでもないことである。しかし、残念なことに明治時代に寺石正路によって再発見されて以来、盗掘、乱掘に合い続け出土遺物は散逸状態にあり、宿毛貝塚を研究する上で支障を来している。今までに調査報告されたものと橋田庫欣の採集品で宿

毛市教育委員会に保管されているものを中心として、宿毛貝塚の出土品の概略をみてみたい。なお、宿毛貝塚は2地点に分かれており、第1、第2貝塚と呼称されたこともあるが、ここでは現在一般的に西貝塚、東貝塚と呼び習わされておりそれに従う。

縄文土器は前期から後期に含まれるものが出土しており、昭和45年に東貝塚の南端で(橋田 1979)、また同様に昭和60年(山本ほか 1986)に東貝塚で貝層の下の暗茶褐色粘質土より、縄文時代前期末及び中期初頭と考えられる土器が少量であるが出土している。浮線の上に爪形文を刻み、また口唇にも爪形文を施すものも見受けられ、口縁内面も段状に肥厚させるものもある。型式名は本貝塚を標式とし、宿毛C式と付名されているものの、大部分が前期末の大歳山式に含まれるか、または瀬戸内の田井式、中期初頭



第2図 昭和24年度調査区(岡本ほか 1951より転載)

の船元Ⅰ式に相当するものと考えられ、瀬戸内の影響が強く西南四国の独自性といったものは認められないようである。また昭和24年の東貝塚のD地点からは報告書では後期と報告されているものの中には、表裏条痕に連続的に爪形文の刺突が2条認められることからして轟式に含めて大過ないものも出土しており、前期前半のものも含まれるようである(第17図 125)。

縄文時代後期前半については本遺跡を標式とした宿毛式が主体を占めている。岡本健児は宿毛式の設定に当たり、福田KⅡ式系統のものとして把握し、その後、宿毛式は福田KⅡ式だけではなく、南九州の綾式の影響も認められるとしている(岡本 1968)。それを受けて木村剛朗は宿毛式のⅠ、Ⅱ式の細分設定する際、Ⅰ式を中津式から福田KⅡ式への移行期段階、Ⅱ式を福田KⅡ式と綾式の両型式の影響で成立したと捉えた。後期前半に含まれるものとして、従来宿毛式の範疇に含まれるものには、松ノ木式、所謂「縁帯文土器成立期」の土器群に近似するものも若干であるが含まれているようである。しかし、これについては後の項で述べるように若干の吟味が必要である。また昭和24年の調査時の東、西貝塚ものは大部分が平城式に含まれるものであり、また橋田庫欣が東貝塚で採集されたものにも僅かではあるが平城式が含まれている。平城式はかつて西田栄・鎌木義昌(1957)により第1類から第5類にまで分類され、その後、第1類が平城Ⅰ式、第2類が平城Ⅱ式に細分された(犬飼 1976・1978, 木村 1982)。昭和24年の調査の東貝塚出土の平城式は大部分が平城式第2類、つまり平城Ⅱ式に含まれ、橋田庫欣の採集土器は平城Ⅰ式及び平城Ⅱ式が含まれているようである。

後期後半に含まれるものとしては伊吹町式が昭和60年の調査の際、東貝塚の南端で出土して

いる(第17図 130~135)。貝塚形成の認められない地点で、量的には多くないものの、縄文時代に関してはかつては後期前半の平城式までしか認められなかったものの、新たに後期後半までが確認され注目される。しかし、現在の所、平城Ⅱ式から伊吹町式に至る片粕式は確認されていない。

石器は今まで実測図として発表されているものは少なく、宿毛市教育委員会に保管されているものの概略を記す。石鏃は20点余り採集されており、無茎鏃に大部分が含まれ、1点尖頭状でサヌカイト製のものが含まれており、松ノ木遺跡の石鏃C類に類似する(前田 1993 a)。石質は大部分がサヌカイト、姫島産黒曜石で占められており、他にチャートが僅かに存在する。石斧は打製石斧3点と磨製石斧4点が採集されており、磨製石斧には乳棒状石斧が2点含まれており、平城貝塚、松ノ木遺跡S X 5(同前掲)にも認められている。石匙はサヌカイト製の縦長型のものが1点。石錘は長軸両端に抉入部を深く作出した大型のものが2点出土している。刃器と考えられるものが2点、凹石、敲石が僅かであるが出土している。昭和24年の調査の際にも打製石斧、石錘、敲石、石皿が出土しているものの、数は僅かである。石皿は他に東貝塚の南端の水田の石垣に嵌め込まれているものが存在し、完形品と思われる。昭和60年の調査では下部貝層より宿毛式に伴って石錘が13点纏まって出土している。長軸両端に抉入部を作出した重さ100gを越える大型のものである(第16図 121~123)。石器については大部分が表面採集、攪乱層中からの出土のため所属時期が掴めていない。その他に土製円板1点、ドーナツ状の球状耳飾りが1点出土している(第16図 120)。

また自然遺物・動物遺存体についても不明な部分が多い。昭和24年の調査の際に酒詰仲男に

より貝種の同定がされている以外には、詳細な報告・調査がなされていないため、貝塚の範囲はほぼ把握されているものの、貝塚の形成過程・貝塚の廃棄パターン、微細遺物等について知る由もない。

4. 宿毛式の分類

宿毛式は瀬戸内の福田K II式と同様に磨消縄文であることを第1の特徴とする。2本の沈線により文様区画を描出し、幅の狭い横位の磨消縄文帯または曲線的なものが見られるようで、福田K II式の特徴である3本沈線の磨消縄文帯は僅少である。宿毛貝塚出土の宿毛式土器は部分破片が多く、全体の文様構成を知りうるものは少ない。そのため、分類基準は各部位毎の形態・文様構成・属性に依拠している。宿毛式は頸部が発達しないことから口縁部文様帯の発達もみられず、口縁・頸部・胴部の部位区分は明瞭でなく、宿毛式の部位名称は口唇部・口頸部(胴部上位)・胴部と便宜的に呼称したい。松ノ木式等については従前通りの部位名称を使用する。なお、実測図・拓影図は部分的に加筆修整したものがあ

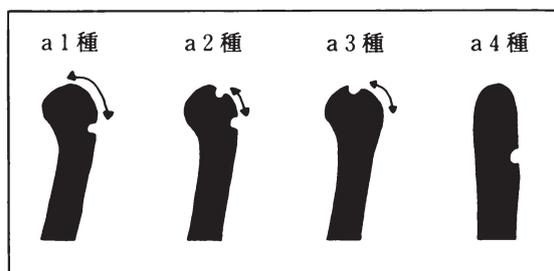
る。1群土器は宿毛式の範疇に含まれるもので1類から11類に分類した。

1類(第4図)には1～16が含まれ、主として口唇部及び口頸部に間隔の狭い2本沈線による横位の縄文帯を巡らせ、斜行の刻みを連続的に施すものである。器形は平縁で波状になるものは少なく、口頸部で僅かに屈曲気味に外傾し、胴部は直線的な楕木鉢状の器形である。1は肥厚しない口唇部に文様帯を施したもので、原体RLの縄文を施し、さらに斜行の刻みを連続的に施した後、口唇上端をなでる。口頸部がやや屈曲気味に外傾し、その僅かな屈曲部に間隔の

狭い2本沈線を巡らせ微隆帯状の沈線間に口唇部と同様に縄文帯と斜行の刻みを連続的に施している。口頸部文様帯は長楕円、円形の枠状の沈線区画文を交互に配するようである。胴部文様は判然としないものの長楕円の区画文の磨消縄文となるようであり、1を1類の代表例とした。

1類の口唇形態には3種類みられ(第3図)、1,2等にみられるように口唇部下端に沈線を巡らせるものが一般的であり(a1種)、3,4のように上端にも沈線を巡らせ縄文及び斜行の刻みを連続的に施すものもある(a2種)。また、8のように上端のみに沈線を巡らせ、口唇部下端の沈線を省略したのも認められる(a3種)。8は外面を比較的肥厚させたものである。15以外は僅かながら外面施文となっており、15は口唇部を内側に僅かに突出させるものの全体は肥厚しないまま、上面施文となり沈線を1条巡らせその外側に縄文帯及び斜行の刻みを施している。さらに布施式に見られるような沈線による渦巻き文が施される。しかし、宿毛貝塚では本例以外に類例は認められないようである。

1類の頸部は発達せず、胴部文様帯との一体化が認められ、胴部上位、または屈曲部から上位を口頸部文様帯と呼称したい。口頸部文様帯は全体像を掴めるものは少なく、分かるものは



第3図 宿毛式口唇部形態

1～6で1, 2, 4は口頸部の区画文の沈線が口唇部下端の沈線を兼ね備えるようである。3も同様のもので波状口縁部下に垂下するような文様効果となっている。5も波状口縁となるよう通常口頸部屈曲部に刻みの沈線が巡るものが波頂部方向へ斜行するようである。6は刻みの沈線が曲線的に描かれたものである。また口頸部が屈曲するものは口頸部に文様が施されたものが比較的多く、特に5は内面が段状になるようである(b1種)。15は口頸部に文様帯は認められないものの、屈曲の度合いはやや強くb1種に含まれよう。10, 11, 14等は屈曲の度合いは弱く部分破片のため断定はできないものの、口頸部文様帯は持たないようである(b2種)。

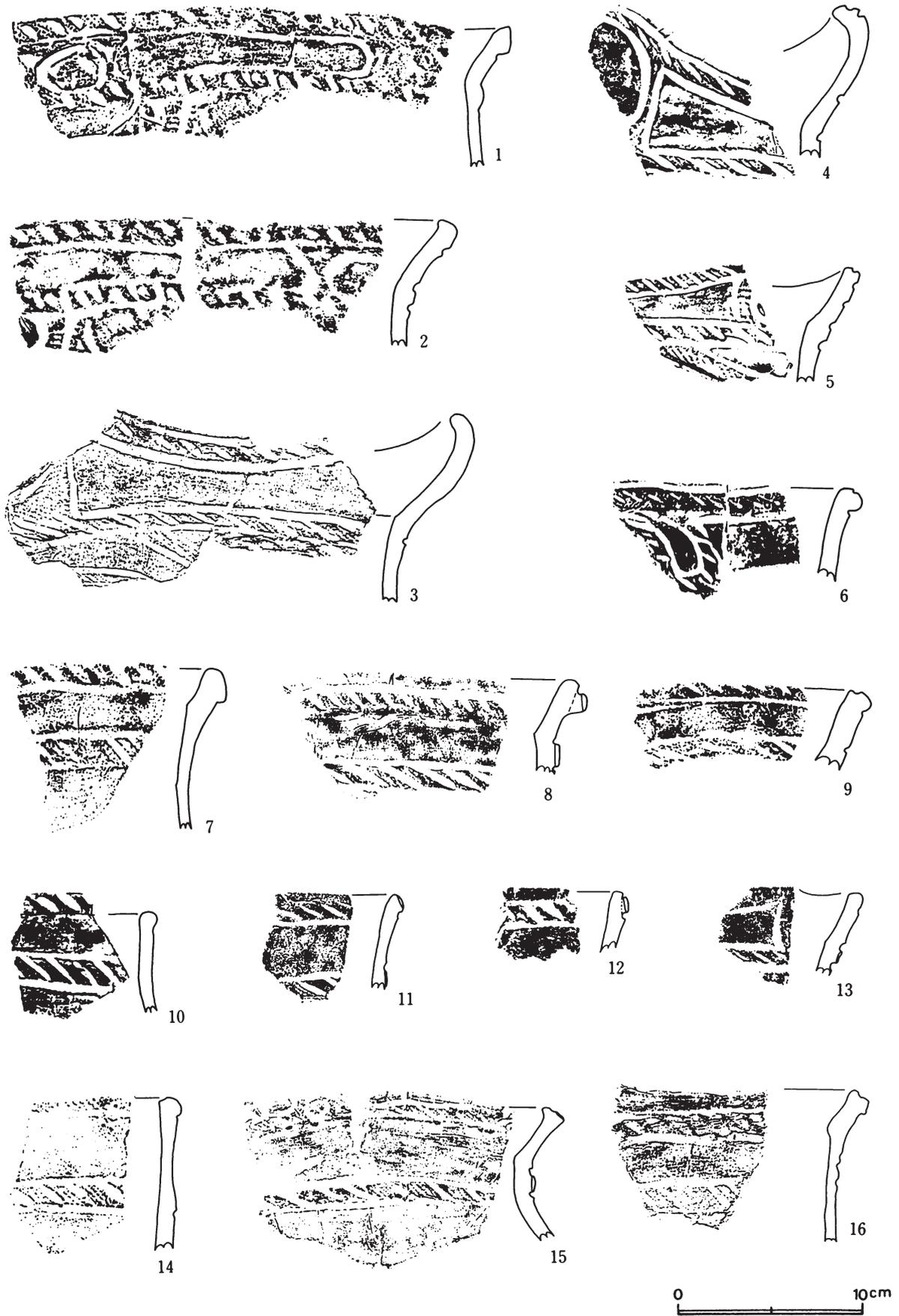
胴部文様帯については手がかりとなるものは皆無に近く、1には口頸部と同様の長楕円、円形の区画文を展開するようであり、区画外は磨消縄文で縄文原体は口唇部と同様にRLになるものと考えられる。3, 5は曲線的な磨消縄文帯になる可能性が高い。

2類(第5図)には17～22が含まれ、縄文帯に刻みではなく円形刺突を施すもので、棒状工具、篠竹状の筒状工具、巻き貝の殻頂部を回転押捺するものの3種類認められる。1類の刻みと同手法と考えられ、細部の判別だけで別類として成立するかどうか判然としないものの、口唇部が無文帯となることから、1類とは区別した。17は器形は山形口縁を呈し、波頂部にはソフトクリーム状の渦巻きを、その下の口頸部には渦巻き文から縄文帯を垂下させ、胴部の菱形区画文と連結さす。菱形区画文は入り組みのJ字文を圍繞する。口唇部は無文帯となっている(a4種)。口頸部のくびれは1類b1種のように屈曲はしないようである。21は直線的に立ち上がる器形で貝殻擬縄文である。20, 22は2類の胴部破片である。口唇部、口頸部が17のようになる

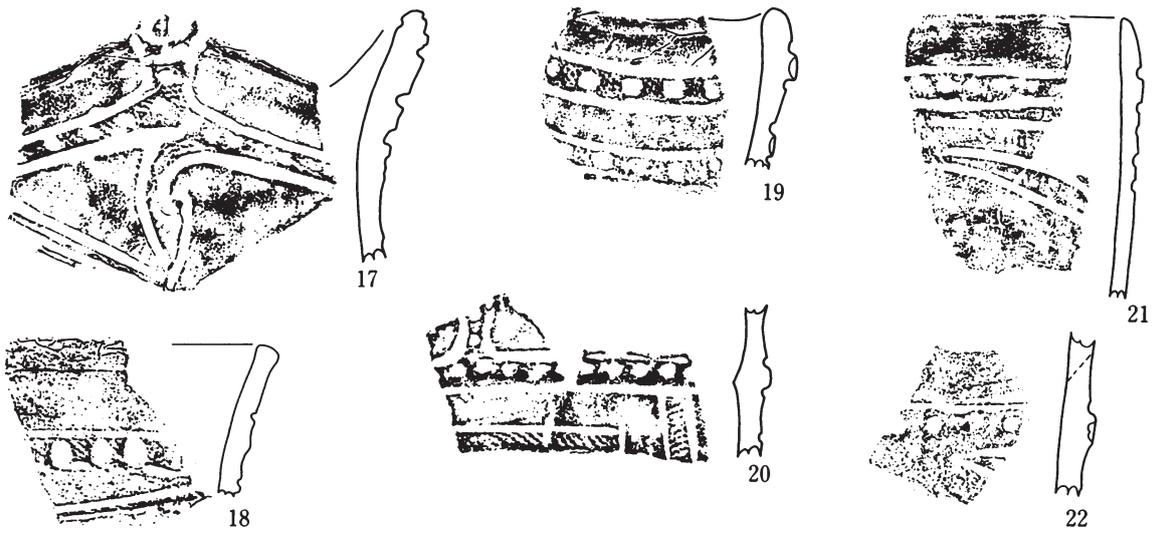
かは不明であるが、やはり円形刺突を施すもので、20については1類の長楕円、円形の枠状の区画文になる可能性がある。

3類(第6図)には23～37が含まれ、口唇部に刻み・円形刺突のない磨消縄文帯のみのを有するもので、口頸部に長楕円・円形の区画文を配し、口頸部下にも区画文の縄文帯が巡るものである。口唇部は1類のように間隔の狭い沈線を2本施すものの、口唇部のくびれは弱く、5類のように波状口縁で内弯気味のものも含めた。23の口唇部の沈線は1条のみの縄文帯である。24～27は口唇部が2本沈線のものでa2種に含まれる。25はやや口唇部を肥厚させ口唇部文様帯の下にさらに縄文帯を設けるもので、胴部には曲線的な沈線がみられる。26は口頸部に長楕円区画文を配するもので、27は30と比較的似るものの、緩やかな波頂部分には円形区画文を配するようである。28は波状口縁となるようである。29は胴部文様帯を有し、1類土器と同様に長楕円区画文を展開する可能性がある。30は口唇部の沈線は下端の1条のみで(a1種)、口頸部は長楕円形の区画文を配し、2類17と同様に波頂部分から縄文帯を垂下させている。31～34は内弯気味の口唇部は無文帯となり、波状口縁で口唇部よりやや下に2本沈線による縄文帯を巡らせ、31, 32は口頸部には長楕円区画文を配する。31は波頂部分は欠落しており、5類のように入組文を施すかどうかは不明である。胴部文様帯は持たず、口頸部のみに文様帯を設ける。口頸部は屈曲しない(b2種)。縄文原体はLRである。36は沈線端部が離れ、また沈線の起点を円形に刺突するようである。平城I式か松ノ木式に含まれる可能性もある。

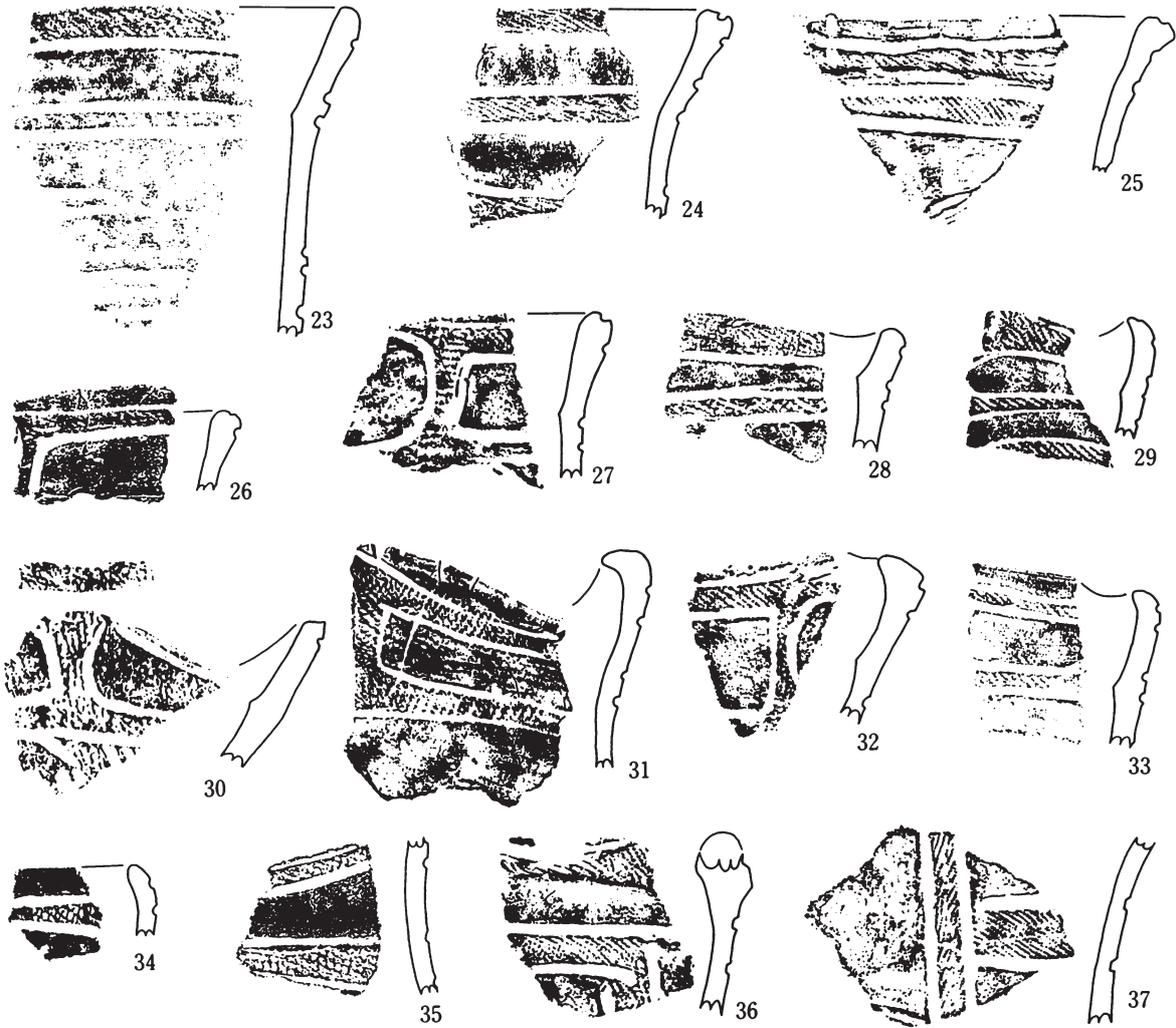
4類(第7図)は1類とは違い曲線的な文様構成のもので占められ、38～52が含まれる。退化したJ字文、入組文を構成するもので、器形も



第4図 宿毛式I群1類



第5図 宿毛式I群2類



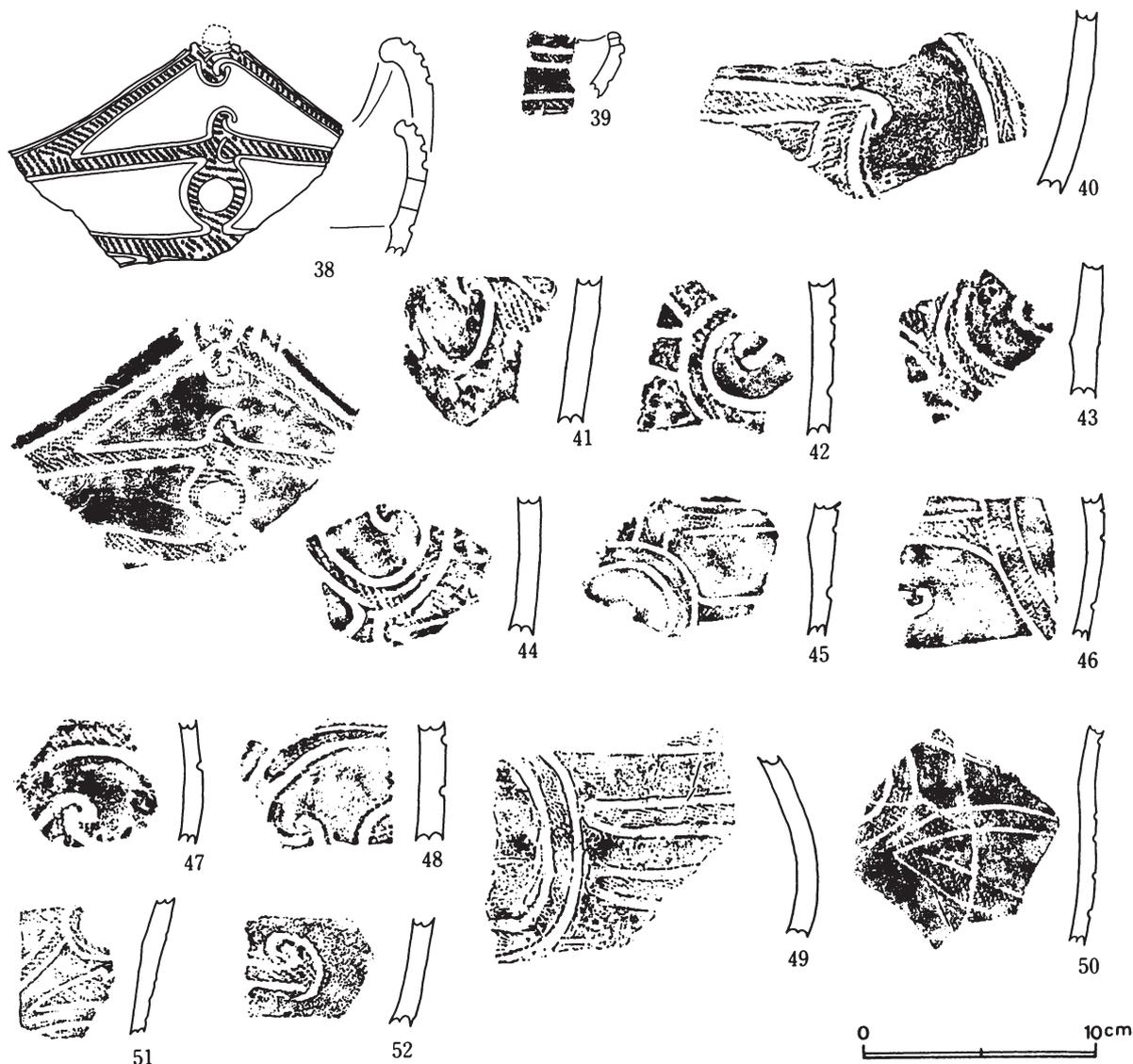
0 10cm

第6図 宿毛式I群3類

鉢形に近いものである。38は菱形区画文内に「O」字文を配し、山形口縁の口頸部には平城Ⅰ式と同様の波頭状文がみられ、波頂部に入組文が認められるものである。幅の狭い縄文帯には赤彩が施され、磨消部分は丁寧な磨きが入る。39は口唇部下位に2本沈線による縄文帯を巡らせ、内弯気味のものであり、鉢の可能性はある。40～52は4類に伴う胴部破片と考えられ、40等は退化したJ字文で他の文様単位と磨消縄文帯により連繋するものと考えられる。51は「O」字文、52はスペード文、49、50は磨消縄文帯の

連結文が離れるものの主文様の空隙に長楕円区画文を配したのと考えられる。49は擬縄文である。

5類(第8図)には53～56が含まれる。波状口縁の波頂部に入組文を施し内弯気味のもので、53は口唇部に2本沈線による縄文帯と刻みを施し、1類a2種と同様の口唇部文様帯を有するものである。54も同様のもので波状口縁となり口唇部が内弯するものの、退化したJ字文を形成している。55も波頂部に入組文を施すものの、縄文帯は口唇部より下端に施されている。54・



第7図 宿毛式Ⅰ群4類

55の縄文原体は共にRLである。56は直立気味に立ち上がり、口唇は丸味を持ち短沈線が絡みつくものである。

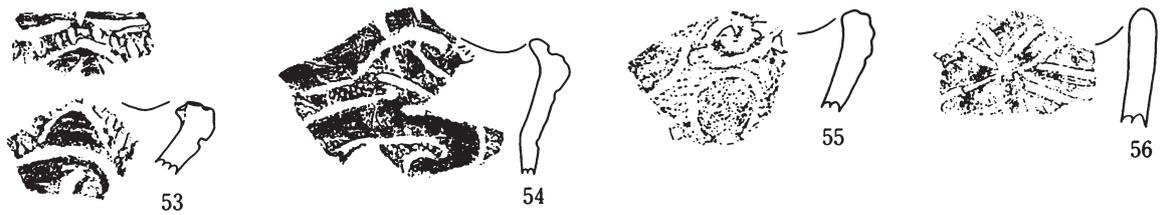
6類(第9図)には57~63が含まれ、口唇部は丸味を持ち無文で口頸部は幅の広い縄文帯を有する。縄文原体LRが57, 58, 61, 62, RLが59, 60である。63は擬縄文で口唇部に小振りな刻みを施している。60は頸部上位に縄文帯と胴部に曲線的な沈線が認められる。62は口頸部が外傾するものである。

7類(第10図)は沈線文系の土器群である。64~76が含まれる。64~66は波状口縁となり、65は区画文となるようである。66は口唇がやや尖り気味に立ち上がり、胴部の沈線は幅の狭いものである。67・68は口頸部に長楕円区画文を配するもの、69は多条の沈線、70は胴部に三角形の多重の区画文か。72は入組文を形成している。74は70と似ているものの、松ノ木式の沈線文系鉢に近似した75は時期的に宿毛式の範疇外に含まれる可能性がある。76は巻き貝による押捺がみられるもので、口唇部及び胴部には2本沈線間に刻み状の押捺を連続的に施し、1, 2類と同様の手法であり、器形は直線的に立ち上がる。

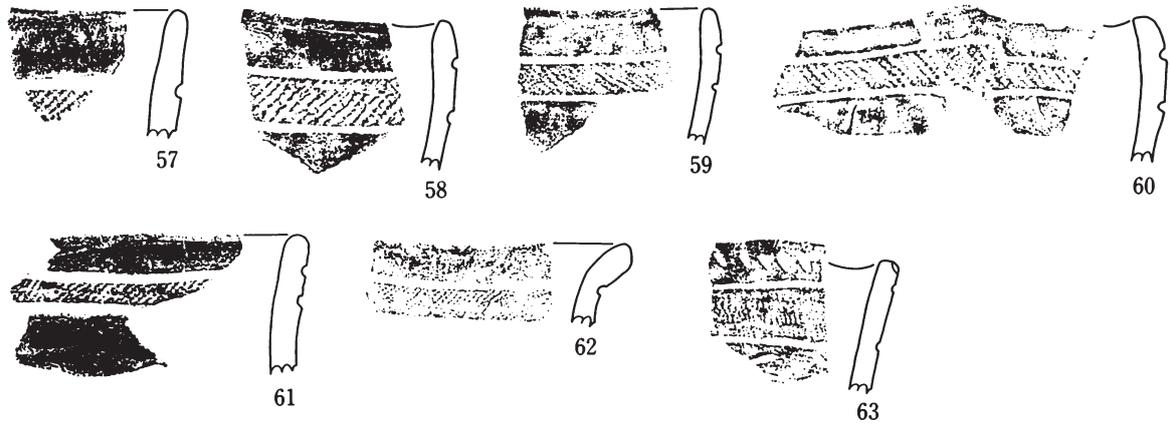
8類(第11図)は3本沈線の磨消縄文帯を主体としたものを一括した。77は口縁を内側に屈折させ、耳状突起を付したものである。口頸部から胴部には3本沈線の入組文を施している。78は口縁が内屈し磨消縄文帯が1条巡り、口頸部に3本沈線の磨消縄文帯を施したものである。79は口縁を大きく肥厚させ、上面に幅の広い3本沈線を巡らせ、口縁部下端には僅かに沈線の名残が認められる。80は79と同様であるが口縁上面は3本沈線による磨消縄文帯である。また胴部にも磨消縄文帯が見られる。81~83は3本沈線及び磨消縄文の胴部破片である。

9類(第12図)には84~92が含まれ、8類と同様に口唇部文様帯ではなく、口縁を拡張し口縁部文様帯のもので占められる。84は縄文と口縁部下端の沈線が省略されたもので、僅かに波状口縁となり、波頂部分の口縁上面に瘤状の貼付文を施し、小円形の刺突文が数点みられる。内面は沈線状にくびれる。85~87は口縁部を拡張し、斜行の連続の短沈線と縄文を施し、口縁部下端にも縄文帯と沈線を施している。口縁部の拡張方法は84が内外面、85は外面、86・87は内面に粘土帯を付加したものである。9類は高知県長岡郡本山町松ノ木遺跡を標式とする松ノ木式への過渡的なものである。I群1類の特徴である口唇部文様帯に刻みを施すものから、口唇部を大きく拡張させ口縁部文様帯に変化し、刻みは短沈線へと変る松ノ木式の特徴を読み取れ、松ノ木式の設定に際し、宿毛式から分離も可能なものの、しかし、松ノ木式そのものではなく、9類は口縁部下端に沈線を残存させるなど、松ノ木式とは若干の相違点が認められるようである。時期的には宿毛式の存続期間内で捉えられると思われるものの、口縁部文様帯となることから型式学的には松ノ木式の範疇で把握することも可能ではあるが、ここでは宿毛式の範疇内で把握しておきたい。宿毛貝塚に於いては本格的な松ノ木式の展開は途絶するようである。

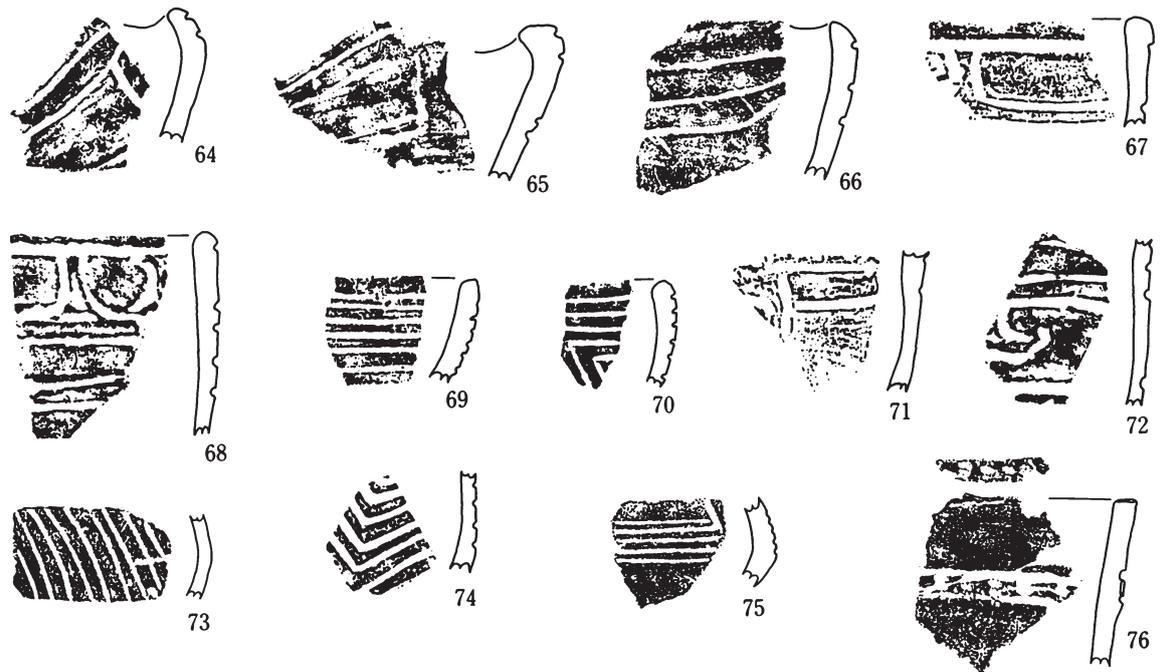
10類(第13図)は浅鉢に含まれる88~99を一括する。大きく開き、口頸部内面が段状になるものが多く、内外面に磨きが施される。2本沈線の磨消縄文帯は幅が狭く、横位に数条施し帯縄文とでも言えるものである。赤彩を施すものが比較的多い。中には89のように「O」字文となり横位の磨消縄文帯が連繋するものもみられる。95は口唇部文様帯から口頸部・胴部に跨がり2本沈線の曲線的な磨消縄文帯がJ字文を形



第8図 宿毛式I群5類



第9図 宿毛式I群6類

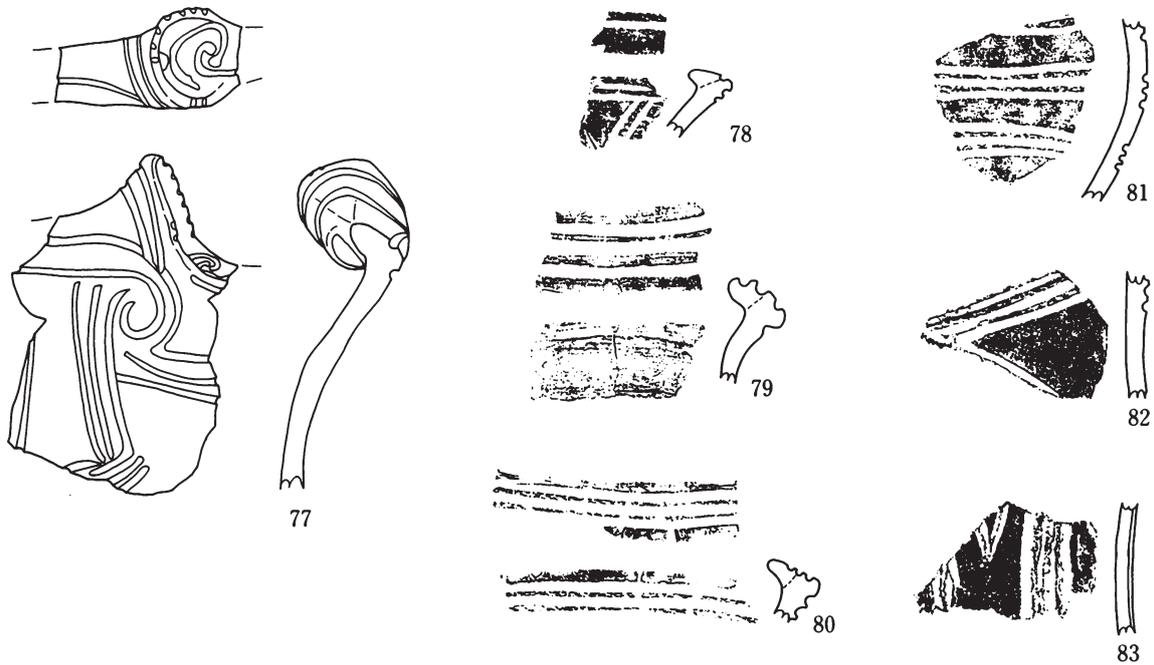


第10図 宿毛式I群7類

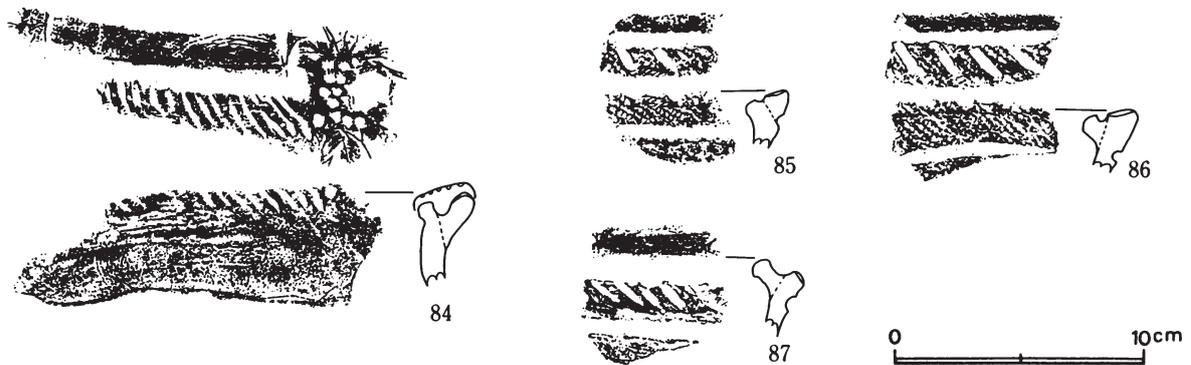
成し, 沈線端部の入組文が離れるものである。他に巻き髭状の入組文になる97, 枠状の長楕円区画文の98等が僅かに認められる。92は口唇部の縄文帯が口頸部の縄文帯に繋がるもので, 口唇部は2本沈線でa2種に含まれる。浅鉢の口唇部文様帯はa2種に含まれるものが大部分であり, 口唇部無文帯となるa4種は極稀で, 94がa4種に含まれ, 口唇は平坦である。他のものは口唇部沈線によりくびれるものの, 肥厚しない

ものが多い。頸部は屈曲し, 内面が段状になるb1種でほぼ占められる。

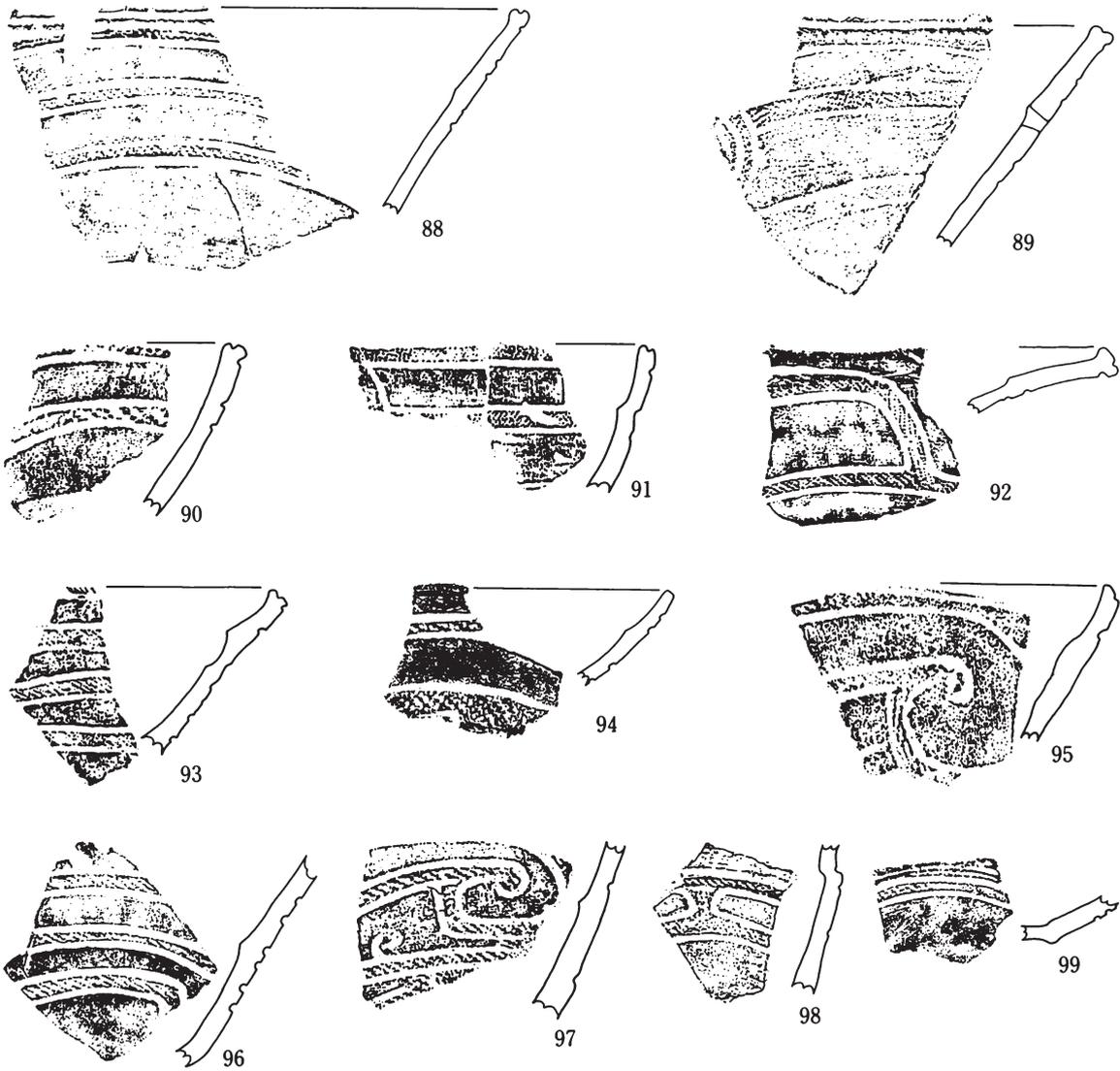
11類(第14図)は全縄文のものと同製のものを一括した。100は口唇部及び頸部は無文で, 頸部がやや反り気味のものである。胴部と頸部との境には沈線を1条巡らせ部位を区画する。胴部は原体RLの全縄文である。101は全縄文に筒状の工具による円形刺突を施している。縄文原体はRLである。102は口唇部のみに刻みを施し,



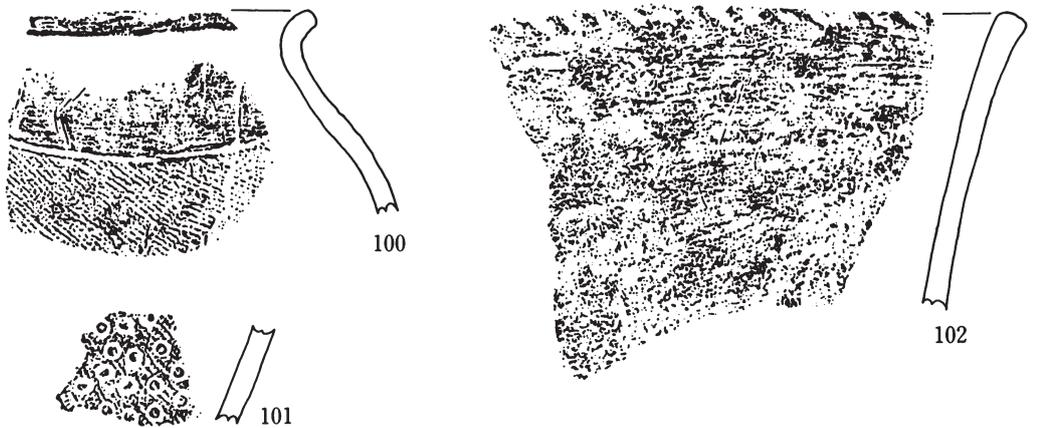
第11図 宿毛式 I 群 8 類



第12図 宿毛式 I 群 9 類



第13図 宿毛式 I 群10類



第14図 宿毛式 I 群11類

他は条痕地の粗製のものである。

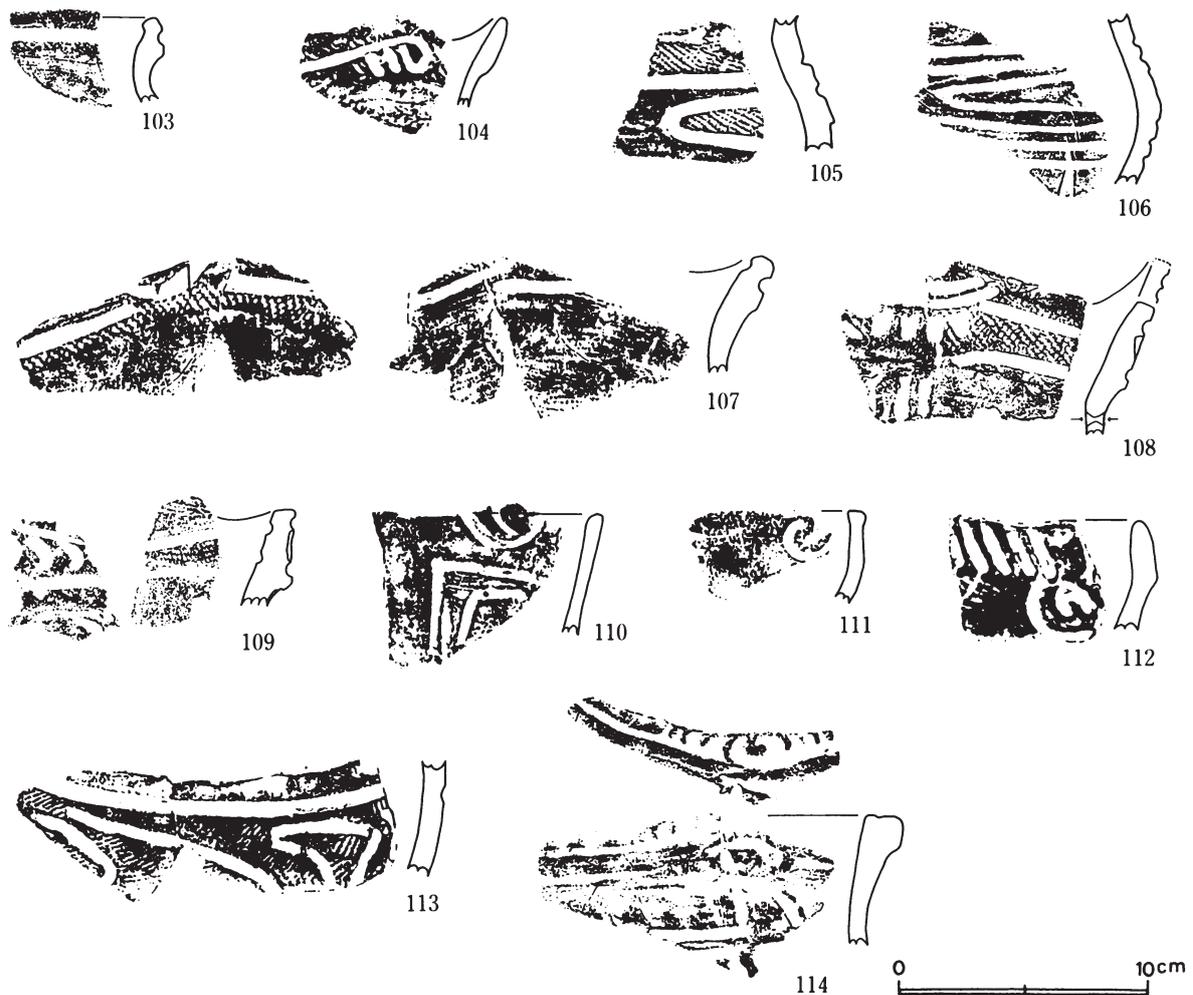
II群土器(第15図)は平城式に含まれるもので、103~114が相当しよう。大野雲外の採集で東京大学人類学教室所蔵品、昭和24年の発掘品は部分的に紛失しているために、正確なことは不明である。

II群1類に含まれるものは103~106である。103は口縁部破片で口唇部は丸味を持ち、外面に沈線を1条巡らせその下に原体RLの縄文を施す。口唇部内面はやや突出し、その下が沈線状のくびれとなる。沈線の断面はかまぼこ状に丸味をもつ。頸部は無文帯となっている。胎土には角閃石・長石を微量含んでいる。104は口縁部に

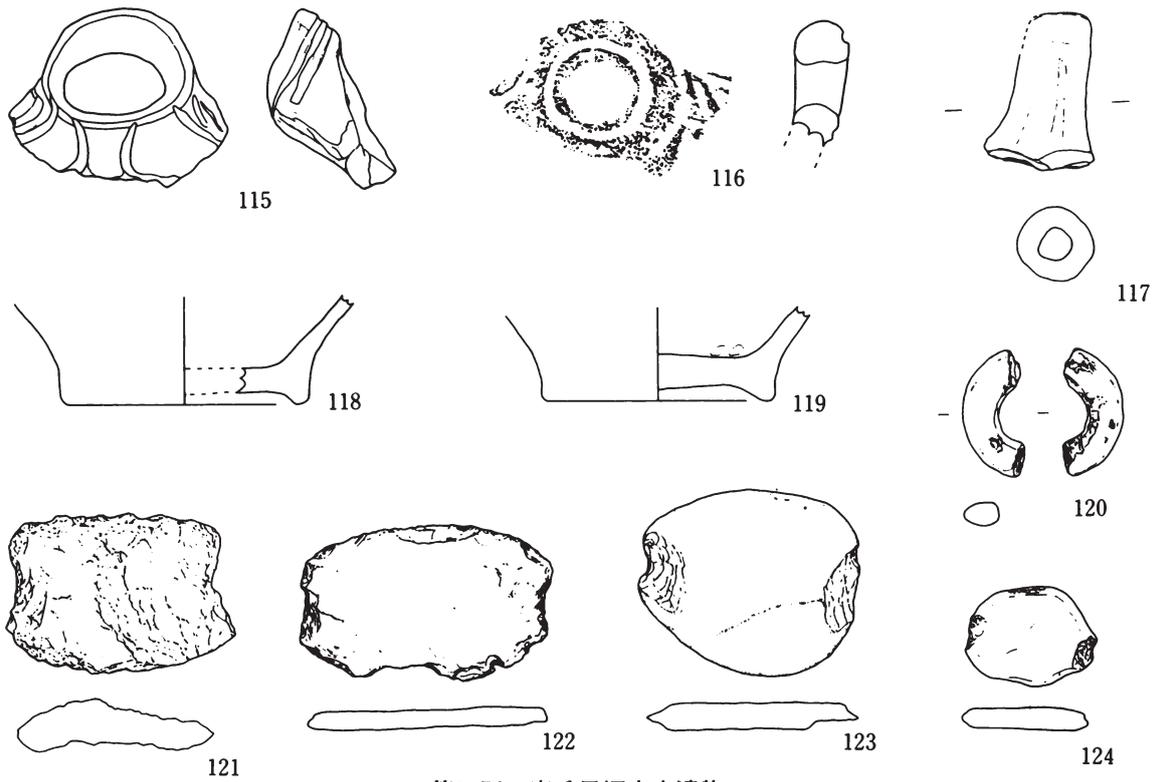
に鈎状の入組文と列点状刺突を施したものである。105は口縁部破片と考えられ、列点状刺突と沈線1条が観察でき、頸部は大振りな波頭状文様か。縄文原体はRLである。106は沈線文系と考えられ、長楕円形の区画文が見られる。他に平城I式に含まれるものとしては、橋田庫欣の採集品のものに沈線文系のものが含まれている。

2類の107は山形口縁に沈線1条が絡みつき沈線の下にRLの縄文を施している。頸部は無文帯である。胎土には角閃石が含まれる。昭和24年のC地点出土である。

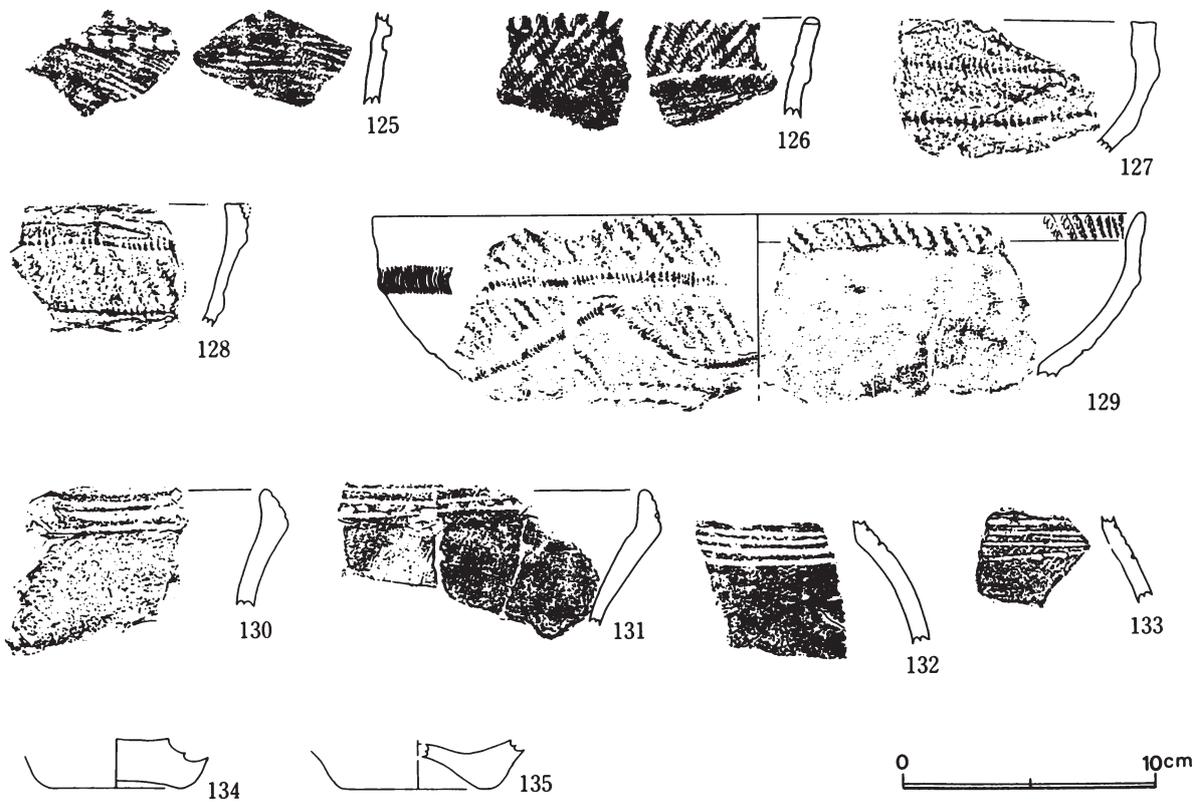
3類には108, 109が含まれる。108は昭和24年の調査の際に出土したもので、2つの破片で別



第15図 II群土器



第16図 宿毛貝塚出土遺物



第17図 宿毛貝塚出土土器

個のものとして, それぞれC地点(西貝塚), D地点(東貝塚)出土のものと報告されているものの接合関係にあり, 報告書掲載の際の間違いと考えられ, おそらく共にD地点の出土と考えられる。山形口縁部の波頂の口唇部上端に押捺状の刻みを施すものと考えられ, 口唇部は平坦である。口縁部は肥厚させないものの施文域の拡大が見られ, 外面に弧状の沈線, 列点状の刺突を施し, 全面に原体RLの縄文を施文し2本の沈線を巡らせている。頸部には3本の垂下沈線が見られ, やはり縄文を施している。109も口縁部破片で口縁部の施文域を拡大し, さらに内面までに施文が拡張されている。口唇は平坦で山形口縁部外面も全面に擬縄文を施し, 弧線文及び2本の沈線を巡らせている。

4類には110~112が含まれる。110, 112は昭和24年のD地点表土層(東貝塚), 111は橋田庫欣の採集品である。111は口縁部に沈線による渦巻き文が施され, 110はさらに胴部に鈎状の文様帯が認められる。112は口縁部に斜行の沈線を連続的に施し, 110・111の口縁部と同様の渦巻き文が頸部に施されている。

5類の113は107と同様にC地点出土で, 現物は紛失しており詳細は不明だが, 縄文地に逆「L」字状か入組文を形成するものと考えられる。107の胴部破片の可能性もある。

6類の114は口縁部破片で口縁部をやや肥厚させ, 2本の沈線を巡らせ波状口縁波頂部に外面に対弧文の中に円形刺突, 上面には対弧文と数個の弧線文を施すものと考えられ, 頸部には口縁とは繋がらない2本の沈線を垂下させる。

II群土器は1類が平城I式, 3類が平城II式の範疇で捉えられるものである。3類に含まれる108は平城貝塚には類例は認められないものの, 口縁部の施文域の拡張を行い外面に列点状刺突等を加飾を施している。また109も「内文」

の見られるものである。2類土器は通常平城I式と考えられてきたものであるが, 平城貝塚の平城I式そのものとは違い頸部が発達し無文帯であるなど若干の相違点が認められる。また平城II式に通じるものでもなく, 平城I式の系統で把握されるものの, 平城I式そのものよりは新しくなる可能性が強い。4類は鉢の可能性があり, II群のどれに伴うか判然としないものである。平城貝塚(西田・鎌木 1957)では平城1類として報告されているものの, 所謂平城I式に伴うものかは判然としない。また4類は3類と同様にD地点(東貝塚)のもので大部分が占められるようだが, 平城II式の鉢状のものとは明らかに違っていることからして, 3類に伴う可能性はなさそうである。6類は鐘崎II式相当と考えられる。

宿毛貝塚では平城I式, 平城II式, また松ノ木式への過渡的な一群がそれぞれ認められるものの, 宿毛式に後続する土器群は比較的稀薄であり, 後期前半の主体となるのはやはり宿毛式である。しかし, かつて宿毛式に後続するのは平城I式と単純に考えられていたものの, 松ノ木式の過渡的なものも存在するところから宿毛式と平城式の在り方, また松ノ木式を絡めた追究が必要であろう。

5. 宿毛式の特質

宿毛式と福田K II式の違いは漠然と2本沈線と3本沈線の磨消縄文帯であると認識されてきた。ここでは宿毛式に相当する土器群, 特に福田K II式と比較し, 宿毛式の独自性がどこあたりにあるのか検討してみたい。また, 豊後水道を隔てた対岸の小池原下層式にも若干触れておきたい。

(1) 福田K II式について

福田K II式は1989年に泉拓良により, 1950・

1951年（昭和25・26年）の山内清男・鎌木義昌等の発掘資料が発表され、また千葉豊（1989・1990・1992）、玉田芳英（1989）により福田K II式の細分化も進展している。宿毛式については先に述べたように余り研究の進展は見られず、また周辺域との比較検討がされていないことから、福田K II式との文様帯との相違点も明確にされていないのが実情である。先ず福田K II式の特徴の概略を把握し、宿毛式との相違点を見てみたい（第18図）。

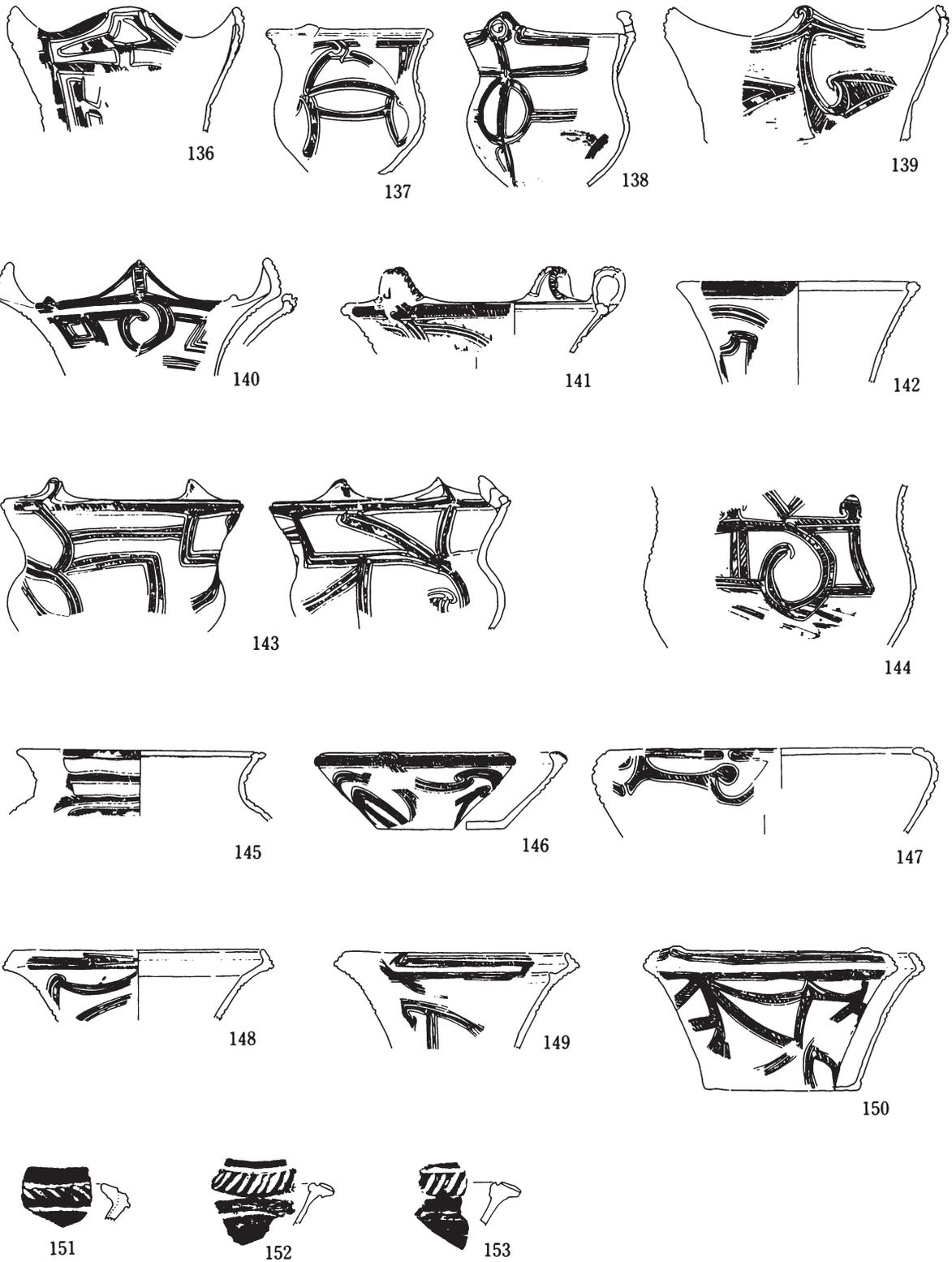
福田K II式の古段階と考えられるものは第18図137、138で各文様帯は一体化しており、胴部下半に下脹れ状に丸味を持ち、上位で緩やかにくびれ直線的に立ち上がり、口縁部文様帯を形成することなく口唇部文様帯である。次段階の140のように口唇部がくびれ僅かに肥厚し丸味を持つこともなく、口唇部上端も平坦である。胴部文様は137が2本沈線による磨消縄文帯で曲線的な文様構成とはなっていない。また沈線の端部は繋がり入組文とはならない。138は3本沈線による磨消縄文帯であるが、「O」字文に磨消縄文帯が連結するものの、137と同様に余り曲線的な文様構成とはなっていない。137と同様に口唇部文様帯となっている。中津式には口唇部無文帯のものと反転して口唇部に縄文帯を有するものが認められるところから、137、138はただ単に中津式からの口唇部無文帯を選択しているに過ぎないものと考えられる。福田貝塚出土の136には口唇部縄文帯を有するものであり、口唇部無文帯のみにより新旧関係を論じることは困難である。

中段階と考えられる140～142は直線的に開くもので古段階に較べ口唇文様帯であることには変わらないものの、古段階に較べ口唇部はくびれ、僅かに肥厚させ丸味を持つ。143は古段階より胴部上位がくびれる傾向を示す。また大振り

な突起を付すもの、入山形の波状口縁となるものも認められ、若干の前後関係が想定される。胴部文様帯は入山形のもものは波頂部分から退化したJ字文を垂下させ、四角等の区画文を横位の磨消縄文帯で連結させ同一の文様構成は取らないようである。大振りの突起を付すものについては胴部上位と下位の文様帯に分かれる傾向があるものの、上位の文様帯は斜位・横位・曲折した磨消縄文帯の連結が見られ、下位には143のように退化したJ字文を曲線的な磨消縄文帯で連結するようである。しかし、共に3本沈線による磨消縄文帯であり、また沈線の端部が離れる入組文を形成している。

新段階と考えられるものは鉢状の器形で148～150は大きな特徴として前段階の口唇部文様帯から口縁部文様帯への変化である。口縁部文様帯は拡張され、「く」字状に内傾気味に屈曲して立ち上がる。148は内面に宿毛式の5類等のb1種と同様に屈曲部を持ち僅かに突出し段状となる。149は特に内面に突帯状の表現となっている。口頸部の発達は認められないものの、150のように口縁部文様帯と口縁部下の縄文帯は分帯する傾向にあり、中段階の142では口縁部文様帯とならず口縁部の分帯が未発達と言える。

福田貝塚の新段階の土器群は微量ではあるが、口縁部文様帯に沈線1条とその外側に連続の短沈線を施すものが認められ、松ノ木式に通じるものが認められる。151～153は松ノ木式にごく近いものと把握できるものの、しかし共に口縁部の下に沈線を1条残存させており、宿毛貝塚出土の9類と同様のもので、新段階に伴うものと考えられる。また注意しなければならないことは、福田貝塚の出土の新段階のものには既に口縁部の拡張方法に相違が認められ、外面・上面・内面表示型の装飾方法の違いの萌芽を読み取れることである。



第18図 福田貝塚（縮尺は不同、以下同じ）

(2) 小池原下層式について

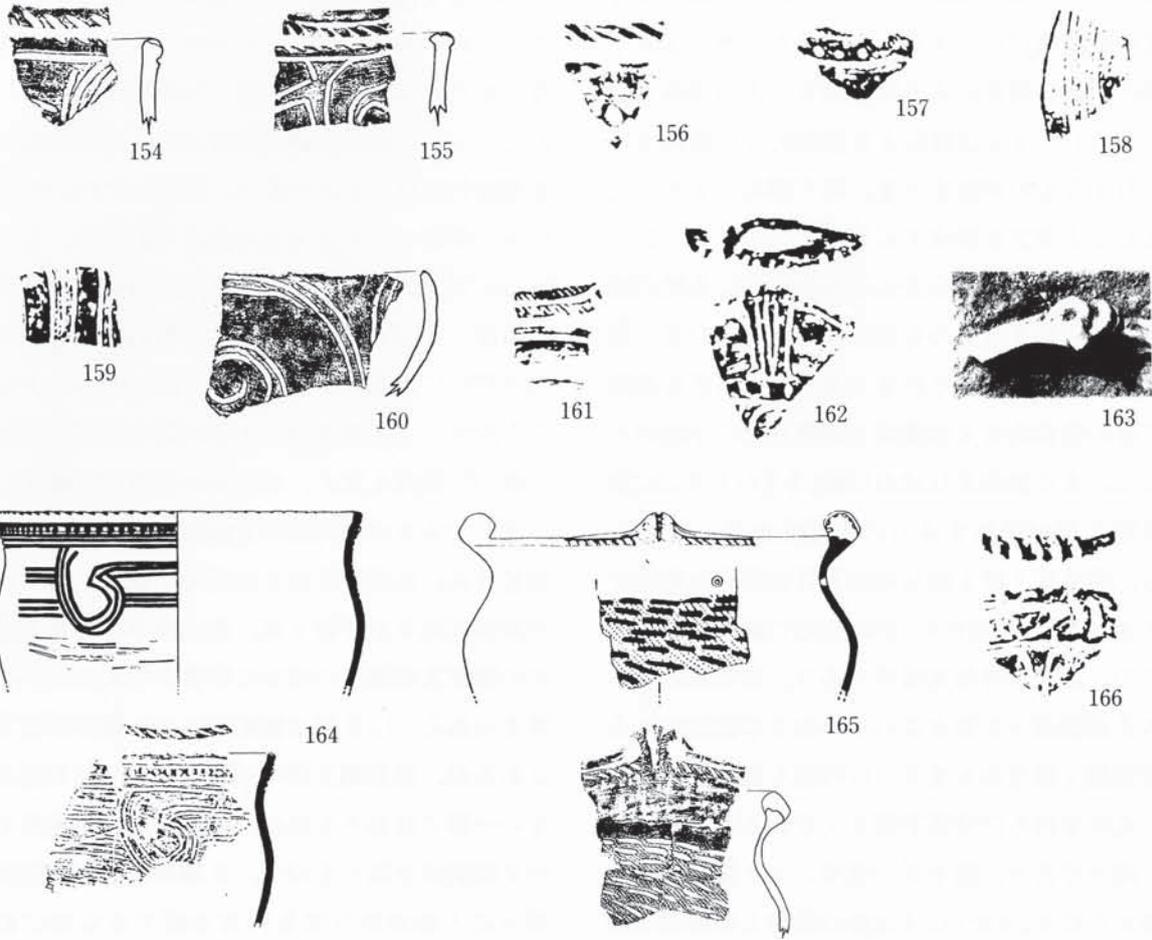
小池原貝塚(賀川 1964, 賀川・橘 1965, 前川 1979)は貝層下の黒褐色土より出土した一群の小池原下層式と貝層中の小池原上層式の2型式に分離されている(第19・20図)。小池原上層式については、西南四国の平城I式にほぼ相当し、小池原下層式は宿毛式・福田K II式に並行するもので占められているようである。154~157は宿毛式そのものと言える内容を示しており、また158, 159は3本沈線による磨消縄文帯で福田K II式と捉えられよう。同様のものは宿毛貝塚の81, 82等にみられる。小池原下層式で問題となるのは161~166であろう。165は胴部に原体R Lの縄文地に短沈線の装飾を施し、頸部は無文帯となり口縁部をやや肥厚させ、上面に沈線1条と短沈線の刻みを連続的に施している。また、拇指大の瘤状の突起を貼付し、縦に沈線を入れ沈線内に円形の刺突を数個施す。極めて縁帯文成立期の様相を呈している。しかし、縁帯文成立期に含まれるかは疑問である。胴部の全縄文地に短沈線の装飾は宿毛式のI群11類の101の円形刺突を施すものと装飾上同一と考えられる。また頸部が発達し口縁部文様帯となっているものの、松ノ木式程、口縁部を拡張することもなく、連続の短沈線の刻みは小振りである。さらに瘤状の突起の沈線内に小円形刺突を複数施すものは宿毛貝塚の9類84と同様であり、明確に縁帯文成立期に含まれるものではなく、宿毛式の存続期間内で把握できるものである。松ノ木式の円形刺突は大きく「8」字状に近い2個が対になったものであり、多くても3連の円形刺突であり、複数の小円形刺突を有するものは皆無である。また平城I式の橋状把手上の第22図183, 広瀬遺跡第29図338も2個であるなど松ノ木式、平城I式の円形刺突はやや後出的な様相を持つ。その意味では小池原下層式の165は

所謂小池原下層式の存続期間内で把握できるものである。また162は口唇部文様帯に松ノ木式の耳状突起と近似したものが貼付されているものの、胴部文様は沈線間に刻みを施し、また口頸部には5条の垂下沈線が見られ、その両脇の2条は口唇部の沈線と連結し口頸部に長楕円区画文を作出していることなどから、宿毛式と把握できる。宿毛式I群8類77及び福田K II式の143のように既に耳状突起が出現しているところからしても162も宿毛式と並行関係にあるものと言えよう。166についても一見、縁帯文的な様相を見せ、口縁部に鈎状に入り組み、右側に弧線文が見られ平城II式に通じるように見えるものの、平城II式は左右対称の対弧文となるなど相違点があり、鈎状に入り組んだ下に列点状刺突が見られるところから平城II式より平城I式的な様相が強いものである。

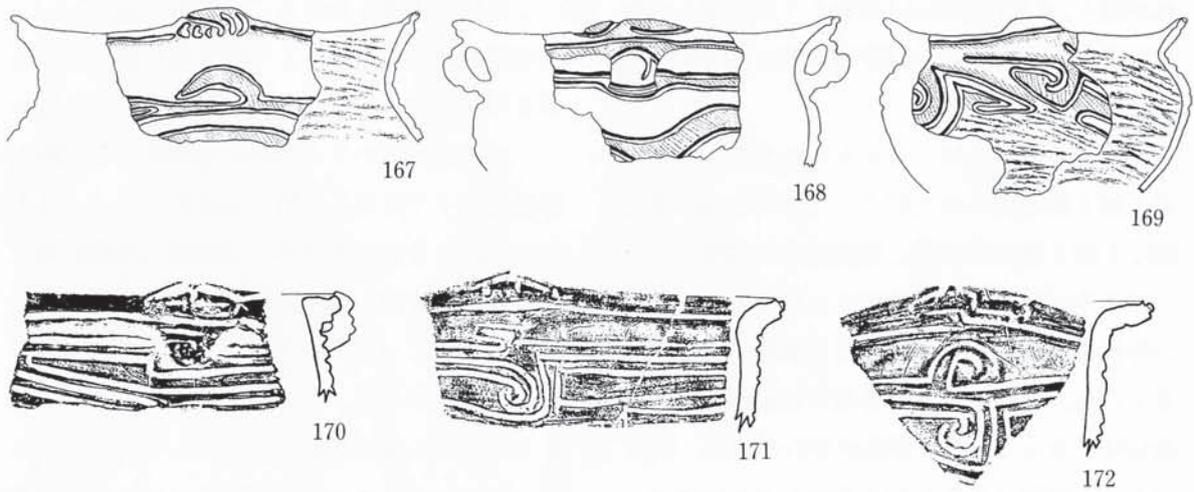
小池原下層式は宿毛貝塚、福田貝塚と相似的な変化を見せている。宿毛貝塚、福田貝塚の縁帯文成立期は縁帯文成立期直前で明確に松ノ木式そのものとは言えない様相を呈している。小池原下層式は宿毛式・福田K II式並行関係と縁帯文成立期への過渡的な一群で占められていると言えよう。小池原下層式に含まれる縁帯文成立期の様相を呈した一群は、型式学的には分離することも可能であるものの、小池原下層式の存続期間内で把握できるものである。過渡的なものを除いて、小池原下層式は極めて宿毛式に近似したものとして把握することができる。

(3) 宿毛式の特徴

福田K II式、小池原下層式の概略は上記の通りであるが、次いで宿毛式の中に見られる福田K II式系統のものを取り上げたい。I群8類は福田K II式そのものと言える内容のものであり第11図79, 80は口縁部文様帯となるものの口縁部下端に僅かに沈線の名残が認められ、また78



第19図 小池原貝塚下層



第20図 小池原貝塚上層

は「く」字状に屈曲したものであり、福田K II 式の新段階に相当するものである。他にI群4類の胴部文様帯のような入組文による渦巻き文が見られ、2本沈線による曲線的な磨消縄文帯を有するものが存在する。第7図40のように退化したJ字文を形成するものであり、また38、45のように「O」字文に2本沈線による磨消縄文帯が連結するものも見られ、福田K II 式の第18図140、144に見られる3本沈線による磨消縄文帯の曲線的な文様構成と同様なものが認められる。また福田K II 式の138にも「O」字文に磨消縄文帯が連結するものが見られるところから、宿毛式I群4類は福田K II 式系統と把握できよう。福田K II 式の140は山形口縁を呈するものの、本来口唇部文様帯であり、宿毛式に見られる連続刻みを施さないものの2本沈線による磨消縄文帯を巡らせて、口唇部を僅かに肥厚させ丸味を持ち口唇部下端がくびれるものと形態上同一であり、宿毛式口唇部のa2種と同様と考えられる。また140は山形口縁部と口頸部の磨消縄文帯との空隙に梯子状の装飾を施しており、宿毛式のI群1類の縄文帯に連続刻みを付加したものと同様の文様効果と考えられる。138は胴部文様帯に「O」字文に3本沈線の磨消縄文帯が連結するものについては、口頸部のくびれが弱く、また口唇部は140のように丸味も持たず直線的に立ち上がり口唇部下端に縄文帯を巡らせている。

宿毛式特有のものと考えられるものは、宿毛式I群1類を第一に上げることができる(第4図)。I群1類は縄文帯に連続刻みを付加したものであり、口頸部から胴部には長楕円及び円形の枠状の横位の区画文が多段に展開するものと考えられ、口唇部は丸味を持ち口頸部内面が屈曲気味となっている。平縁が多いものの、3、4のような波状となるものも存在しそうである。

3は胴部文様は曲線的な文様構成を取るものと考えられ、若干福田K II 式系統に近いものである。また15は口唇部に小振りな渦巻き文が見られる。I群2類は磨消縄文帯の中に円形の刺突を連続的に施すものであり、装飾的には1類の刻みと同様のものと考えられる(第5図)。また第10図76の貝殻押捺のもの、全縄文の第14図101も同様の手法と考えられる。2類の中で17は山形の頂部に渦巻き、その下に区画文の中にJ字文を配する文様構成は、4類の第7図38と同様の菱形区画文と言え、38の菱形区画文内は「O」字文となるものの同様の文様構成と言える。福田K II 式には菱形区画文は認められず、宿毛式の菱形区画文が平城I式、東九州の小池原上層式の胴部文様構成の成立に影響を与えたものと考えられる。3、5類は基本的には1類と同様ではあるが、磨消縄文帯内に刻み等の装飾を施さない一群ではあるものの、円文、長楕円区画文の文様構成を取るもので、5類55は波状の波頂部分に入組渦巻き文と円文を配するものである。3類の31以外は長楕円区画文を多段に展開するものが多く、31は口頸部のみに長楕円区画文が配されたものである。

宿毛式の文様系統には、4類の福田K II 式系統のものと1類を代表とする宿毛式特有のものの2系統に大きく分けることができる。しかし、宿毛式独自のものとした中にも福田K II 式の影響を全く受けていないかと言えばそうではなく、宿毛式独自のものの中にも福田K II 式的な様相も若干ではあるが取り込まれている。また逆に福田K II 式系統の中には曲線的な磨消縄文は所謂3本沈線を取るものは少なく、宿毛式の指標となっている2本沈線となるもので大部分が占められており、宿毛式の中の福田K II 式系統としたものも福田K II 式そのものとは言えないようである。また福田貝塚資料の中には比較

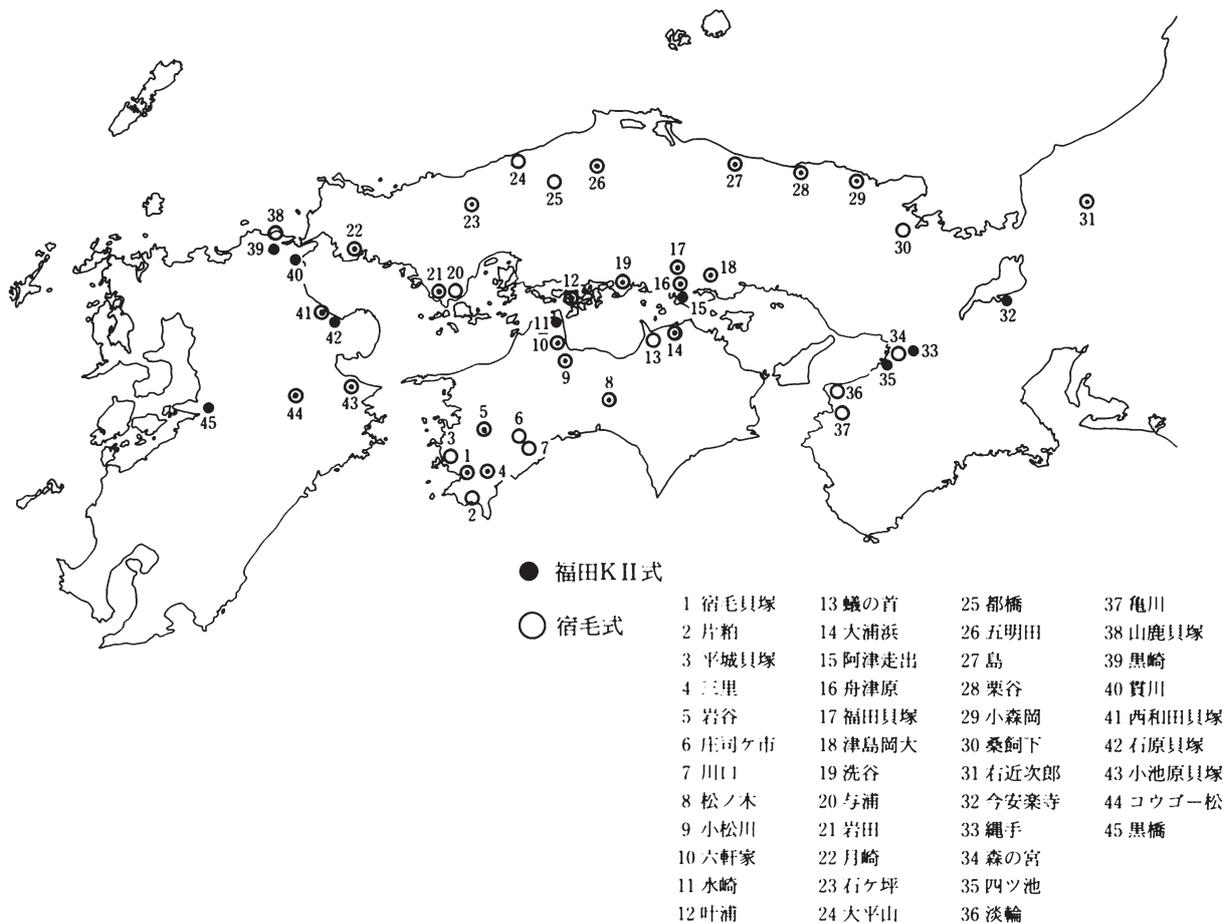
的, 宿毛式的な要素は少なく, 福田K II式の独自性と言ったものが保持されており, 宿毛式, 福田K II式共に互いの地域色を持つものと言えよう。しかし, 宿毛式, 福田K II式は四国・中国で周辺地域に影響を与え, また逆に周辺域の影響も取り込んで展開していくものと考えられる。宿毛式と福田K II式の相違点を踏まえて, 以下では周辺域での展開, 及び時期的な変化の把握に努めてみたい。

6. 宿毛式の展開

(1) 四国地方の状況

四国内で先ず宿毛貝塚周辺域の遺跡を見てみると高知県片粕遺跡, 三里遺跡, 愛媛県平城貝

塚で宿毛式が出土することで知られている(第22図)。片粕遺跡(岡本ほか 1975, 木村 1984)では宿毛式から平城I, II式, 片粕遺跡を標式とする片粕式の出土が認められ, 宿毛式についてはI群1, 2類及び4類が量多くないものの出土例が知られている。また松ノ木式に相当するものが僅少であるが出土している。平城貝塚(西田・鎌木 1957, 木村 1982)では平城I, II式及び片粕式が出土しており, 宿毛式に相当するものは比較的少ないようで182は2本沈線による曲線的な磨消縄文帯で縄文帯は連結し, 入組文を形成している。宿毛式のどの分類に当てはまるかは不明である。三里遺跡(岡本ほか 1978, 木村 1987)では宿毛式そのものは比較的



第21図 宿毛式分布図

少なく、2類に含まれる円形刺突のもの、2本沈線の磨消縄文帯のものが認められる。

西南四国の後期前半期を考えた場合、宿毛貝塚を含めたこれらの4遺跡は編年的に各型式の指針となり、宿毛式→平城I式→平城II式→片粕式の変遷が西南四国の妥当な編年観として受け入れられてきた。また新たに設定された三里式については「津雲A式土器に相当」（岡本ほか1978）するとし、と同時に平城式第2類（平城II式）との時間的な前後関係については平城式第2類よりも古く、「平城式独自の平城第2類に土器については、平城第1類（小池原上層主体）土器に、三里式a類土器が強く影響した結果生まれたものであろう」としている。

三里式a類とされる188は口頸部から口唇部にかけて文様帯が集約されたように一見解釈できるものの、従文様として長楕円形、円文の区画文が2段に配され、口縁は4単位の山形口縁を呈し、波頂部の主文様に渦巻き文、また環状突起状の穴の貫通した円文と繋がった渦巻き文が施されている。宿毛式の116の環状突起と近似したものと捉えることができそうである。口頸部と胴部の境で大きくくびれ、胴部には文様帯を施さず、条痕地である。口頸部の地文は貝殻擬縄文で口唇部にも擬縄文を施している。確かに口頸部から口唇部にかけて文様が集約されているものの、本来文様帯が縁帯文土器群のように分帯したものではない。三里式は口縁部文様帯ではなく、また平城II式、津雲A式のように口縁部を肥厚させることもない。宿毛式の第6図31にも同様に口頸部のみに文様帯を有するものが存在し、本来胴部文様帯を持たないもので、188も同様のものと考えられる。さらに平城II式、津雲A式の口縁部文様帯の主文様は渦巻き文とならず、同心円文の両脇に対弧文を配するのが通例であるところからも、三里式が縁帯文

土器群に含まれるものかは疑問である。189～191等の三里式も同様に口唇部文様帯であり、肥厚の度合いは松ノ木式より弱い。190についても入山形の波頂部に渦巻き文を施し、肥厚しない口唇部に「ハ」字状に刻みを施したり、194は宿毛式I群8類79, 80, 及び西和田貝塚第30図367～369と同様である。また195は福田K II式の新段階に相当し、さらに193は内面に段を有するものは宿毛式と同様であり、粗製のものにも入山形の器形のものが多いことから、三里式は時期的に平城II式、津雲A式と並行関係にあるものではなく、宿毛式の範疇かまたは宿毛式と極めて近接する型式として把握できる。

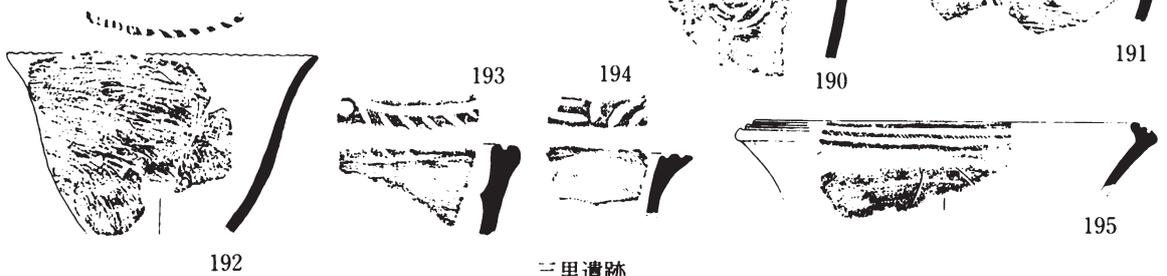
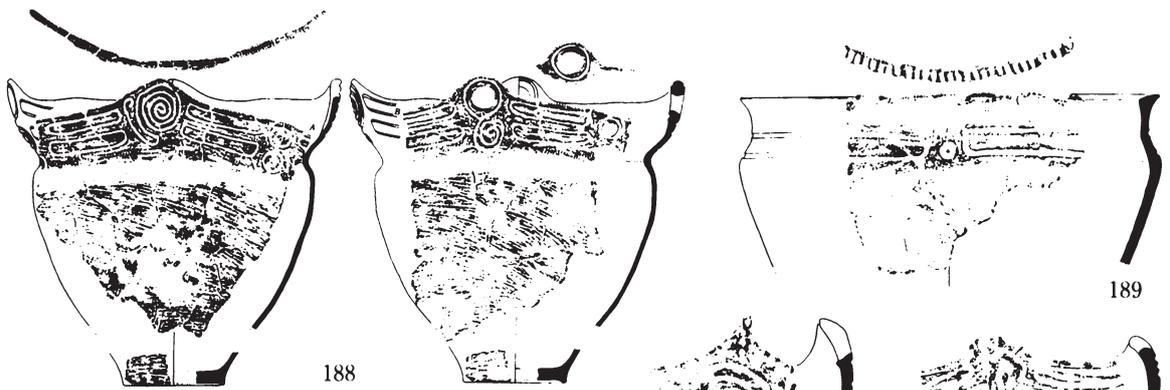
四国西部の四万十川水系山間部の遺跡として、愛媛県岩谷遺跡、高知県庄司ケ市遺跡、川口遺跡等を上げることができる（第23図）。岩谷遺跡（犬飼 1979b）では配石遺構が多数検出されており、後期前半から後半までが一通り出土している。岩谷遺跡からは宿毛式に相当するものは少なく、196の福田K II式の新段階に含まれるもの、198, 199の古段階のものが認められる。距離的には宿毛貝塚に近いものの、余り宿毛式の影響は認められず、福田K II式の分布圏に包摂されるようである。また岩谷遺跡の特徴として、縁帯文成立期に含まれる平城I式、松ノ木式系統のものは僅少で、縁帯文化した平城II式系統がやや纏まって出土している。しかし口縁部の文様構成は平城II式とはやや趣を違えており、三里式からの系譜を引く主文様が渦巻き文となり頸部は無文帯となっているものが主流を占めており、平城II式、津雲A式とは違った地域色を持つようである。逆に高知県側の庄司ケ市遺跡（木村 1987）、川口遺跡（木村 1987）では宿毛式が比較的纏まって出土している。205の宿毛式I群1類、204の4類に含まれるものが纏まって出土している。川口遺跡の213～215は松



片粕遺跡



平城貝塚



三里遺跡

第2表 四国各型式出土状況（※注：表の記号は相対的な出土量を表す。●多量、△少量、×微量）

	宿毛式	福田K II式	松ノ木式	平城I式	緑帯文	備考
宿毛貝塚	●	△	×(古)	×	×	鐘崎式×
片粕	△		×	△	△	
平城貝塚	△		×?	●	●	
三里	△	×	×	×?	×	三里式●
岩谷	△	●	×	×	●	三里式並行●鐘崎式×
庄司ヶ市	●		×			
川口	△		△			
松ノ木	●	×	●	×?	×	
小松川	●	●	△			小松川式●

ノ木式に含まれるものである。

四国中央部では松ノ木遺跡、小松川遺跡等を上げることができる（第24図）。松ノ木遺跡（出原 1991, 前田 1993 a）は「緑帯文成立期」の松ノ木式の標式遺跡として知られる。また重要なことは宿毛式期の住居跡が1軒検出されており（前田 1993 a）、宿毛式と松ノ木式が型式差として確認されたことである。松ノ木遺跡出土の宿毛式は216～218の住居跡出土土器、土器捨て場からは219, 220等が出土している。219は3本沈線による磨消縄文帯であるものの宿毛式I群1類と同様に口唇部に刻みを施したものであり、218は宿毛式I群4類の鉢形の器形で「O」字文か入組文のモチーフのものである。また225のような宿毛式I群8類に含まれるものが1点出土している。しかし、松ノ木遺跡は福田K II式よりも宿毛式の分布圏内に含まれるものである。宿毛式から松ノ木式への変遷は後述する。

松ノ木遺跡と四国山脈を隔てた愛媛県側の小松川遺跡（犬飼 1985, 菅 1992）でも多くの宿毛式が出土しており、また松ノ木式と同時期と考えられる小松川式が纏まって出土している。小松川遺跡で見られる宿毛式相当の胴部文様帯には縦位のもの、横位の2系統が認められるが共に2本沈線による磨消縄文帯であるところが特徴的である。233は入山形の特徴的な口縁形態を呈しており、縦位の曲線的な2本沈線の磨

消縄文帯が認められるもの、また238のように主文様に円文を配し横位の2本沈線による磨消縄文帯の連結したものも認められる。磨消縄文帯については2本沈線と言う宿毛式的なものの、文様構成としては縦位の曲線的な福田K II式系統のものと、横位の宿毛式系統の区画文を基調にしたものの両者が認められるのが小松川遺跡の特徴であり、福田K II式の影響が若干ではあるが侵入している。

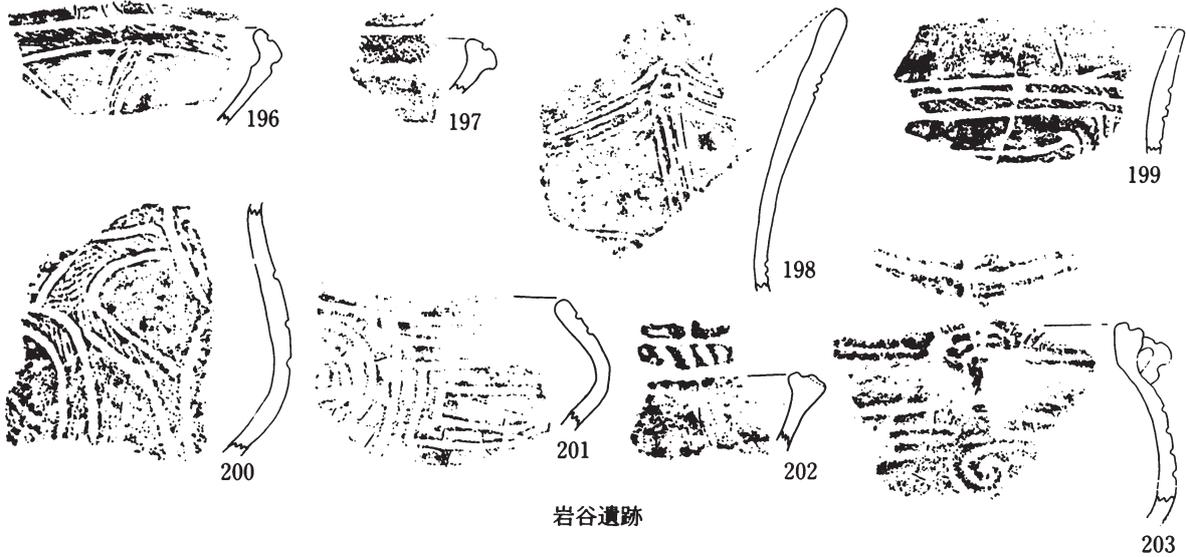
四国内でも瀬戸内海に面した遺跡に目を転じると、愛媛県側では水崎遺跡、六軒家遺跡を上げることができる（第25図）。水崎遺跡（犬飼 1986）では243の福田K II式に相当するもの、六軒家遺跡（犬飼 1986）では六軒家II式としたものが宿毛式に相当し、244～246のように口唇に刻みのみを施し口頸部にやや幅の広い磨消縄文帯を横位に展開させたものが見受けられる。香川県で主だった遺跡を上げると大浦浜遺跡（大山・真鍋 1988）では基本的には福田K II式で主体を占めており、247～250の宿毛式に含まれるものが一定量含まれ、また緑帯文成立期へも展開するようである。他に蟻の首遺跡では壺形の器形で胴部に2本沈線の磨消縄文帯で入組文を形成し、区画文が連結しない文様構成のものが出土している。

四国の状況として、瀬戸内海に面した地域では地理的要因で主体は福田K II式の分布圏に含

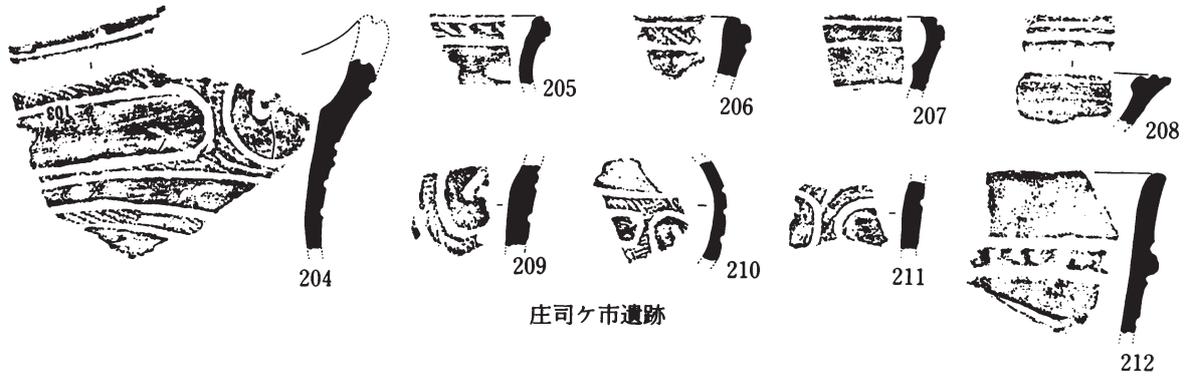
まれる傾向が強く、宿毛式は客体的な存在である。四国の西南部では宿毛式の展開は当然としても、高知県中央部の松ノ木遺跡では宿毛式の分布圏に包括され、次段階の松ノ木式の成立に影響を強く与えた遺跡として小松川遺跡が特に注目されよう。

(2) 中国地方の状況

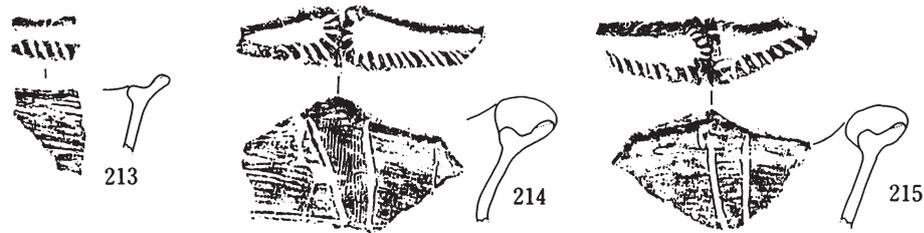
中国地方は福田貝塚を中心とした中央部、広島県西部・山口県の西部、及び日本海側の3つの地域に大きく区分することができる。岡山県では福田貝塚以外に舟津原遺跡(下澤 1988 a)、阿津走出遺跡(下澤 1988 b)、津島岡大遺跡(山



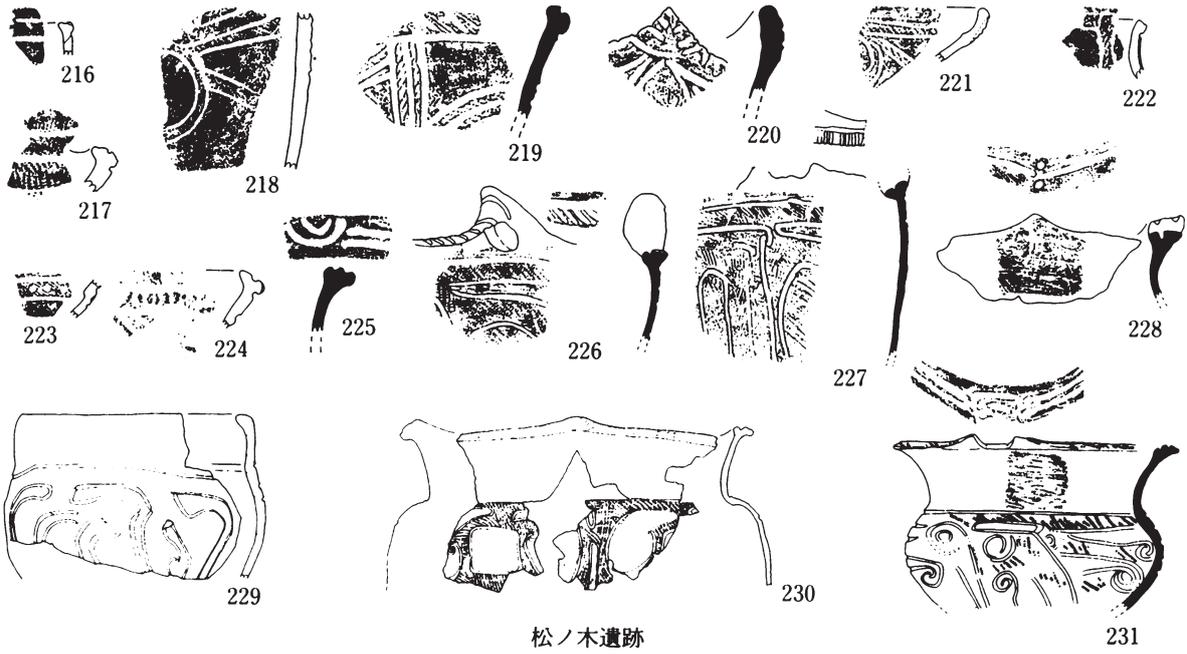
岩谷遺跡



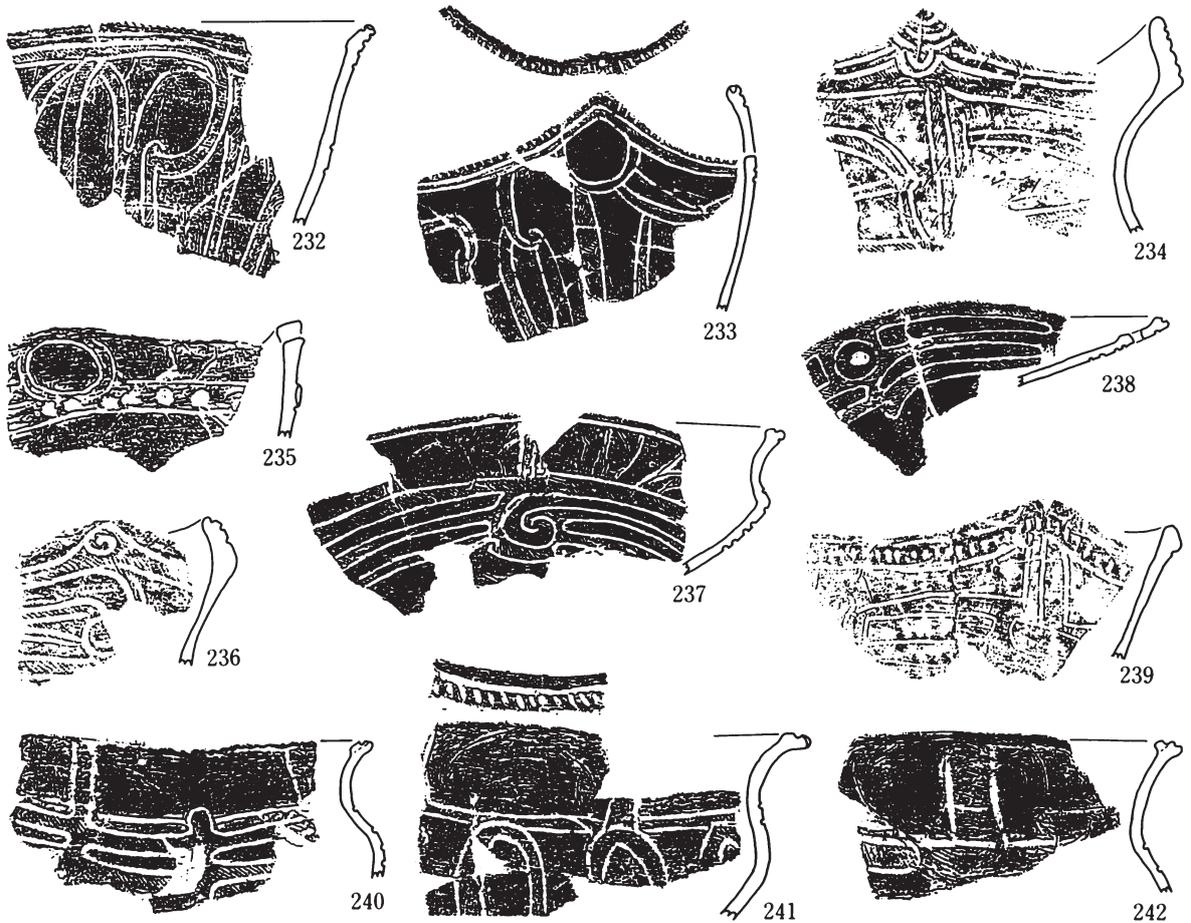
庄司ヶ市遺跡



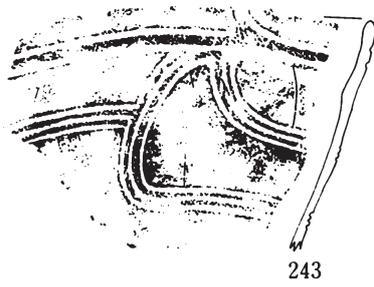
川口遺跡



松ノ木遺跡



小松川遺跡



水崎遺跡

243



244



245

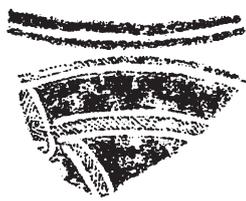


246

六軒家遺跡



247



248



249



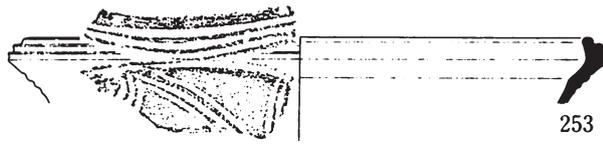
250



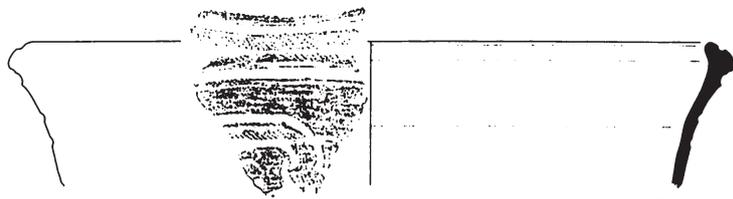
251



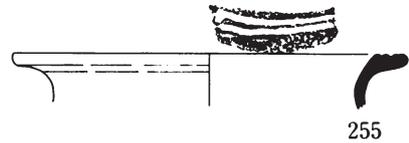
252



253



254



255



256



257



258



259



260

大浦浜遺跡

第3表 瀬戸内各型式出土状況

	宿毛式	福田K II式	松ノ木式	平城I式	縁帯文	備考
水崎	?	×				
六軒家	△	×				
叶浦	×	×				
大浦浜	●	●				松ノ木式並行△
福田貝塚	△	●	×(古)			
船津原貝塚	△	●			△	松ノ木式並行×
阿津走出		●				
津島岡大	×	●	●			
洗谷貝塚	●	●	●		×	
与浦	×					
岩田	×	△		×	×	鐘崎式×
月崎	●	●				鐘崎式×

本 1992)等を上げることができる(第26図)。舟津原遺跡は福田K II式の比率が高く、大部分が3本沈線による磨消縄文帯で鉢形の器形を呈するものが多い。宿毛式に相当するものは261, 262で宿毛式I群1類に含まれるものが若干ではあるが出土している。しかし、縁帯文成立期のもは僅かに出土しているのみで、福田貝塚と同様な展開で福田K II式の新段階で途絶するようである。阿津走出遺跡も舟津原遺跡と同様で福田K II式の新段階で宿毛式的なもの出土は認められないようである。津島岡大遺跡では福田K II式、縁帯文成立期のものが出土し、279のような宿毛式的なものに平城I式の頸部文様帯である波頭状文様、また284のように橋状把手の貼付されたものが出土しており縁帯文成立期及び平城I式の成立過程の萌芽と捉えられるものが既に福田K II式の中に存在することは注目される。

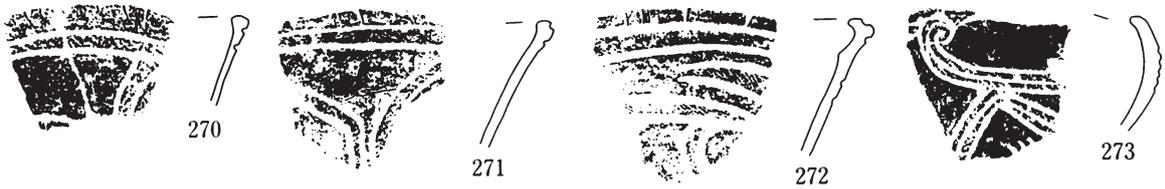
広島県で特に目を引くのは洗谷遺跡(小都 1976)である(第27図)。中津式、福田K II式・宿毛式、縁帯文成立期・縁帯文土器群の3時期がそれぞれ層位的に把握されており、福田K II式と宿毛式の並行関係が纏めた遺跡として重要である。福田K II式に含まれるものは新段階のものが多く、僅かに古段階から中段階に相当する

286が存在するのみである。宿毛式に相当するものは宿毛式I群3, 4類に含まれるものが多く、僅かに口唇に刻みを施した287が認められるものの、宿毛式に通常見られる刻みとは違い口唇を巡る沈線より内側に刻みを連続的に施し僅かに施文部位を違え、胴部文様は3本沈線による磨消縄文である。また鉢形のものが294, 295は区画文及び入組文の横位文様構成が多段に展開しているものも認められる。宿毛式の文様構成も基本的には洗谷遺跡と同様に多段の文様構成を取るものを基本とする可能性が強いものである。

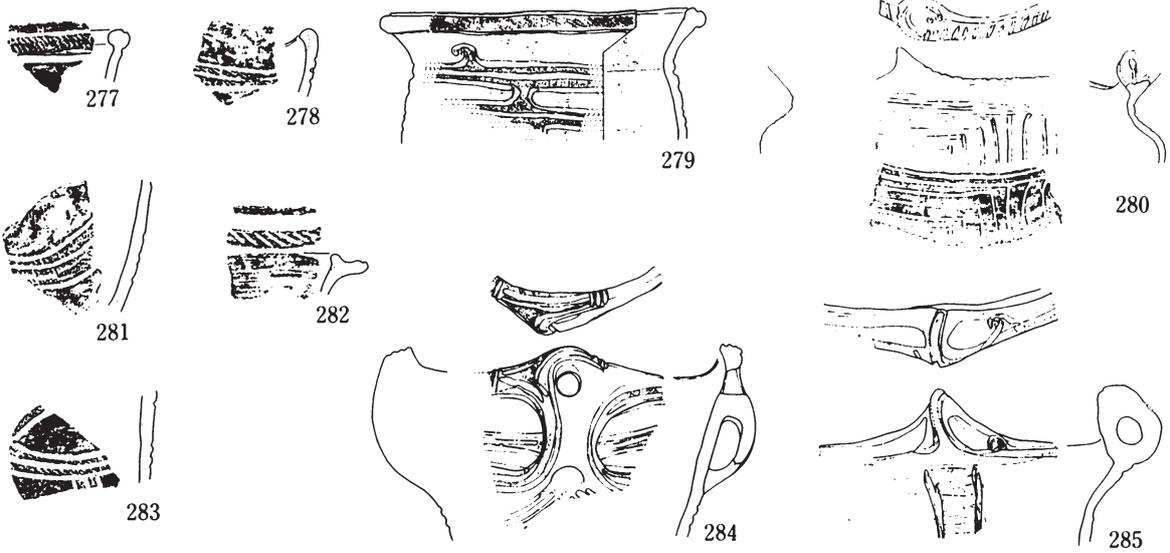
山口県の月崎遺跡(潮見 1968)では福田K II式が主体的に出土することで知られている(第27図)。福田K II式に含まれるものは新段階の範疇のもので大部分が占められており、また鐘崎式系統の土器も出土しているところから、九州大分県の西和田貝塚と比較的似た出土状況を呈しているようである。岩田遺跡(潮見 1960)では宿毛式I群2, 4類に近いもの、また8類79のものも出土しており、与浦遺跡(川越 1973)では宿毛式I群6類に含まれるものと鐘崎式及び平城I式が出土している。山口県の状況は宿毛式、福田K II式共に分布し、また鐘崎式、平城I式が後続型式として出土することが特徴であ



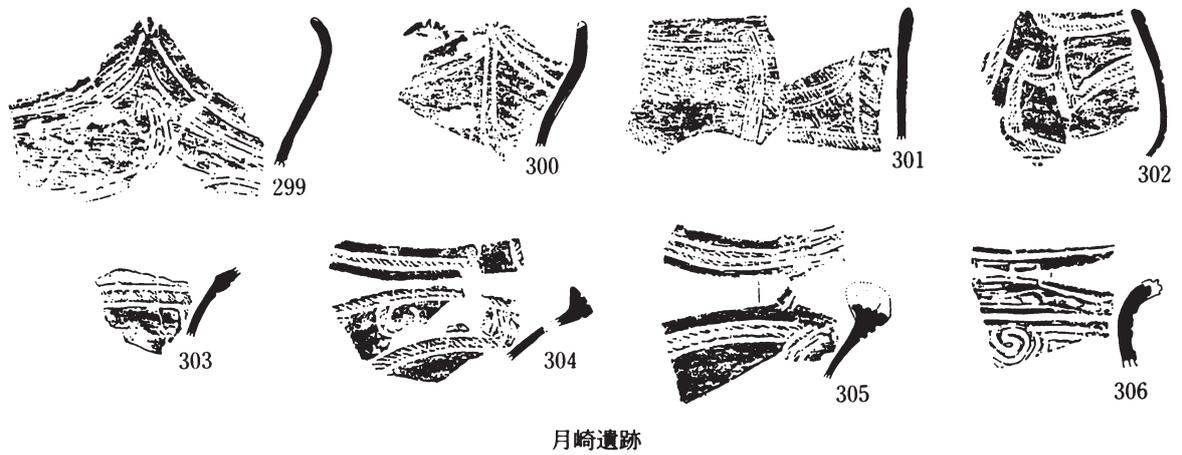
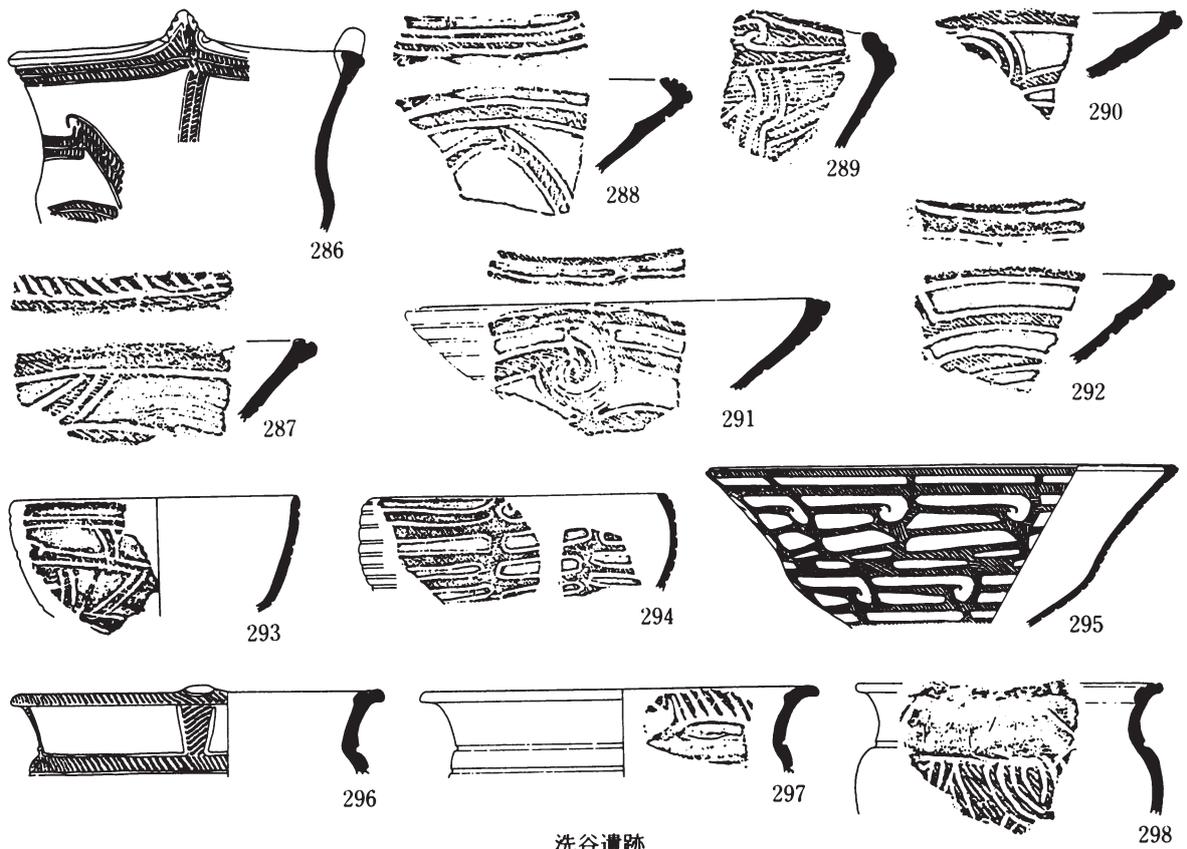
舟津原遺跡



阿津走出遺跡



津島岡大遺跡



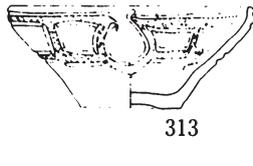
第27図 中国西部



311



312



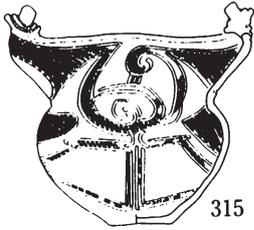
313

島遺跡



314

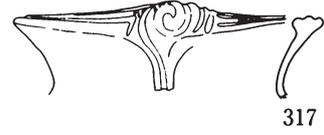
布勢遺跡



315



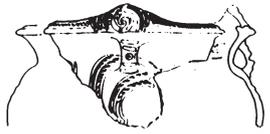
316



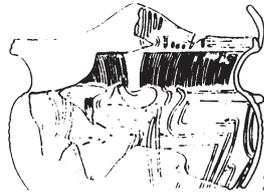
317



318



319

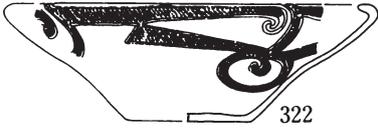


320



321

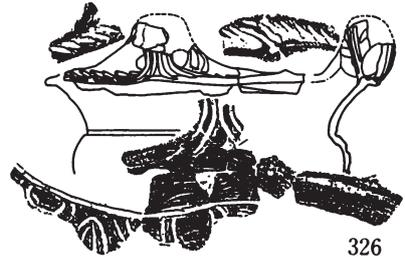
栗谷遺跡



322



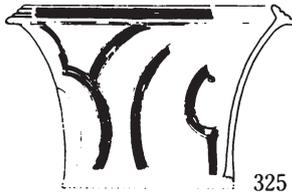
323



326



324



325



327

五明田遺跡

都橋遺跡



328



329



332



333



330



331

石ヶ坪遺跡



334

大平山遺跡

第4表 日本海各型式出土状況

	宿毛式	福田K II式	布施式	縁帯文	備考
石ヶ坪	△	△	?		阿高系×
大平山	△	?	?		
都橋	△		△		
五明田	●	●			
島	△	△	×		
栗谷	△	△	●	△	
小森岡	×	●	●	×	

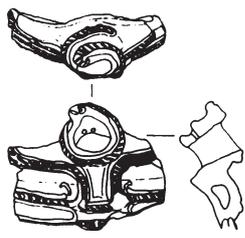
り、瀬戸内の縁帯文成立期に含まれるもの、縁帯文が少ないことである。

日本海側の鳥取、島根を見渡した場合、中津式から福田K II式を経て縁帯文成立期の布施式への変遷がスムーズに迫る地域である。その中で特に鳥取県栗谷遺跡(谷岡ほか 1989, 1990)、島遺跡(久保 1983)を上げることができる(第28図)。島遺跡では311、鉢の313の福田K II式中段階に含まれる2本沈線による曲線的な磨消縄文帯のもの、同じく新段階に含まれる312の3本沈線による磨消縄文帯のものが認められる。栗谷遺跡では中津式から縁帯文成立期の布施式に含まれる良好な資料が得られている。福田K II式古段階の315、新段階の318のように口縁部が「く」字状に屈曲した福田K II式新段階に相当する口縁部文様帯のものも存在するようである。316が僅かに宿毛式に相当するものと考えられる。

島根県五明田遺跡(田中 1991)では入山形口縁の福田K II式の古段階に相当する2本沈線磨消縄文帯のものが纏まって出土している。曲線的な文様構成で入組文を構成するものが多く、中、新段階に相当するものが数点出土している(第28図)。しかし、明確に宿毛式に含まれるものは出土していないようであり、栗谷遺跡と同様の内容を呈しているものの、縁帯文成立期に含まれるものは出土していないようである。縁帯

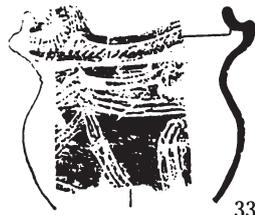
文成立期と福田K II式新段階の出土している遺跡として都橋遺跡(足立 1987)、宿毛式系統の2本沈線の磨消縄文帯のものは石ヶ坪遺跡(同)、大平山遺跡(同)を上げることができ、2本、3本沈線磨消縄文帯共に入組文となるものが多く、「三本沈線の福田K II式と二本沈線のいわゆる宿毛タイプの土器はやはり併行関係にあるとすべきで、小稿でも宿毛タイプの土器を福田K II式に含めて扱いたい」(足立 1987)としている。

中国地方日本海側を見た場合、中津式から福田K II式に至る変遷過程は中津式の2本沈線を基調にした磨消縄文帯から3本沈線磨消縄文帯の福田K II式的な土器群が出現すると同時に、全てが3本沈線磨消縄文帯に変化せず、中津式の伝統である2本沈線磨消縄文帯が後々まで残るのが日本海側の特徴である。しかし、縁帯文成立期の布施式は3本沈線磨消縄文帯を選択するようである。布施式の特徴は高知県西部の三里式とは違い口縁部主文様は渦巻き文ではなく、入組文で両脇に対弧文を配し、また橋状把手を貼付するなど特徴的である。中国地方西部ではやや状況は違い、宿毛式、福田K II式共に出土するものの、山口県では先に指摘した通り縁帯文成立期は今のところ展開しないで鐘崎式・平城I式が分布する可能性が強いと言えようである。



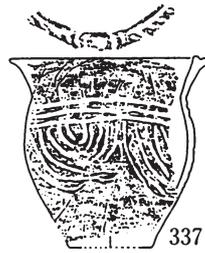
淡輪遺跡

335

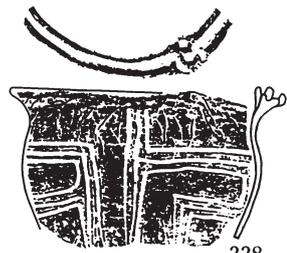


四ツ池遺跡

336

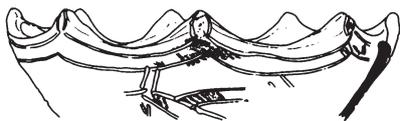


337



338

広瀬遺跡



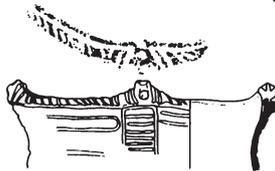
339



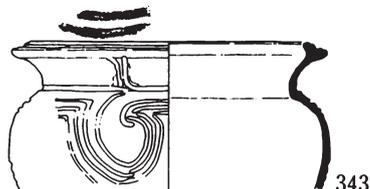
340



341



342



343

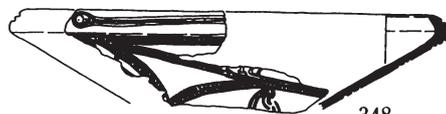


344

今安楽寺遺跡



345



348



349



346



347

桑飼下遺跡



350

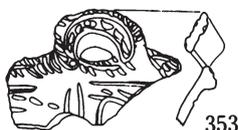


351



352

小森岡遺跡



353



354



355



356



357

右近次郎遺跡



358



359

亀川遺跡

第5表 近畿各型式出土状況

	宿毛式	福田K II式	広瀬40土坑	縁帯文	備考
桑飼下		×		●	
右近次郎	×	●		●	
今安楽寺		●	●	△	
森の宮貝塚	×		×	●	
縄手		×		●	
四ツ池		△	△		
淡輪	×			●	
広瀬			△		
亀川	×		×		

(3) 近畿地方の状況

近畿地方では宿毛式そのものといえるものは皆無に近く、兵庫県小森岡遺跡(千葉 1990 b)、大阪府淡輪遺跡(渡辺 1981, 藤永 1987)、縄手遺跡(中村 1976)、森の宮遺跡(八木・森尾 1978)、滋賀県今安楽寺遺跡(植田 1990)等が僅かに知られるのみで(第29図)、中津式段階の展開は認められるものの、福田K II式段階では余り纏まったものは認められず、その後の縁帯文成立期に再び遺跡数が飛躍的に増加するようである。今のところ、後期前半についての状況は杳として知れない。

小森岡遺跡では中津式、福田K II式から布施式にかけての変遷が見られ、2本沈線による磨消縄文帯を有するものが3本沈線磨消縄文帯の中に一定量存在し、また352は宿毛式I群1類のように刻みを施し、橋状把手を有するものも認められる。また松ノ木式に通有な口唇に刻みを連続的に施したのも認められている。布施式の範疇で把握されているものは口縁部文様帯となり口縁部を「く」字状に屈曲させ、外面か上面施文型が多く、主文様に円文と対弧文を従文様に2本沈線の区画文等を施し、頸部には梯子状文様、橋状把手を持つものが比較的多い。また胴部文様帯は縦位の曲線的な文様構成となり、2本沈線及び3本沈線の磨消縄文帯となる両方が認められ、各文様単位は福田K II式のよ

うに横位・斜位の連結は認められず、各文様単位は分離独立する傾向が強い。小森岡遺跡は鳥取県の栗谷遺跡、布施遺跡に近い内容を示している。

今安楽寺遺跡では中津式、福田K II式から縁帯文成立期が出土し、中津式の影響の2本沈線の磨消縄文帯が僅かに認められるものの、主体は福田K II式の新段階に含まれるものと縁帯文成立期のもので大半が占められているようである。布施式的なものは少なく松ノ木式と同様に口縁に刻みと2個が対になった円形の刺突を施し、頸部には梯子状のモチーフが見られる。

近畿地方の外周域で和歌山県亀川遺跡(前田 1985)、福井県右近次郎遺跡(工藤・木下 1985)が目される。亀川遺跡の358は口唇部上端を立ち上がらせ、沈線1条を巡らせた下に刻みを施し、胴部は逆「L」字状の文様を施す。胴部文様帯は松ノ木式と比較的似た文様構成を取る。また359は丸味を持った鉢で2本沈線による磨消縄文帯で横位の入組文、楕円・三角形の区画文を多段に展開している。文様構成は広島県洗谷遺跡の295に近いものであり、器形的には松ノ木式の鉢に近似し、宿毛式・福田K II式の新段階を構成する器種の1つと考えられる。

右近次郎遺跡では中津式から福田K II式が出土しており、明確に縁帯文成立期の範疇で把握できるものは少ない。福田K II式に含まれるも

のは比較的多いものの、口唇部形態は違っており、口唇部上端を立ち上がらせ、1条沈線を巡らせた下に刻みを連続的に施すもので口唇部形態は和歌山県亀川の358に近似しており、また各文様帯の分帯は発達させず、これらの特色は地域色か時期差なのか問題となろう。さらに狭義の磨消縄文帯以外に充填縄文も出現しており、関東の影響も考慮しなければならない。しかし、3本沈線の磨消縄文帯の福田K II式系統が一概に堀之内1式と時期的に並行関係にあるのかは疑問である。

(4) 九州地方の状況

九州に目を転じ大分県では小池原貝塚、西和田貝塚、石原貝塚、コウゴー松遺跡等を上げることができる(第30図)。

西和田貝塚(坂本 1979)は上層、下層に分かれ、下層の黒褐色土からは福田K II式の新段階に相当すると考えられる363は口縁部が「く」字状に曲折するものと西和田下層式とされる阿高系凹線文土器360を主体としており、明確な宿毛式に相当するものは出土していないようである。上層の貝層中からは、鐘崎I式相当の365、366等を主体とし、また従来津雲A式系統と把握されていた上面施文の367~369等も出土している。「津雲A式土器の範疇からはずすか、古式のもの」(坂本 1979)として福田K II式から瀬戸内の縁帯文の過渡的なものではないかと示唆的に報告されており、この時点で既に縁帯文成立期の一群が存在する可能性を捉えられている。但し、注意を要することは367のタイプのもは西和田貝塚では下層からも出土しており、宿毛式のI群8類79と同様のものと考えられるものの、また直接津雲A式、平城II式に系統的に繋がるかは疑問である。

石原貝塚(坂本 1979)でも福田K II式の新段階の370が出土しているものの宿毛式は認めら

れないようである。コウゴー松遺跡(賀川・橘 1974)では前半期のものが比較的纏まって出土しており、宿毛式、福田K II式に相当するもの、また貝殻施文の綾式に相当するものも出土している。また松ノ木式、平城I式、平城II式に相当するものも若干認められる。綾式に相当するものは371~373で、371は山形口縁に胴部上端に菱形区画文がみられ、2本沈線間に貝殻腹縁を連続的に押捺し、313は円形刺突を連続的に施し、宿毛式I群2類の装飾と同様の文様効果を上げている。374のような松ノ木式に相当するものが1点出土している。

福岡県で山鹿貝塚(永井・前川 1972)、黒崎貝塚(橘 1981)、貫川遺跡(前田 1988)等を上げることができる。黒崎貝塚、貫川遺跡では宿毛式I群8類の福田K II式の新段階に含まれるもので占められるようである。山鹿貝塚では375の鉢状の器形で口頸部で段状に屈曲し、宿毛式I群1類の刻みを施した磨消縄文帯を持ち、また3本沈線による入組文を形成する磨消縄文帯がみられ、宿毛式と福田K II式との融合した内容を示している。376は入山形口縁を呈し、口頸部に梯子状文様、また2本沈線の磨消縄文帯に刻みを施したものであり、福岡県では宿毛式に相当するものは認められず、福田K II式の土器の中に宿毛式の様相が取り込まれた例が認められる程度であり、明確な宿毛式の展開はないようである。またそれ以後の展開としては鐘崎式を主体とし、小池原上層式は認められるものの、貫川遺跡等では平城II式・津雲A式に相当する縁帯文土器群の展開は認められないようである。

先の研究史の中で取り上げた宮崎県東諸県郡綾町尾立遺跡の綾式について若干触れておきたい(第30図)。綾式は後期前半のものとして綾A式、綾B式として分類されているものの、現在

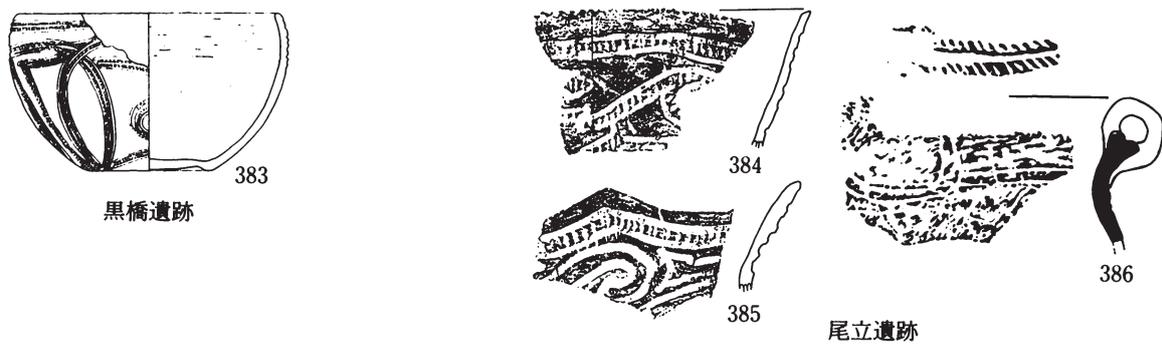
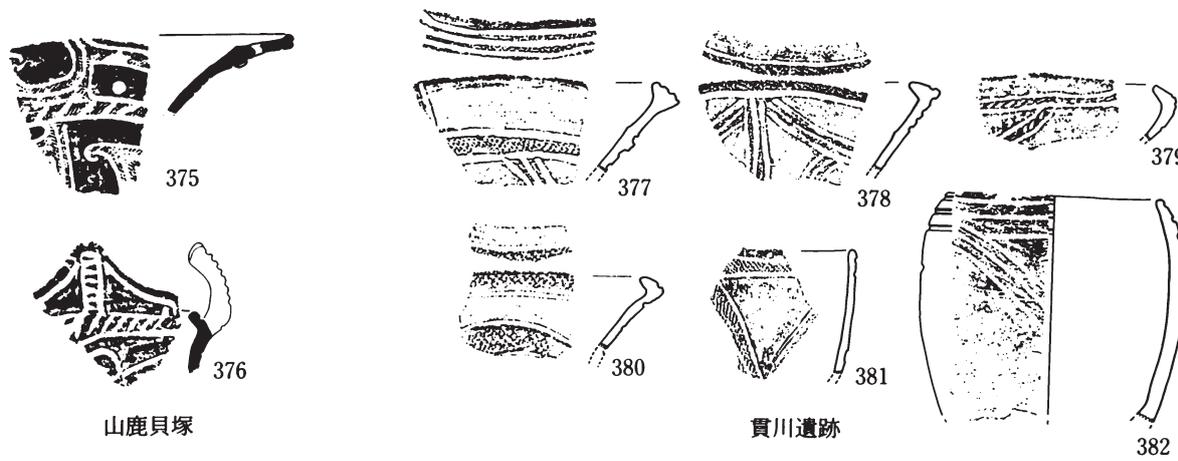
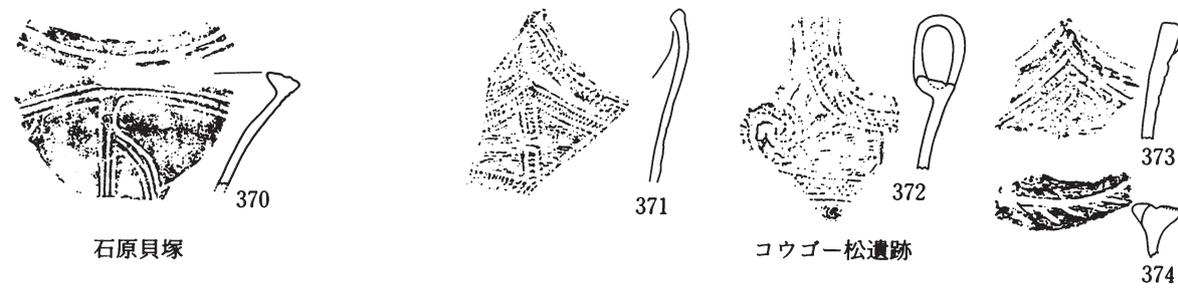
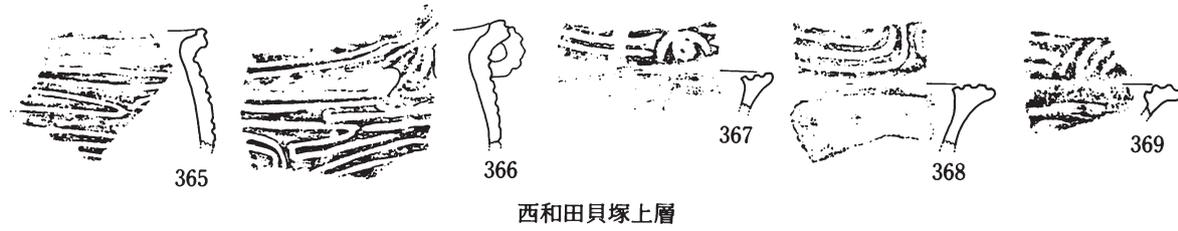
は一般的にA、B式共に同一型式と認識されているようであり、ここではただ単に綾式と呼称しておきたい。綾式の特徴は貝殻腹縁の押捺と擬縄文にあり、384、385に見られるように2本沈線間に貝殻腹縁の押捺を施すものであり、宿毛式I群1類の刻みまたは同2類の貝殻頂部の回転押捺と装飾的に近似したものである。しかし、口唇部は宿毛式ようにくびれることなく、直線的に立ち上がり、口唇部に文様を施すものは比較的少ないようである。宿毛式I群2類21は貝殻頂部の回転押捺と擬縄文を施したものが綾式に近い様相を顕しているようである。386は綾式の中で、口縁部を拡張し上面に沈線を1条巡らせさらに刻みを連続的に施し、松ノ木式の耳状突起に近い突起を貼付したものが認められる。これについても小池原下層式と同様のものであり、縁帯文成立期直前のものとして把握できよう。南九州に於ける磨消縄文系の土器の展開は極めて稀であるものの、宿毛式と綾式の変化はどちらがどちらに影響を与えたかの議論は抜きにしてもやはり相同的なようである。

九州では豊後水道を隔てた大分県を除いて宿毛式の展開は稀薄であり、小池原貝塚で小池原下層式として展開し、縁帯文成立期直前までの展開は宿毛貝塚と相似的であるものの、それ以降の宿毛貝塚では小池原上層式に相当する平城I式の大きな展開が認められない相違点を有する。西和田貝塚では下層からは阿高系凹線文土器、福田KII式の新段階の土器群、上層から鐘崎式系統の土器が比較的纏まって出土しており、小池原貝塚の下層と比較した場合、小池原下層式には阿高系凹線文土器が認められず大分県内でも地域差が認められる。しかし他の点については相似的な面が強い。大分県については瀬戸内系の磨消縄文系土器群は福田KII式の新段階にその展開が認められ、他の地域を見ても

熊本県黒橋貝塚(西田 1976)等にも福田KII式新段階に相当するものが出土しているものの、やはり散発的であると同時に客体的である。

その後、小池原上層式の磨消縄文系の土器群に引き継がれ、また瀬戸内、西南四国に対峙する鐘崎式系統の両系統の双極が同時に展開するようである。それは小池原上層式に認められるところである。小池原上層式以降については、平城II式に相当する縁帯文土器群が小池原貝塚に欠落していることは注意を要する。つまり、小池原下層式と小池原上層式とに連続性を認める解釈と、小池原下層式と小池原上層式の間の一型式存在するとし下層式と上層式に連続性を認めない解釈がある。後者にはさらに2つの見解があり、瀬戸内を中心とする縁帯文成立期が介在するとする理解と、下層式と上層式の間平城II式・津雲A式が入るとする2つの見解がある。第1の見解は平城I式(小池原上層式)とが縁帯文成立期と並行関係にあるとする編年観である。第2の見解は平城I式(小池原上層式)と縁帯文成立期(松ノ木式)を時期差と見る理解であろう。第3の見解は平城II式が平城I式より古く見る編年観である。

第3の見解については成立しないことは既に述べた(前田 1993b)。ここでは東九州の出土状況を若干補足しておきたい。貫川遺跡では小池原貝塚と同様の出土状況を呈し、また小池原貝塚のすぐ近傍の横尾貝塚(賀川・橘 1965, 前川 1979)では外面施文の平城II式・津雲A式に相当するものが比較的纏まって出土していることは、小池原貝塚での貝塚形成の解釈に大きな糸口を与えているものと考えられる。大分県側での平城II式に相当する縁帯文土器群の展開は稀薄であるものの、横尾貝塚の例を考慮すると小池原下層式と上層式は連続するものと解釈する方が妥当であろう。さらに寺の前遺跡(田中・松



第6表 九州各型式出土状況

	阿高系	小池原下層式	福田K II式	小池原上層式	鐘崎式	縁帯文	備考
山鹿貝塚		△		×	●	×	
黒崎		×	×	×	●		
貫川	×	△	×	●	●		
西和田貝塚	●	●	×		●		
石原貝塚	△		×				
小池原貝塚		●	×	●	●		松ノ木式×(古)
コウゴー松	●	●	×	●		△	松ノ木式×、綾式×

永 1981)では福田K II式新段階、小池原上層式(平城I式)、鐘崎式、平城II式の縁帯文が継続的に出土しており各型式の消長を考えた場合、やはり小池原下層式と小池原上層式は連続する型式であり、両型式の間に平城II式的な縁帯文土器群の介在する余地はないであろう。

第2の見解については、小池原下層式に見られる縁帯文成立期的なものを松ノ木式と並行と見るか、過渡的な一群とするかに解釈の岐路があるものと考えられる。また縁帯文成立期の土器群が九州にも展開すると考えるかである。九州では今のところ松ノ木式に相当する縁帯文成立期の土器群が纏まって一遺跡を形成するものは皆無であるところからも、縁帯文成立期の土器群は九州では異系統である可能性が強い。平城I式(小池原上層式)と縁帯文成立期との関係については後述する。

7. 宿毛式の派生

松ノ木式、平城I式は共に宿毛式を母体として派生したと考えられ、松ノ木式と平城I式の文様帯の共通性は既に前稿で比較検討した(前田 1993b)。ここでは前段階の宿毛式から松ノ木式及び平城I式がどのように双生するかを見てみたい。宿毛式は口縁部の発達・拡大はみられず口縁部文様帯を持たず、口唇部文様帯とも呼べるもので口唇部が未発達で沈線を2条巡

らせる程度の文様帯である。宿毛式の口唇部文様帯には2本沈線間に縄文を施文したものとさらに連続的に刻みを施したものがあり、前者が平城I式に後者が松ノ木式に引き継がれたものと推察でき、また各文様帯の系譜がどのようなプロセスを経て変遷をしたのか追ってみたい。また山陰に主分布圏を持つ布施式についても合わせて若干触れて置きたい。

(1) 松ノ木式の成立過程

松ノ木式の中で古相と考えられる第24図226・227は口唇部文様帯ではなく、口縁部を拡張したもので縁帯文成立期土器の様相を呈している。口縁上端には沈線を1条巡らせ、その外側に宿毛式の刻みよりやや長い短沈線と呼べる連続の刻みを施してはいるものの、下端の沈線もまだ残存させている。頸部も未発達で胴部文様帯との一体化を読み取れる。宿毛貝塚のI群9類土器に極めて近いものとして把握できよう。福田K II式の第31図7も口唇部を拡張し、沈線1条と連続の刻みの短沈線を施し耳状の突起を付す。また綾式の第30図386も同様のものである。第31図7は口唇部下端に3本沈線の磨消縄文帯と頸部の垂下沈線は連結しており、松ノ木式の第31図9は第24図227,第31図7よりもさらに縁帯文化の過程にあり、頸部の発達がみられる。口縁部文様帯の下端の沈線は省略され、口縁部上面は227と同様ではあるが、さらに刻み

が大振りとなり斜行の連続の短沈線と変化していることを読み取れる。

この変化は宿毛式からも追える。頸部の発達しない段階での宿毛式 I 群 1 類の 1, 2 では、口頸部に杵状の長楕円と円形の区画文が交互に配され、口唇部下端の沈線と胴部の沈線を連結して区画文が形成されている。縁帯文成立期の松ノ木式段階では口縁部文様帯の発展に伴い、宿毛式段階の口唇部下端の沈線の省略から、頸部文様帯の区画文は口縁部と連結するべき沈線の消失により、独立した頸部文様帯となったものと考えられる。また広島県洗谷遺跡の第27図296が典型的な例で、胴部の沈線から頸部に跳ね上がり口縁部との連結が途絶えてしまっている。津島岡大の第26図285の頸部の梯子状文様、小森岡遺跡の橋状把手上の梯子状文様第29図352も、筆者の前稿で指摘したように福田K II式の口頸部にみられる梯子状文様第18図140からの発生に求められることと軌を一にしたものである。これは口縁部施文域の拡大・拡張と解釈でき、また口縁部下端の沈線が消失しているのは、口縁部の拡張に伴いただ単に省略されたものと言えよう。つまり、縁帯文成立期の頸部文様帯は口縁部の拡張に伴い、宿毛式・福田K II式の口唇部下端の沈線を省略させ、頸部文様帯として発達させようとの意図の元に独立したものとなった結果と考えられよう。宿毛式から松ノ木式への変遷は詰まるところ、口唇部文様帯から口縁部文様帯に変化することにより、口縁部を拡張し宿毛式にみられた短い直行の連続の刻みから、斜行の連続の短沈線に変化し下端の沈線が省略されたと言える。

松ノ木式の胴部文様は逆L字状の縦位の文様区画に特徴を持つ。第24図226・227のように縦位の逆L字状文は、宿毛式には求められず宿毛式は横位の杵状の区画文を主流とし、福田K II

式系統の曲線的な入組文のものが認められるものの、宿毛式・福田K II式からダイレクトに胴部文様の変遷は追えないようである。宿毛式の福田K II式系統と福田K II式の胴部文様構成は磨消縄文帯の幅が狭く、第31図6のように曲線的な縄文帯の連繋にあり、J字文を採用するものにしてもJ字文を他の文様と連繋するものの、一方松ノ木式の第31図8にみられる文様構成は連繋が切り離され、各モチーフが各々分離独立する傾向にある。松ノ木式の沈線文の浅鉢についても同様の流れがある。そしてまた磨消縄文帯の幅が広がるなどの相違点を見てとることができる。福田K II式のように沈線端部が離れ入組文化するものも比較的減少し、広島県芋平遺跡、和歌山県亀川遺跡（第29図358）等に同様の文様構成を採るものが散見される。229は他の松ノ木式と同様に土器捨て場からの出土であり（前田 1993 a）、松ノ木式に伴うものの松ノ木式でも古相の範疇に含まれるものである。229は内面が宿毛式の鉢にみられるような段状の突出を有し、胴部に逆L字状文を施し、沈線自体は松ノ木式の逆L字状文とはやや違い幅が狭く曲線的に描かれており、こうした文様構成を採るものが松ノ木式そのものに既に存在する。その前段階には愛媛県側の小松川遺跡に第24図233の入山形口縁のもの、232の平縁で胴部文様帯が2本沈線の縦位の文様モチーフのものが存在し、こうしたものが直接松ノ木式の胴部文様帯に影響を与えた可能性が強い。つまり、福田K II式的なものが小松川遺跡を経て松ノ木式の成立に関わったと考えられる。

松ノ木式で新相段階と考えられるものは、第31図10で頸部無文帯は大きく発達し、胴部文様は蕨手状の入組文で、狭義の磨消縄文ではなく、充填縄文であるところが特徴的である。松ノ木式のその後の展開は目下のところ不明である。

(2) 平城Ⅰ式の成立過程

平城Ⅰ式については、宿毛式の刻みを持たない口唇部文様帯（第7図39等）からの変化にあり、口唇部の上端を上方向に上げ、宿毛式の下端の沈線を松ノ木式と同様に省略を施す。その結果、平城Ⅰ式と松ノ木式は沈線の外側に縄文帯を設けるものと連続斜行の短沈線を施すものに分かれるものの、共に下端の沈線の省略に共通の特徴を見てとれる。

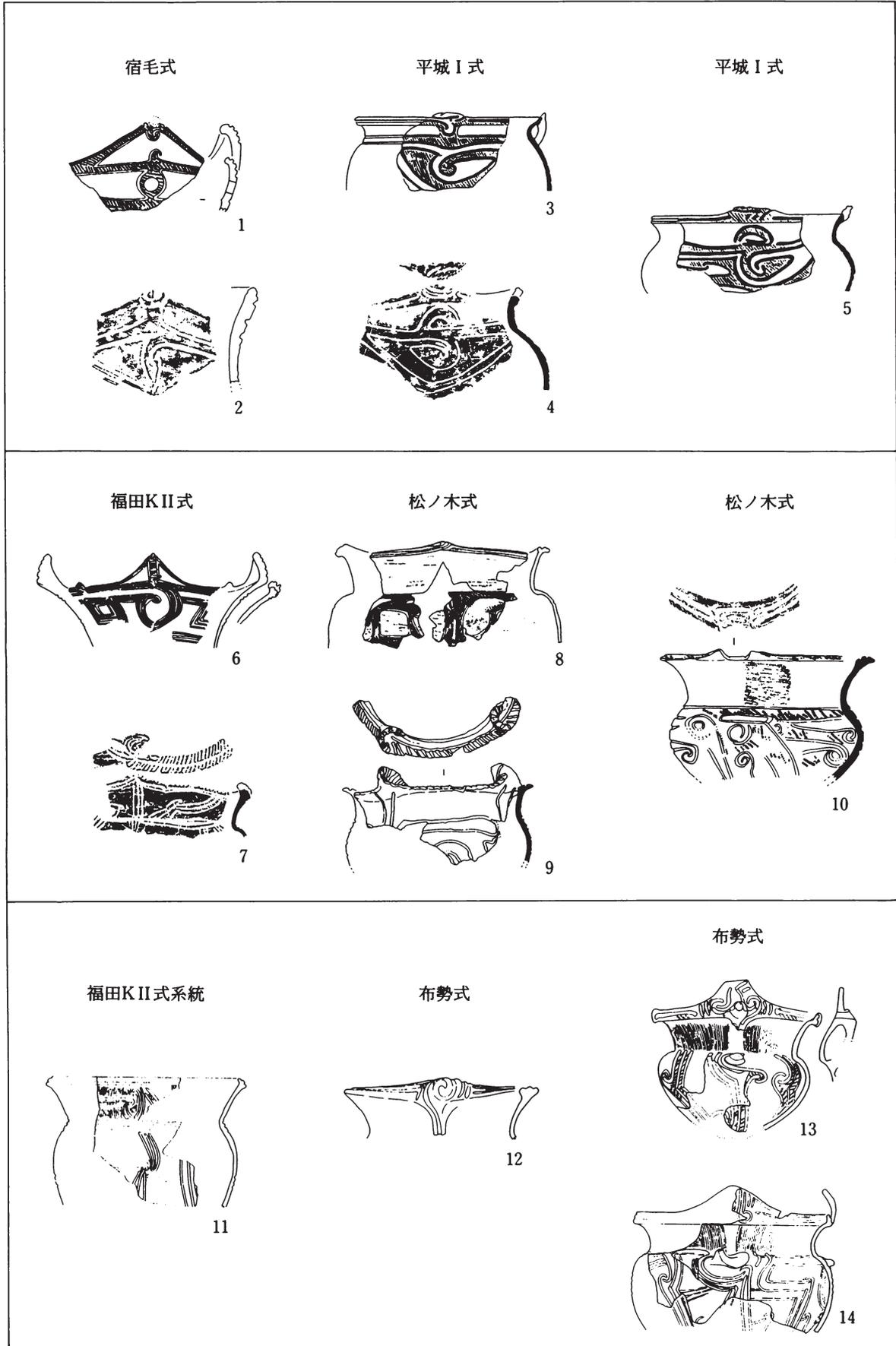
しかし、平城Ⅰ式が松ノ木式程の口縁部文様帯を形成しないのは、九州の鐘崎式の影響が縁帯文土器化が稀薄だったと考えられ、平城Ⅱ式の段階に至るまで本格的な縁帯文化、口縁部文様帯の形成は待たなければならないようである。平城Ⅰ式は本質的には口唇部文様帯であるが、瘤状突起部分の主文様部分に限って口縁部文様帯を選択している。平城Ⅰ式の段階では列点状刺突の加飾に留まり、縁帯文化するやいなや口縁部内面にまで「内文」の発展が一挙に進み、口縁部施文域の拡大が行われるようである。津雲A式には内文の発達は見られず、平城Ⅱ式の内文の発達に限って言えば、津雲A式からの影響は認められず、平城Ⅰ式の瘤状突起に沈線が絡みつくものからさらに口縁部施文域の拡大の結果と考えられる。

平城Ⅰ式から平城Ⅱ式に変遷し内文の出現は、端的に言ってしまえば「縁帯文」と呼称される名の通り、口縁部の拡張と文様帯の集約にあると言える。口縁部の拡張にあるものの、ただ単に口縁部を拡張するだけでなく、文様施文域そのものの拡大・拡張にあると言える。また弧線文・列点状刺突文にみられるような加飾の増大にあり、文様施文域の拡大・拡張の過度の進展から口縁部に納まり切らない文様施文の結果、「内文」と呼ばれる文様帯の出現が生じたものと考えられる。平城Ⅱ式の段階に至って頸

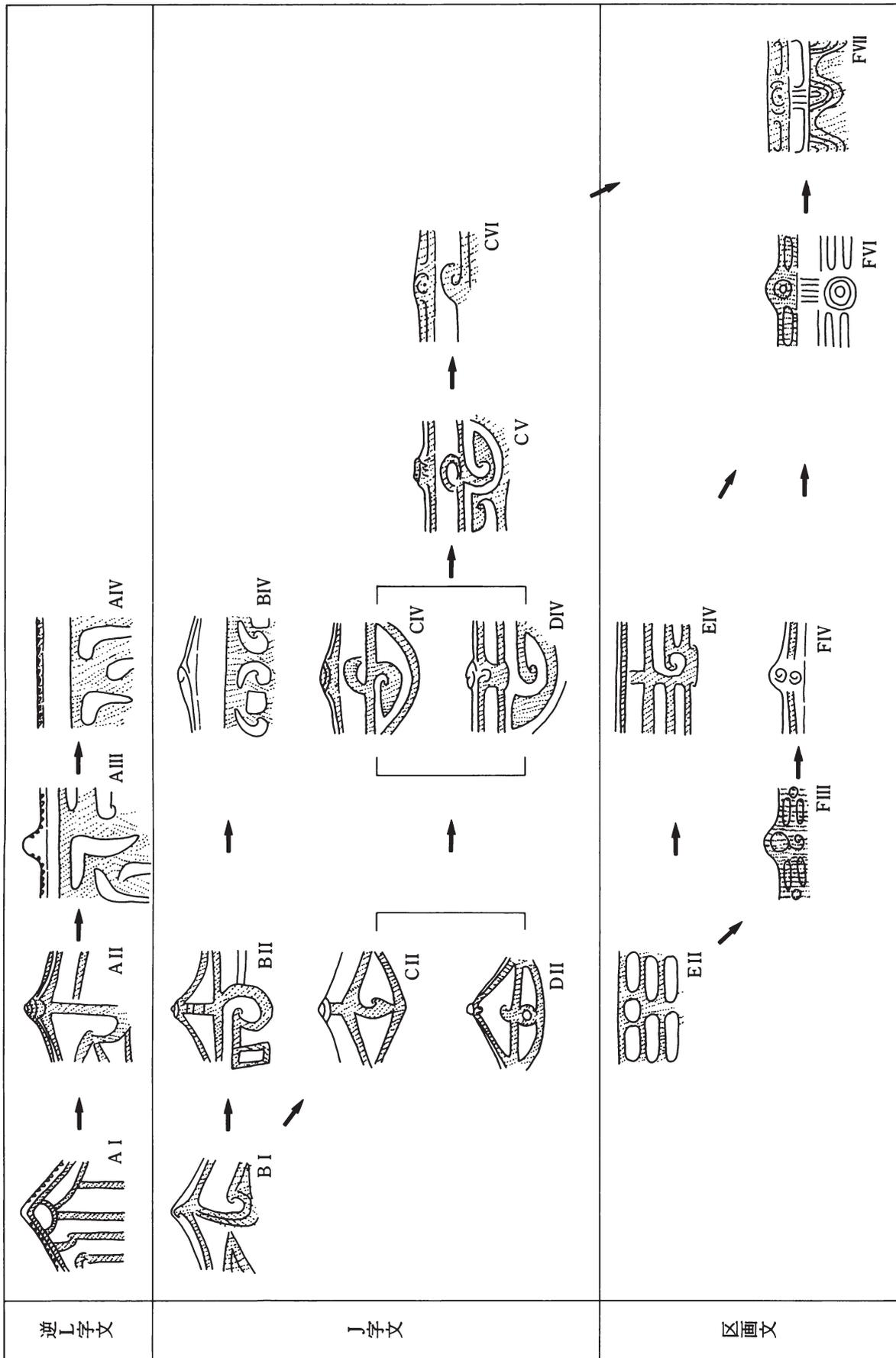
部が大きく発達することからしても、口縁部、頸部、胴部と各文様帯が各文様帯として分帯し系統的に変化するものと考えられる。

頸部文様帯については、第31図3のように橋状把手の貼付により頸部に区画文を意識したものとなっているものの、第31図4では口縁部の下端の沈線の省略により、頸部文様帯の波頭状文様は口縁部と繋ぐべき沈線の消失から口縁部との連結は途絶してしまい、胴部から繋がる沈線により頸部への跳ね上がりの波頭状文様となったか、宿毛式第31図1の波頭状文様に直接求めることもできる。平城Ⅱ式についても口縁部の沈線からの垂下の痕跡は認められず、やはり平城Ⅰ式と同様に本来口縁部と連繋するべき沈線が切り離されて頸部文様帯を形成したものと言えよう。

胴部文様帯については宿毛式のⅠ群2類の第31図2、及びⅠ群4類の第31図1、また福田KⅡ式の第18図140にもその系譜を求めることができる。第31図4は宿毛式の第31図2にその系譜を求めることができる。第31図2は菱形の区画文の中にJ字文を配しており、平城Ⅰ式の第31図4も同様であることは自明の理である。第31図2の他の部位についても口唇部にはソフトクリーム状に沈線が絡みつく突起と、胴部のJ字文を配した菱形区画文を連繋する磨消縄文帯がみられ、それぞれが平城Ⅰ式の第31図4の口縁部の瘤状突起、頸部の波頭状文様に対応することは簡単に読み取れる。松ノ木式の第31図8にも口縁部に沈線が絡みつくものが平城Ⅰ式の瘤状突起と共通項であることを読みとれ、第31図9の頸部の垂下沈線も平城Ⅰ式の波頭状文様と形成過程は同一である。平城Ⅰ式は宿毛式の中でも福田KⅡ式系統の4類第31図1は、菱形区画文に「O」字文であるものの、口頸部に平城Ⅰ式と同様の波頭状文様が認められ、また口



第31図 宿毛式から平城I式・縁帯文成立期への変遷



第32図 文様帯変遷模式図 (小松川; A I・A II・E IV、松ノ木; A III・A IV・B IV・F IV、福田; B I・B II、宿毛; C II・D II・E II、平城 I; C IV・D IV・C V・C VI、三里; F III、平城 II; F VI・F VII)

縁波頂部に絡みつく沈線は平城Ⅰ式の口縁の瘤状突起にそれぞれ対応している。それ以外に平城Ⅰ式は宿毛式の中でも福田Ⅱ式系統の４類、及び浅鉢のJ字文の入組文を選択し、松ノ木式以上に入組文を多用する。菱形区画文を採らないものは福田Ⅱ式系統と同様に各文様帯を独立させず、J字文等が曲線的な磨消縄文帯で横位の連結を保ったままである。平城Ⅱ式についても、やはり基本的には波状または流れるような入組文の横位連結文を繰り返すようである。

平城Ⅰ式は宿毛式と同じく狭義の磨消縄文であり、赤彩を多用する。また松ノ木式と同様に磨消縄文帯の幅が広がり、沈線自体も松ノ木式よりも丁寧なまま幅が広い。宿毛式の段階では沈線の幅が狭いものの、平城Ⅰ式段階での沈線自体の広がりには九州の阿高系統の影響の可能性があり、また若干であるが阿高系には入組文が認められる。また松ノ木式は第32図AⅢ、AⅣ・BⅣの段階で磨消部分と縄文施文部分の反転現象が起り、平城Ⅰ式の第32図DⅣでも同様の現象が認められる。

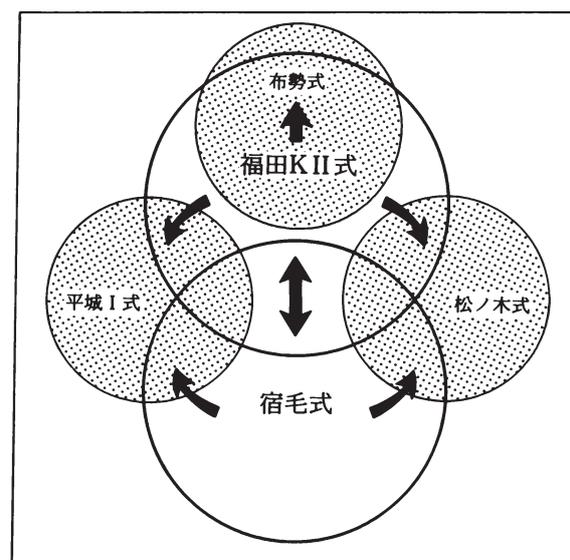
第31図5は口唇部文様帯に列点状刺突等の加飾の増大が見られ、第31図3・4より平城Ⅰ式の中では新相段階に含まれるものである。小池原貝塚の小池原上層式は比較的にこの段階のものが多いように見受けられる。胴部文様は松ノ木式では充填縄文に変化するものの、平城Ⅰ式は依然として狭義の磨消縄文であり、充填縄文は平城Ⅱ式段階に至らないと出現しないようであり、地域差が認められる。また縁帯文の展開する地域とは違い、頸部の発達には認められず、頸部文様帯を残存させたまま、平城Ⅱ式段階になって初めて頸部無文帯は大きく発展し、口縁部文様帯は出現する。松ノ木式の逆L字文は小松川式からの系譜を引くものであり、また平城Ⅰ

式のJ字文は宿毛式から追えるものである。

それ以外に宿毛式には口頸部に区画文が発達し、三里式への変遷が追えるものである(第32図)。第32図EⅡから三里式のFⅢの口縁部に円文と楕円区画文は平城Ⅱ式のFⅥを経てFⅦの縄文地に直接沈線で波状のモチーフを描いたものへと変化する。

(3) 布施式の成立過程

松ノ木式、平城Ⅰ式以外に主に山陰地方に分布圏を持つ布施式については、口縁部文様帯は別方向の展開を見せるようである。布施式は松ノ木式と同様に口唇部文様帯を脱却し、口縁部文様帯に変化を遂げるものの、松ノ木式のように連続の斜行の短沈線の刻み手法を取らず、鳥取県栗谷遺跡出土の第28図319のように福田Ⅱ式からの口唇部文様帯の変化に求めることができる。口縁部主文様部位に弧線文、渦巻き文を施し、頸部を発達させ橋状把手を貼付するものである。第31図14についても319と同様に福田Ⅱ式に口縁部文様帯は既に用意されている。第31図14については口縁部文様帯に平城Ⅰ式にみられた列点状刺突の加飾と同様であり、頸部



第33図 宿毛式の派生概念図

には部分的に欠損しているものの橋状把手を貼付しているようである。また、一方で布施式には第31図13のように平城Ⅰ式と同様に沈線1条を巡らせ外側に縄文を施し、下端の沈線を省略した口唇部文様帯に極めて近似したものも存在するようである。第31図13の頸部についてもやはり橋状把手を貼付していたようであり、平城Ⅰ式と相似的な成立過程を示していると言える。

胴部文様帯については福田Ⅱ式からの系譜が辿れ、第31図13は縦位の曲線的な3本沈線による入組文を形成し、松ノ木式と同様に各文様単位は連繫することが少なくなるようである。また鳥取県島，布施遺跡等の福田Ⅱ式の流れの強い地域については、栗谷遺跡の第31図13のように胴部文様の上端が開放されるものが多く、これは福田Ⅱ式の各文様帯が分帯し、宿毛式の口唇部下端の沈線が省略されたと同様に、第18図149・150の口縁部文様帯の下の縄文帯が省略された結果、縁帯文成立期の土器群の胴部文様帯の上端が開放されたままになったものと考えられる。

8. まとめ

(1) 各時期の様相

西日本に於ける後期前半は磨消縄文系の中津式を契機として、その磨消縄文文化の波及と在地化にあるといえる。西日本の縄文後期前半を福田Ⅱ式を指針にして福田Ⅱ式の古段階をⅠ期、中段階をⅡ期、新段階をⅢ期とした場合、中津式からの磨消縄文が福田Ⅱ式に継承されたⅠ期の段階では、中国地方日本海側、広島県洗谷遺跡等に見られるように、成立当初、2本沈線の磨消縄文帯を主体とする。宿毛貝塚では前段階の中津式の展開は今のところ擱めておらず、また周辺地域でも纏まって出土する傾向は

顕著ではなく、宿毛式への継承展開は判然としていない。宿毛貝塚周辺域で中津式を出土する遺跡としては、下益野遺跡、片粕遺跡、三里遺跡、庄司ケ市遺跡、岩谷遺跡等が知られている。中でも下益野遺跡は後期初頭の下益野式の標式遺跡(岡本 1968)となっているものの、その内容は中津式に近く西南四国の独自性といったものは余り認められないようである。中津式から宿毛式への変遷は今のところ具体的に把握できないのが現状である。かつて今村(1977)が宿毛式に言及したように宿毛式の全てが中津式から福田Ⅱ式の移行的段階に含まれるものではなく、宿毛式Ⅰ群6類が該期に含まれる以外はⅠ期に含まれる土器群は存在しないようである。6類は中津式と同様に口縁部無文帯を形成し、宿毛式独自の口唇部がくびれるものとはならず、幅の広い狭義の磨消縄文帯を採用している。しかし6類の宿毛式に占める割合は少なく、Ⅰ期については稀薄と言わざるを得ない。

Ⅱ期で福田貝塚及びその周辺域では3本沈線の磨消縄文帯の出現を見る。しかし、それ以外の地域では2本沈線の磨消縄文帯は独自の展開を取る。山陰地方、近畿地方でも2本沈線の宿毛式的なものと福田Ⅱ式的なものが同時に展開する。宿毛貝塚に於けるⅡ期の展開は、3本沈線の磨消縄文帯を採用しないものの、その文様構成は曲線的な入組文による福田Ⅱ式系統の影響が認められ、片や宿毛式独自の横位の区画文、刻み手法を採用する一群のものが対峙するような形で存在する。宿毛式Ⅰ群の大部分が該期に含まれる。Ⅰ期と同様に磨消縄文は狭義の磨消縄文で、磨消縄文帯の幅が狭くなるのが特徴である。口唇部文様帯となり、口唇部がくびれ、口頸部に区画文が発達し、中には菱形区画文の文様構成のものも認められる。胴部文様はJ字文、「O」字文、入組文を多用し、福田Ⅱ

II式と同様に各文様を連結するのが特徴である。周辺域でも同様のものが認められ、九州側では小池原貝塚等に僅かにその展開が認められる程度で、磨消縄文系は依然主体となりえず、阿高系が独自に展開する。

III期に至って九州地方では福田K II式の侵入が認められ、阿高系凹線文の中に磨消縄文系土器群が客体的に展開する。宿毛貝塚でもこの段階に至って福田K II式を直接取り込み、次なる縁帯文成立期の前夜を迎えることになる。宿毛貝塚・福田貝塚の両遺跡共に縁帯文成立期直前で終止符を打つものの、縁帯文成立期の萌芽を孕んでいる。福田K II式、宿毛式は独自性を持つものの、しかし、間接的な相互影響下にあり、比較的相同的である。しかし、縁帯文成立期は各地域の在地化が進展し、多様性を持つ。その多様性は福田K II式、宿毛式の中に内在する癖といったものを取り込み、また選択し、尚且新たな要素の添加に縁帯文成立期の特徴を読み取れる。このIII期の段階に松ノ木式の古相(第35図227)、三里式(同188)と小池原下層式(同162・165)の一部が含まれよう。宿毛式の中には松ノ木式、平城I式の要素が既に存在するばかりではなく、また三里式も存在し、縁帯文成立期の土器群は福田K II式、宿毛式の両系統の土器群からその変遷過程が追えるものである。

IV期は瀬戸内を中心として縁帯文成立期の土器群が展開する。松ノ木式の大部分が該期に含まれる。広島県洗谷遺跡等の中国地方西部、南四国中央部に展開する松ノ木式は宿毛式・福田K II式から変遷が追える。

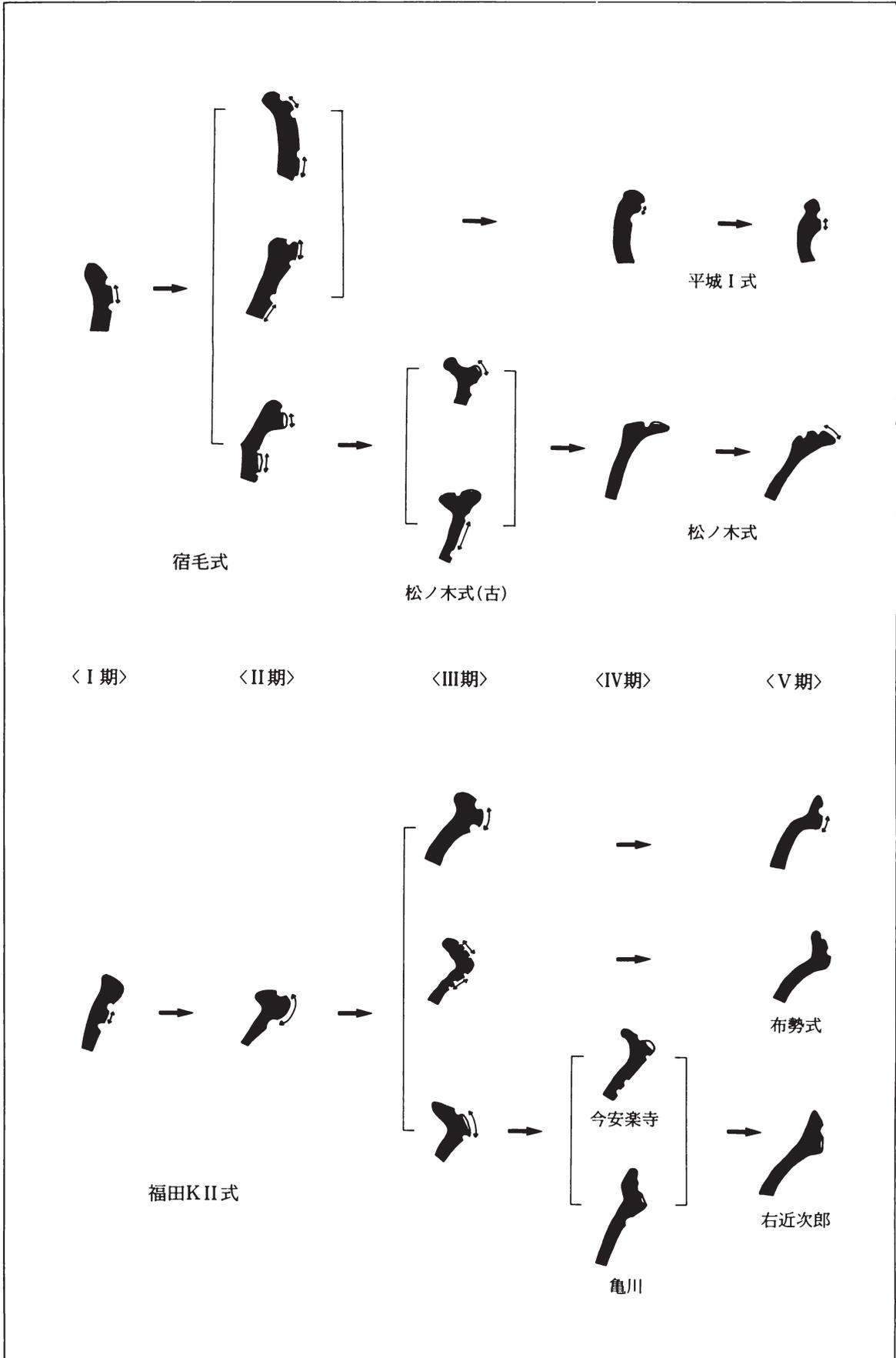
平城I式は古相段階のもの(第35図184・187)が該期に含まれる。口縁部文様帯については、西日本の磨消縄文系の土器群の全てが縁帯文化するわけではなく、口唇部文様帯のまま推移するものが外周域で多く認められる。その範疇に

第7表 時期別消長(※注:一多量、一少量、…微量)

	I期	II期	III期	IV期	V期
小池原貝塚					
宿毛貝塚	……				
平城貝塚		……			
松ノ木遺跡					……
福田貝塚					

平城I式も含まれ、平城I式の口唇部は内面もくびれたような器形を呈し、先に見てきたようにそれは宿毛式の一系統から追えるものである。また福田K II式に相当する岡山県阿津走出遺跡の第26図276も既に口唇部内面がくびれるなど平城I式と同様の口唇部形態を有するものである。近畿地方の外周帯である福井県右近次郎遺跡等では縁帯文の特徴である口縁部文様帯を選択することなく、第29図356のように頸部無文帯が発達するものの、口縁部文様帯とはならず口唇部文様帯であり、主文様部分のみに弧線文、対弧文のモチーフを施す類例が多く、また第29図354のようにやはり口唇部文様帯で頸部無文帯が発達しないものが多く出土している。松ノ木遺跡でも同様の第24図224が認められる。口唇部上端を平城I式と同様に上方向に立ち上がらせ、刻みを施す手法は堀之内I式の影響が強く胴部文様帯については3本沈線であるものの、瀬戸内地方に分布する福田K II式とは時期的にも隔たりがあるものと考えられる。

V期には平城I式の新相段階(第35図185)が含まれる。平城I式については口唇部文様帯は容易に解消されることなく、平城I式の新相段階に至っても、口唇部文様帯のまま推移する。しかし、古相段階に較べ口唇部文様帯とも言えども列点状刺突を付加するなど加飾が進展する傾向にある。中国地方の日本海側から近畿地方の外周域では、福田K II式を母体として布施式が



第34図 宿毛式から平城 I 式・縁帯文成立期への口唇部変遷

第8表 磨消縄文系土器群の編年対比表

	西南四国	東九州	四国中央部	瀬戸内	日本海
I 期	宿毛式 I 群 6 類		(小松川遺跡)	福田 K II 式(古)	(五明田遺跡)
II 期	宿毛式(中)	小池原下層式	宿毛式(中)	福田 K II 式(中)	福田 K II 式(中)
III 期	宿毛式 I 群 8・9 類	小池原下層式	松ノ木式(古)	福田 K II 式(新)	福田 K II 式(新)
IV 期	平城 I 式(古)	小池原上層式	松ノ木式(中)	(洗谷遺跡)	(布施式)
V 期	平城 I 式(新)	小池原上層式	松ノ木式(新)		布施式

成立し、縁帯文の展開する瀬戸内地方でも、縁帯文成立期の段階を経て縁帯文の特徴である口縁部に文様集約化が顕著となり、口縁部の拡張・頸部無文帯の発達・胴部文様帯の分帯等が進展する。松ノ木式は第35図231が含まれる程度で、新相段階に至りその状況は今のところ不明瞭であり、後統型式にどのような形で継承されるかは不明である。

九州では西南四国の磨消縄文系である平城 I 式とほぼ同じ内容を示す小池原上層式と在地の鐘崎 I 式の双極の展開が見られる。鐘崎 I 式は山口県、西南四国に僅少ではあるが侵入例が認められる。鐘崎式については縁帯文から埴外のものであり、口縁部文様帯とはならず、平城 I 式と同様に口唇部文様帯のまま頸部を屈曲させ胴部文様は萎縮化にあり、縁帯文土器群とは全く別方向の展開を示しているようである。縁帯文土器群との成立過程が違っており、縁帯文土器群と同様の文様系統論で理解することには無理が伴う。その意味で鐘崎式までも縁帯文土器群の範疇で把握することには躊躇せざるを得ない。

(2) 磨消縄文系土器群の消長

中津式から V 期までが西日本に於ける磨消縄文系土器群の展開である。磨消縄文系の在地化は宿毛式・福田 K II 式では明らかに狭義の磨消縄文であり、縁帯文成立期の一群も同様である。

縁帯文成立期から縁帯文土器群にかけて狭義の磨消縄文から充填縄文へと漸移し、それは北白川上層式 I 期に見られるところであり、次の段階では充填縄文から縄文地に沈線で文様を描く手法に変化する。それは平城 II 式に顕著であり、平城 II 式たる所以である。また丸底のボール状の器形の鉢も全縄文へと変化する。西南四国に於いては縄文地に直接沈線で文様を描く手法は後期中葉の片粕式、後半の伊吹町式にまで引き継がれ、縄文原体も宿毛式から平城 I 式までは R L を主体としていたものが、平城 II 式の段階で L R が出現し、片粕式、伊吹町式では L R に大部分が統一されるようである。片や九州では福田 K II 式の新段階に磨消縄文系の土器群が波及するものの、磨消縄文系土器群は九州では主体となりえず、偏在的に小池原上層式として展開し、中葉の北久根山式では磨消縄文と縄文原体 R L が残存するなどの在地化が認められる。

宿毛式・福田 K II 式の磨消縄文の形成過程も関東の称名寺式系統とは違い、宿毛式、福田 K II 式の段階で既に帯縄文的な狭義の磨消縄文帯が出現していることは注意を要する。しかし、果たして関東との堀之内 1 式にその並行関係を求め得るかは疑問である。確かに堀之内 1 式にも 3 本沈線のものが認められるものの、福田 K II 式の 3 本沈線磨消縄文帯は感覚的に言えば、引き締まったような磨消縄文であるのに対し

て、堀之内1式は間延びしたようなもので施文方法も違っているようである。また細部の属性についても、ここでは逐一列挙しないが、福田K II式と堀之内1式には共通する点は認められず、縁帯文成立期・平城I式の段階になって初めて堀之内1式と同様の属性が出現するようである。宿毛式等の2本沈線の磨消縄文が関東も含め通有なものであり、逆に3本沈線の磨消縄文が特殊といえそうである。福田K II式の分布域は瀬戸内地方に比較的限定され、III期の新段階になって拡散状態にあるものの、I、II期の段階では2本沈線の磨消縄文が主分布圏を持つものである。III期の新段階でも福田K II式は拡散するといえどもやはり依然として宿毛式系統が主体を占める地域も多く、IV・V期段階の縁帯文成立期は布施式を除いて2本沈線の宿毛式からの系譜に求めることができる。しかし、編年的には宿毛式と福田K II式は並行関係にあることは本論で述べた通りであり、2本沈線と3本沈線の磨消縄文帯は相互影響の中で展開する。つまり、宿毛式を関東の編年で示せば、ここでは称名寺式の成立過程の議論を抜きにしても、称名寺II式と並行関係を求めることができ、福田K II式も同様であろう。

西日本では縁帯文成立期を経て縁帯文土器群に変遷し、基本的には磨消縄文は解消される。文様系統からして縁帯文成立期・平城I式は明らかに宿毛式・福田K II式の次のステージの一群であり、編年的に関東と比較した場合、縁帯文成立期・平城I式・小池原上層式は堀之内1

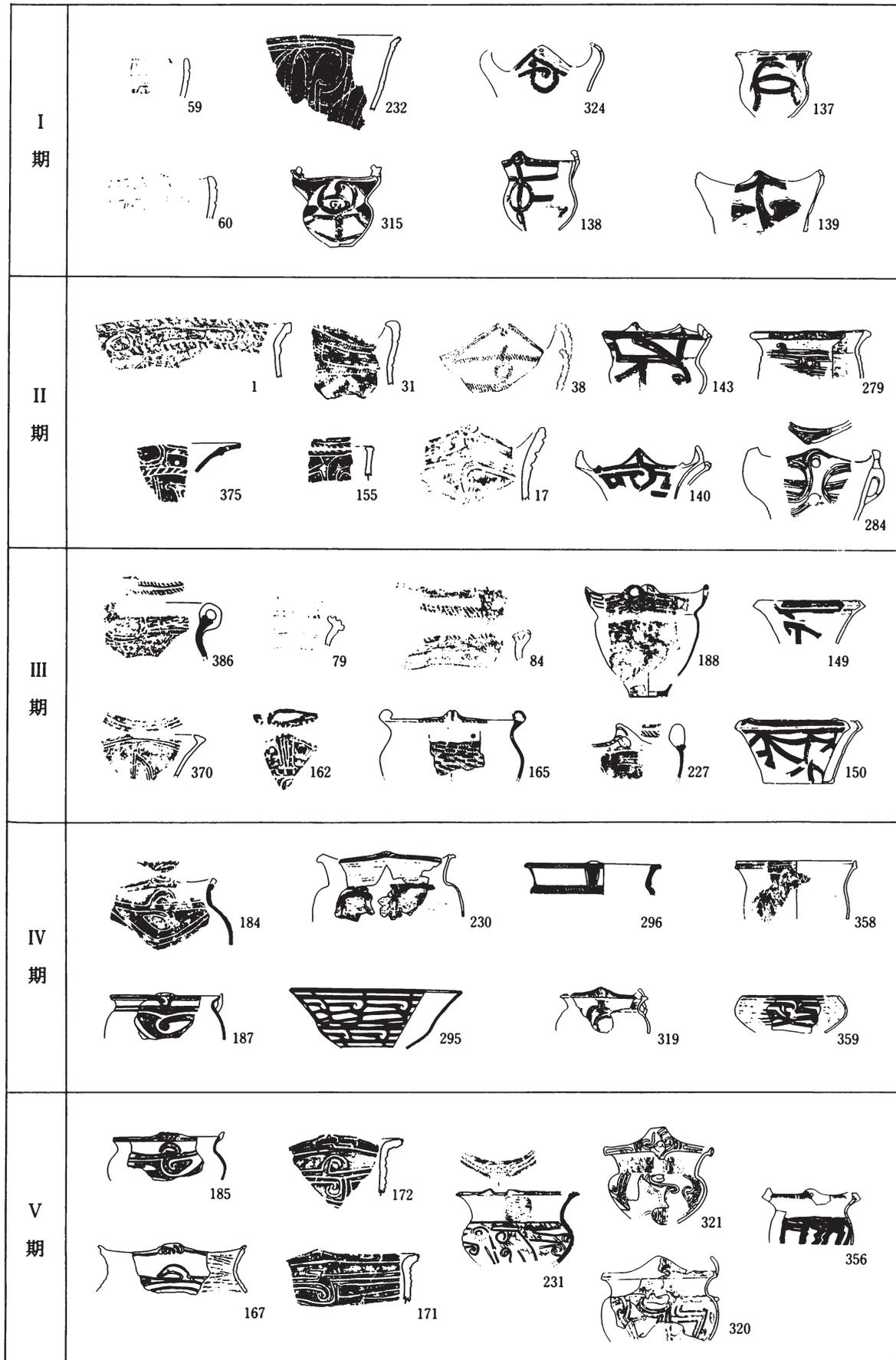
式初頭と並行関係にあった可能性がある。さらに次段階の縁帯文土器群である津雲A式は堀之内1式の中段階から新段階にかけて並行関係を求めることができることからして、後期前半の関東との並行関係を示せば第9表のようになる。堀之内1式段階ではやはり西日本の縁帯文土器群とは違い、口唇部文様帯であるなど右近次郎遺跡、平城I式と同様の口唇部形態であり、今後関東と西日本の後期前半の比較検討を待たなければならないが、縁帯文土器群は西日本の後期前半では一般的なものと認識されているものの、外周域及び関東を考慮し汎日本的な視点からすると縁帯文土器群は逆に「縁帯文」と言われる名の通り、特殊化・在地的なものといえそうである。

9. おわりに

本論の研究史で述べたように、宿毛式はかつて中津式から福田K II式にかけての過渡的な土器群との認識が持たれてきた。しかし、文様系統、分布状況からすると宿毛式は福田K II式と並行関係にある西日本では一般的な土器群といえそうである。研究史的にみて福田K II式が比較的注目されているにもかかわらず、今まで宿毛式は資料が不足しているせいもあり、十分な研究対象とはなりえなかったようである。それは前後型式が充実していなかったことにも一因があった。しかし、南四国において「縁帯文成立期」の松ノ木式が新たに追加されることにより、「縁帯文成立期」への変遷を述べる上でも、福田K II式の一系統だけではなく、宿毛式からの視点も見逃すことができなくなっている。また平城I式の成立過程についても、宿毛式の文様系統を抜きにしては語れない。特に菱形区画文、J字文の系統的な発生は宿毛式に求められるものであり、西南四国に於いては瀬戸内を中

第9表 関東との編年対比表

西日本	関東
宿毛式・福田K II式	称名寺II式
縁帯文成立期・平城I式	堀之内1式初頭
縁帯文土器群	堀之内1式中～新段階



第35図 磨消縄文系土器群の小区分

心とする縁帯文成立期に対峙するような形で展開する平城Ⅰ式の成立過程は、東九州と西南四国での磨消縄文式土器群の特質であり、宿毛式抜きでは、その様相は見えてこないものと考えられる。論を尽くしたとは言い難いが、さらに縁帯文成立期・平城Ⅰ式を経て、縁帯文土器群の展開に特に彦崎KⅠ式と津雲A式との関係が今後の課題となろう。

小稿を発表するにあたり、下記の諸氏から貴重な助言・協力を得た。記して感謝したい。また査読は出原恵三氏にお願いした。なお、本文中では非礼ながら敬称は略させて頂いた。

阿部芳郎、犬飼徹夫、今田秀樹、卜部吉博、岡本桂典、岡本健児、加藤秀之、川崎義雄、門田美知子、木村剛朗、坂本嘉弘、高橋信武、高橋 護、橘 昌信、千葉 豊、出原恵三、中野良一、丹羽佑一、橋田庫欣、橋本雄一、浜田雅代、平井 勝、藤方正治、森田尚宏、宮内克己、山本悦世、山本哲也、山村貴輝、吉成承三、渡部昭夫、宿毛市中央公民館

[参考文献]

- 寺石正路 1891 「四国島貝塚ノ発見」『東京人類学雑誌 67』
大野雲外 1917 「四国九州先住民遺跡」『東京人類学雑誌 32-2』
島田貞彦・清野謙次・梅原末治 1920 「備中國大島村津雲貝塚発掘報告」『京都帝国大学考古学研究报告 第5冊』京都大学
沢田秀穂 1936 「宿毛貝塚の瞥見」『土佐史談 57』土佐史談会
佐々木謙・小林行雄 1937 『出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺蹟』『考古学 第8巻第10号』
三森定男 1938 「先史時代の西部日本(下)」『人類学・先史学講座 第2巻』
池葉須藤樹 1950 『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝

塚調査報告』

- 安岡源一・酒詰仲男・岡本健児 1951 『宿毛貝塚』高知県教育委員会
鎌木義昌・西田 栄 1957 『伊豫平城貝塚—縄文土器を中心として—』愛媛県御荘町教育委員会
島田暁・小島俊次 1958 「布留遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報 第十輯』奈良県教育委員会
潮見 浩 1960 「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『紀要 第18号』広島大学
賀川光夫 1960 「大分県東国東郡国東町ワラミノ遺跡調査報告」『大分県文化財調査報告 第6輯』大分県教育委員会
賀川光夫 1964 「所謂鐘崎式土器の層位出土の新例(小池原式の設定)」『大分県地方史 第34号』宮崎県教育委員会委員会 1965 「綾村尾立の遺跡」『宮崎県史蹟調査報告 第10集』
岡本健児 1966 「宿毛貝塚出土縄文式土器の再検討」『研究誌 5号』高知小津高校
賀川光夫・橘 昌信 1965 「小池原貝塚」『大分県文化財調査報告 第13輯』大分県教育委員会
賀川光夫・橘 昌信 1965 「横尾貝塚」『大分県文化財調査報告 第13輯』大分県教育委員会
潮見 浩 1968 「月崎遺跡」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会
岡本健児 1968 「高知県縄文式土器型式編年観—後期縄文式土器—」『高知県史考古編』高知県
乙益重隆・前川威洋 1969 「縄文後期文化九州」『新版考古学講座 3』雄山閣
間壁忠彦・間壁霞子 1970 「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報 第7号』(財)倉敷考古館
永井昌文・前川威洋・橋口達也 1972 『山鹿貝塚』芦屋町教育委員会
岡本健児・廣田典夫 1973 『高知県広瀬遺跡第二次調査概報』十和村教育委員会
川越俊一 1973 『与浦遺跡・神田遺跡』山口県教育委員会
宍道正年 1974 『島根県の縄文土器集成Ⅰ』
賀川光夫・橘 昌信 1974 『コウゴ—松遺跡調査

- 報告」久住町教育委員会
- 岡本健児・廣田典夫・木村剛朗 1975 『高知県片粕遺跡』高知県教育委員会
- 渡辺 誠 1975 『桑飼下遺跡発掘調査報告』平安博物館
- 犬飼徹夫 1976 「愛媛県平城貝塚の再評価」『考古学ジャーナル 129』ニュー・サイエンス社
- 中村友博 1976 『縄手遺跡 2』東大阪市遺跡保護調査会
- 小都 隆 1976 『洗谷貝塚』福山市教育委員会
- 岡本健児・木村剛朗 1976 『新土居の遺跡と遺物』葉山村教育委員会
- 西田道世 1978 『黒橋』熊本県文化財保護協会
- 橋田庫欣 1977 『宿毛市史』宿毛市
- 今村啓爾 1977 a 「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌 第63巻第1号』日本考古学会
- 今村啓爾 1977 b 「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌 第63巻第2号』日本考古学会
- 八木久栄・中尾芳治 1978 『森の宮遺跡 第3・4次発掘調査報告書』難波宮址顕彰会
- 岡本健児・木村剛朗 1978 『永野遺跡出土の遺物』葉山村教育委員会
- 犬飼徹夫 1978 a 「平城上層式について」『古代文化 No231』(財)古代学協会
- 犬飼徹夫 1978 b 『岩谷遺跡』愛媛県広見町
- 岡本健児・廣田典夫・木村剛朗 1978 『三里遺跡』高知県中村市教育委員会
- 木村剛朗 1978 「高知県梶原の縄文遺跡と遺物」『土佐考古学叢書 1』
- 熊本大学法文学部考古学研究室編 1978 『頭地下手遺跡』
- 間壁忠彦ほか 1979 「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報 第15号』(財)倉敷考古館
- 坂本嘉弘 1979 『石原貝塚・西和田貝塚』宇佐市教育委員会
- 木村剛朗 1979 「高知県三里遺跡発見当時に採集の縄文遺物」『土佐考古学叢書 3』
- 泉 拓良 1979 「西日本の土器」『世界陶磁全集 1』小学館
- 前川威洋 1979 「九州縄文文化の研究」前川威洋遺稿集刊行会
- 泉 拓良 1980 「北白川上層式の細分」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 正林 護・安楽 勉 1980 『白浜貝塚』福江市教育委員会
- 西 健一郎 1980 「鐘崎式土器について」『九州文化史研究所紀要 第25号』
- 今橋浩一 1980 「堀之内式土器について」『大田区史(資料編)考古 II』大田区
- 井原忠昭ほか 1980 「叶浦(B)遺跡」『大三島・伯方島本四連絡道路埋蔵文化財調査報告書(II)』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 渡辺昌宏 1980 『淡輪遺跡発掘調査概要・III』大阪府教育委員会
- 高橋信武 1981 「片粕式の細分に向けて」『赤れんが 創刊号』赤れんが出版会
- 柿沼修平 1981 「称名寺式土器」『縄文文化の研究 4』雄山閣
- 泉 拓良 1981 a 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究 4』雄山閣
- 泉 拓良 1981 b 「縄文後期の土器」『縄文土器大成 3』講談社
- 橘 昌信 1981 『黒崎貝塚』黒崎貝塚調査会
- 岡本健児・宅間一之・山本哲也 1981 『山根遺跡の発掘』春野町教育委員会
- 田中良之・松永幸男 1981 『荻台地の遺跡VI』荻町教育委員会
- 松田真一 1981 「山添村広瀬遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 第一分冊』奈良県立橿原考古学研究所
- 中島庄一 1981 「土器文様の変化—称名寺様式を中心として」『神奈川考古 12号』神奈川考古同人会
- 田中良之 1982 「磨消縄文土器伝播のプロセス」『古文化論集 森貞次郎博士古稀記念』
- 木村剛朗 1982 『平城貝塚』愛媛県御荘町教育委員会
- 前田義人 1982 『稗田川遺跡』(財)北九州市教育文化事業団
- 坂本嘉弘 1983 『大分県史 先史篇 I』大分県

- 木村剛朗 1983 「土佐における後期縄文文化について」『高知の研究 1』清文堂
- 市立市川考古博物館 1983 『シンポジウム堀之内式土器の記録』
- 久保穰二郎 1983 『島遺跡発掘調査報告書 第1集』北条町教育委員会
- 中越利夫 1983 『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報 VI』広島大学
- 松本豊胤・六車恵一ほか 1983 『新編香川叢書考古篇』香川県
- 中越利夫 1984 『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報 VII』広島大学
- 田中良之・松永幸男 1984 「広域土器分布圏の諸相—縄文時代後期西日本における類似様式の並立—」『古文化談叢 第14集』九州古文化研究会
- 木村剛朗 1984 「高知県片粕遺跡(国道321号線拡張工事)出土の縄文土器」『遺跡 第25号』遺跡発行会
- 新東晃一 1985 『中原遺跡』志布志町教育委員会委員会
- 潮見 浩 1985 「岡山県津雲貝塚」『探訪 縄文の遺跡 西日本編』有斐閣
- 犬飼徹夫 1985 「西四国における小松川式の設定」『愛媛考古学 8』愛媛考古学協会
- 柴尾俊介・佐藤浩司 1985 『下吉田遺跡』(財)北九州市教育文化事業団
- 工藤俊樹 1985 『右近次郎 II』大野市教育委員会
- 田中良之 1985 「磨消縄文土器の伝播」『北九州市史 総論 先史・原史』北九州市
- 植田法彦・前田敬彦 1985 『亀川遺跡 V』海南市文化財調査研究会・海南市教育委員会
- 山本哲也・廣田佳久・下村公彦 1986 『宿毛貝塚発掘調査報告書』高知県教育委員会
- 高橋 護 1986 「彦崎貝塚」『岡山県史 第18巻 考古資料』岡山県
- 鎌木義昌 1986 a 「福田古城貝塚」『岡山県史 第18巻 考古資料』岡山県
- 鎌木義昌 1986 b 「津雲貝塚」『岡山県史 第18巻 考古資料』岡山県
- 鎌木義昌 1986 c 「中津貝塚」『岡山県史 第18巻 考古資料』岡山県
- 岩崎二郎 1986 『仏並遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会
- 犬飼徹夫 1986 『愛媛県史資料編』愛媛県
- 泉 拓良・玉田芳英 1986 「文様系統論」『季刊考古学 第17号』雄山閣
- 田野町教育委員会 1987 『丸野第二遺跡』
- 木村剛朗 1987 『四万十川流域の縄文文化研究』
- 久保穰二郎 1987 『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会
- 中尾憲市・前田敬彦 1987 『溝ノ口遺跡 II』海南市教育委員会
- 岡 美詠子 1987 「九州における後期縄文土器について」『肥後考古 第6号』肥後考古学会
- 山本悦世・石坂俊郎・松岡かおり 1987 『岡山大学構内遺跡調査研究年報 5』岡山大学
- 足立克己 1987 「山陰地方における縄文後期前～中葉土器について」『東アジアの考古と歴史 中』岡崎敬先生退官記念集 同朋社
- 丹羽佑一 1987 『香川県史 13 考古』香川県
- 工藤俊樹 1988 『鳴鹿手島遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財センター
- 岩崎二郎 1988 「仏並遺跡71-O Dの縄文土器」『研究紀要 1』大阪府埋蔵文化財協会
- 坂本嘉弘 1988 『大分市史』上巻 大分市
- 下澤公明 1988 a 「舟津原」『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査 II』岡山県教育委員会
- 下澤公明 1988 b 「阿津走出」『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査 II』岡山県教育委員会
- 大山真充・真鍋昌宏 1988 「大浦浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 V』香川県教育委員会
- 前田義人 1988 『貫川遺跡 1』(財)北九州市教育文化事業団
- 阿部芳郎 1988 「堀之内1式の土器の構成と変遷」『信濃 第40巻第4号』信濃史学会
- 松永幸男 1989 「土器様式変化の一類型」『横山

- 浩一先生退官記念論集 I 生産と流通の考古学]
- 井石好裕 1988 『粟生遺跡』(財)和歌山県文化財センター
- 若林 卓 1989 『岡山大学構内遺跡調査研究年報 6』岡山大学
- 谷岡陽一・中原 斉 1989 『栗谷遺跡発掘調査報告書 I』福部村教育委員会
- 玉田芳英 1989 「中津・福田K II式土器様式」『縄文土器大観 4』小学館
- 泉 拓良 1989 「緑帯文土器様式」『縄文土器大観 4』
- 千葉 豊 1989 「緑帯文系土器群の成立と展開」『史林 72巻6号』
- 泉 拓良・松井 章 1989 「福田貝塚資料」『山内清男考古資料 2』奈良国立文化財研究所
- 田中 茂 1989 「尾立遺跡」『宮崎県史 資料編考古1』宮崎県
- 縄文セミナーの会 1990 『第4回 縄文後期の諸問題』
- 石井 寛ほか 1990 「特集 称名寺式土器に関する交流研究会の記録」『調査研究集録 第7冊』(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 水ノ江和同 1990 『土佐井地区遺跡』大平村教育委員会
- 千葉 豊 1990 a 「京都大学病院構内遺跡の調査」『京都大学埋蔵文化財調査報告 IV』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 千葉 豊 1990 b 『小森岡遺跡』竹野町教育委員会
- 谷岡陽一・中原 斉 1990 『栗谷遺跡発掘調査報告書 III』福部村教育委員会
- 宮本一夫 1990 『文京遺跡 第8・9・11次調査』愛媛大学
- 西脇対名夫 1990 『伊木力遺跡』多良見町教育委員会
- 植田文雄 1990 『今安楽寺遺跡』能登川町教育委員会
- 後藤一重 1990 『上野遺跡』豊後高田市教育委員会
- 渡部昭夫 1990 『永井遺跡』香川県教育委員会
- 千葉 豊 1991 「縄文時代後期の土器」『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館
- 植田文雄 1991 「拡張,あるいは展開する縄文文化」『滋賀考古 第5号』滋賀考古学研究会
- 澤下孝信 1991 「土器様式伝播考」『古文化談叢 第25集』九州古文化研究会
- 前田光雄 1991 『尻貝遺跡』高知県大月町教育委員会
- 出原恵三 1991 『松ノ木遺跡 I』高知県本山町教育委員会
- 田中迪亮ほか 1991 『五明田遺跡』頓原教育委員会
- 石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録 第9冊』(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 千葉 豊 1992 「西日本縄文後期土器の二三の問題」『古代吉備 第14集』古代吉備研究会
- 水ノ江和同 1992 「小池原上層式・下層式土器に関する諸問題」『古文化談叢 第27集』九州古文化研究会
- 出原恵三 1992 『松ノ木遺跡 II』高知県本山町教育委員会
- 山本悦世 1992 『津島岡大遺跡 3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 前田義人・小方泰宏 1992 『貫川遺跡 5』(財)北九州市教育文化事業団
- 岩崎 弘 1992 『貫川遺跡 6』(財)北九州市教育文化事業団
- 菅 哲彦 1992 『小松町誌』小松町
- 木村剛朗 1992 「高知県の縄文遺跡とその文化」『第四紀研究 第31巻第5号』
- 前田光雄 1993 a 『松ノ木遺跡 III』高知県本山町教育委員会
- 犬飼徹夫 1993 「愛媛県平城貝塚出土 II 式土器の再検討」『古代吉備 第15集』古代吉備研究会
- 出原恵三 1993 「南四国中央部における縄文後期土器」『遺跡 第34号』遺跡刊行会
- 前田光雄 1993 b 「平城式についての覚え書き」『牟邪志 第6号』武蔵考古学研究会

写真図版



宿毛式 I 群 1 類 (No. 2)



宿毛式 I 群 5 類 (No. 54)



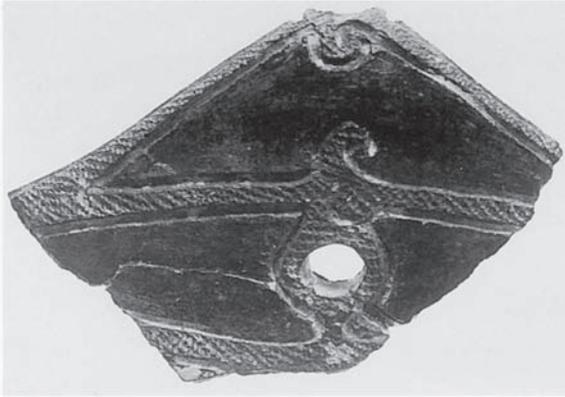
宿毛式 I 群 6 類 (No. 60)



宿毛式 I 群 4 類

※縮尺は不統一

PL. 2



宿毛式の菱形区画文 (No. 38)



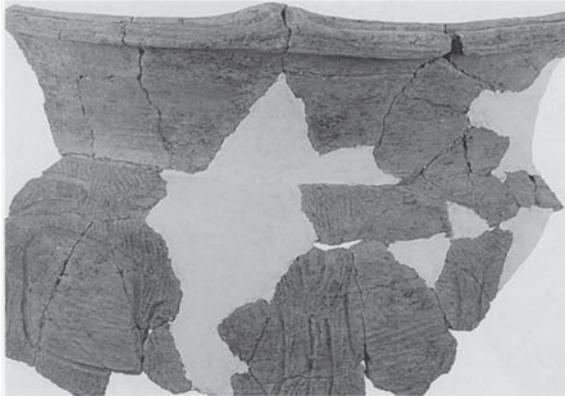
同左の波頭状文様の入組文



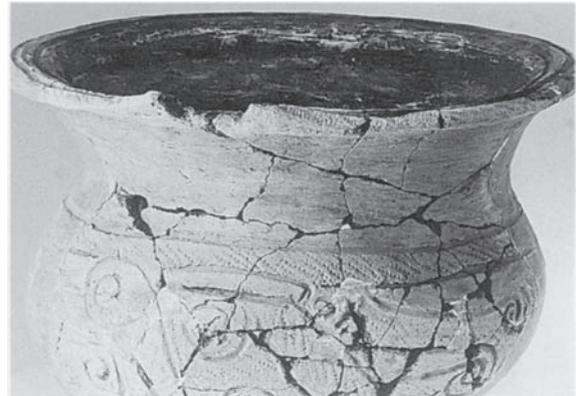
平城 I 式 (古段階) の文様構成 (平城貝塚)



平城 I 式 (新段階) の加飾 (平城貝塚)



松ノ木式の文様構成 (No. 230)



松ノ木式の充填縄文 (No. 231)



松ノ木式の逆L字文の反転現象



松ノ木式の逆L字文のポジ



宿毛式の口唇部文様帯 (No. 39)



同左の口唇部断面



平城 I 式の口唇部文様帯 (No. 103)



同左の口唇部断面



平城 II 式の口縁部文様帯 (平城貝塚)



同左の口縁部断面

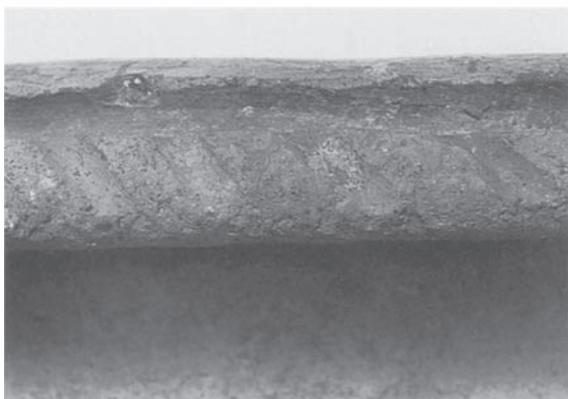


平城 II 式の文様構成 (平城貝塚)



同左の「内文」の発達

PL. 4



宿毛式 I 群 1 類の口唇部文様帯 (No. 8)



同左の口唇部断面



宿毛式 I 群 8 類の口縁部文様帯 (No. 79)



同左の口縁部断面



宿毛式 I 群 9 類の口縁部文様帯 (No. 86)



同左の口縁部断面



宿毛式 I 群 9 類の小円形刺突 (No. 84)



宿毛式 I 群 2 類の巻貝回転刺突と擬縄文 (No. 21)

研究紀要 第1号

1994

発行 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

南国市篠原南泉1437-1

Tel. 0888-64-0671

Fax. 0888-64-1423

印刷 共和印刷株式会社